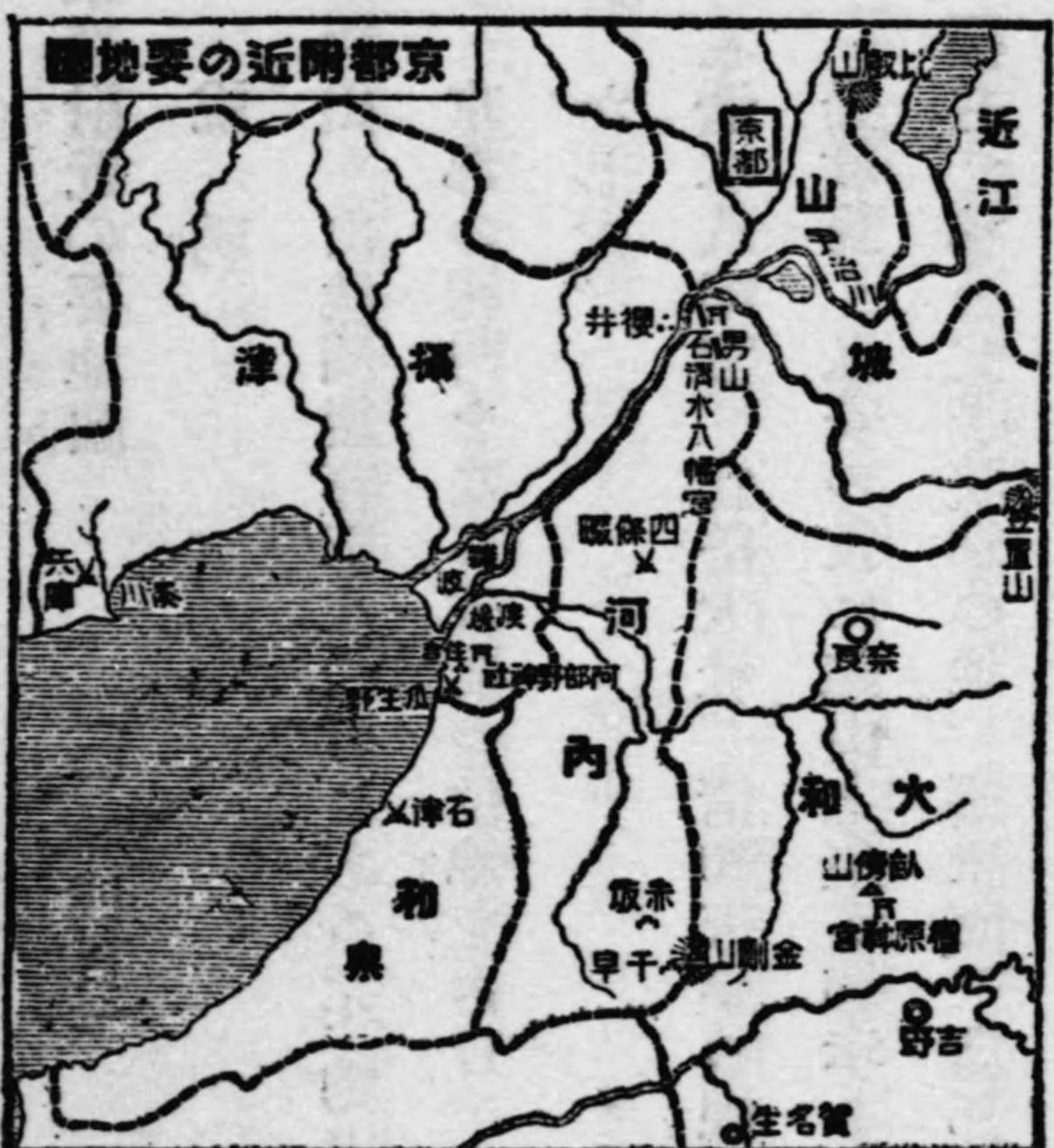


渡邊 淀川の河口。大阪市八軒屋附近のこと。



笠置山 元弘元年八月二十七日後醍醐天皇が行幸。しばらく行在所とされた處。山

河部野神社 別格官幣社。北畠親房及び

其の子顯家を祀る。攝津國東成郡住吉

村峯野にある。

住吉 有名な住吉神社がある。

瓜生野 正平三年山名時氏細川顯氏等と

楠木正行が戦つて大いに敵軍を破つた

ところ。

石津 延元三年五月二十二日、北畠顯家

が高師直の軍と戦つて破れ、戦死した

ところ。

城國相樂郡笠置村にある。

吉野 延元元年十二月廿一日後醍醐天皇が行幸あそばされ行宮を營み給ふた。吉野朝廷の所在地。

賀名生 穴生とも書く。楠木正行の戦死後南朝の勢ひ振はず後村上天皇は一時吉野

から御遷幸あそばされしばらく吉野朝廷の所在地となつた處。

赤坂 元弘元年九月楠正成が城を築いて忠義の兵を起した處。河内國南河内郡赤城村にある。

千早 元弘二年五月楠木正成がここに城を築き敵軍をなやました處。千早村にある。

兵庫湊川 延元元年五月廿五日楠木正成が戦死した處。

楠木正成湊川に奮ひ戦ふ (一一八頁)

一 説明

イ 楠木正成

口 足利直義

ハ 薬師寺十郎次郎

この繪は太平記の記事によつて描いた想像書である。時は延元元年五月廿四日楠木正成は朝の八時頃より夕べの四時頃まで前には直義後には尊氏の本隊と全く腹背に強敵を受け弟正季と共に縦横無盡に駆け抜け獅子奮迅の勢を以て奮戦し矢を負ふこと蝸の如きを物ともせず進みうち將に直義を獲へんとしたが其の家來薬師寺十郎次郎がためにさへぎられ心惜しくも長蛇を逸した様を描示したのである。

二 主眼



後醍醐天皇の建武中興も逆臣足利尊氏のため破れ世は再び争亂の巷となつた。この時に際し正成は誠心誠意勤王のため僅かの兵を以て足利尊氏直義兄弟の大軍と湊川に戦ひ衆寡敵せず終に名譽の戦死を遂げた。正成の純忠無比なるに感ぜしむるにある。

三 参考解説

1 楠木正成の家訓

- 一、禮厚くして人の非を咎むるな。
- 二、天堂を願はんよりも、地獄を作るな。
- 三、人の事をいはんよりも我が非をかへりみよ。
- 四、立身を思はんよりも、主恩を忘るるな。
- 五、忠に安んじて、死を恐るるな。
- 六、手柄をたてせんよりも、下知に違ふな。

- 七、身のために身を害ふな。
 八、我が命は主親のものわたくしに捨つるな。
 九、金錢をためんよりは、借錢するな。
 一〇、酒を飲むとも飲まるゝな。
 一一、慈悲はするともかはりを取るな。
 一二、着物は寒くない程。
 一三、食物は腹一ぱい。
 一四、物書かば讀めるやうに。
 一五、學問は一生せよ。
 一六、矢鏃砲は當てるが上手。
 一七、刀は切るるが名作。
 一八、俗は家職を専らにして後生を次にすべし。

- 一九、僧は菩提を専らにして世事を次にすべし。
 二〇、舌は柔かなる徳に依りて全たし、齒は堅き徳によりて全たし。
 二一、足ることを知りて、及ばぬことを思ふな。

2 同 遺訓

某今度討死せば、天下は尊氏掌握せむ、然りとて家を立て命を助からむために、彼れに降參してちちが一生の忠烈を捨つべからず、玉は碎けても其の白きを改めず、竹は焚ても其の節を毀たずと云へり。汝能々思ふべし。その爲めに一族郎徒あまたの人々を附け置きぬる上は、朝敵よせ來るとも何のわづらはしきことかあらむ。降參不義の行跡あらば、大國あまたの主となりて、家富み榮ゆとも何かせむ、不義の富貴は大なる恥とせり。上へ對し奉り後めたき行ひ、毛頭あるべからず、是をつつしむを以て汝が孝行の第一とすべし。連枝の者どもと水魚の思をなして、某にかはりて憐れむべし。家の郎徒を扶助すること必ず父の如く郎徒は主

をたのみてこそ、天下の御事にはあふぞかし。八尾の僧正私用恩地をもて、ちちの思ひをなし、毎事母に談すべからず、晝夜學問を怠るなかれ。義理をよく尋ねきはめて文學を識るを強ちにすべからず、諸語を暗んぜんことを忽にすべからざるこそ肝要なり。

第二十四 新田義貞

新田義貞木目峠の風雪をおかして北國におもむく。

(一一〇頁)

一 説明

イ 皇太子恒良親王

ロ 新田義貞

ハ 家 來

この繪は太平記の記事を基として描いた想像畫である。如何にもよくまとまつてゐて雪中行軍の困難な有様が思ひやられる。義貞が後醍醐天皇の勅命を受け皇太子恒良親王及び尊良親王を奉じて北國に下向し、復興の義軍を起さうと比叡山の行在所を延元元年十月十日に出發し途中船で琵琶湖を横ぎり翌日海津に到着し越前敦賀郡と南條郡の堺なる木目峠に差しかゝり折りからの風雪になやまされ非常の困難に遭

遇された處である。

二 主眼

義貞 が皇太子恒良親王と尊良親王を奉じ北國下向の途にて大風雪にあひて一行の困難せる有様を知らしめてこれに同情せしむると共に逆臣尊氏の行爲を惡ましめ以て忠君愛國の至情を起さしむるにあるのである。

三 参考解説

1 北國下向勢凍死の事

(延元元年)十月十一日義貞朝臣七千餘騎にて「鹽津」「海津」に着き



給ふ。七里半の山中をば、越前守護尾張守高經大勢にて差塞いだりと聞えしかば、是より道を替て「木目峠」をぞ越給ひける。北國の習に十月の初より高き峯々に雪降て、麓の時雨止時なし。今年は例よりも陰寒早くして、風紛に降る山路の雪、甲冑に洒ぎ、鎧の袖を翻して面を打こと烈しかりければ、士卒寒谷に道を失ひ、暮山に宿無して木の下巖の陰にし、まり臥、適火を求得たる人は弓矢を打焼て薪としいまだ友を離れざるものは互に抱附て身を暖む。元より薄衣なる人、飼事無しし馬共、此や彼に凍死て行人道を去敢ず彼の叫喚大叫喚の聲耳に滿て、紅蓮大紅蓮の苦み眼に遮る。今だにかゝりけり。後世を思遣ること悲しけれ。

河野、土居、得能は三百騎にて後陣に打けるが「天の曲」にて前陣の勢に追後れ、行べき道を失て、「鹽津」の北にをり居たりけるを、佐々木の一族と熊谷と取籠て討たんとしける間、相かゝりに懸りて皆刺違へんとしけれども、馬は雪

に凍えて働かず。兵は指を墜して弓を控得ず。太刀の柄をも拳得ざりける間、腰の刀を抜いて其つかを土につかへ、覆に貫かれてぞ死にける。千葉介貞胤は五百餘騎にて打けるが、東西くれて降雪に道を踏迷て敵の陣へぞ迷出たりける。進退歩を失ひ、前後の御方に離れければ、一所に集て自害せんとしけるを、尾張守高經の許より使を立て、弓矢の道今は是迄にてこそ候へ、枉て御方へ出られ候へ、此間の儀をば身に替ても申宥むべしと、殷懃に宣ひ遣はされければ、貞胤心ならず降參して高經の手にぞ屬しける。

同十三日義貞朝臣「敦賀津」へ着き給へば、氣比彌三郎大夫三百餘騎にてお迎に參じ、春宮、一宮、總大將父子兄弟を先づ金ヶ崎の城へ入奉り、自餘の軍勢をば、津の在家に宿を點じて長途の窮屈を相助く。

爰に一日逗留有て後、此勢一所に集り居ては叶はじと大將を國々の城へぞ分られける。大將義貞は春宮、一の宮に附進らせて。金ヶ崎城に留り給ふ。子息越後

守義顯には、北國の勢二千餘騎を副て越後國へ下さる。脇屋右衛門佐義助には千騎餘を副へて瓜生が杣山城へ遣はさる。是は皆國々の勢を相附て金ヶ崎の後攻をせよとの爲なり。(太平記)

春宮に供奉して北國に下向した人々。

- 一宮中務親王(尊良) 洞院 實世 同 定 世
- 三條 泰 季 御子左爲次 頭大夫行房及其子行尹
- 新田 義 貞 新田 義 顯 脇屋 義 助 脇屋 義 治
- 堀口 貞 満 一ノ井 義 持 額田 爲 綱 里 見 義 譽
- 大江田 義 政 島 山 義 俊 桃 井 義 繁 山 名 忠 家
- 千葉介 貞 胤 宇都宮 泰 藤 宇都宮 泰 氏 河 野 通 治
- 得能 通 綱 土 岐 頼 直 一 條 爲 治

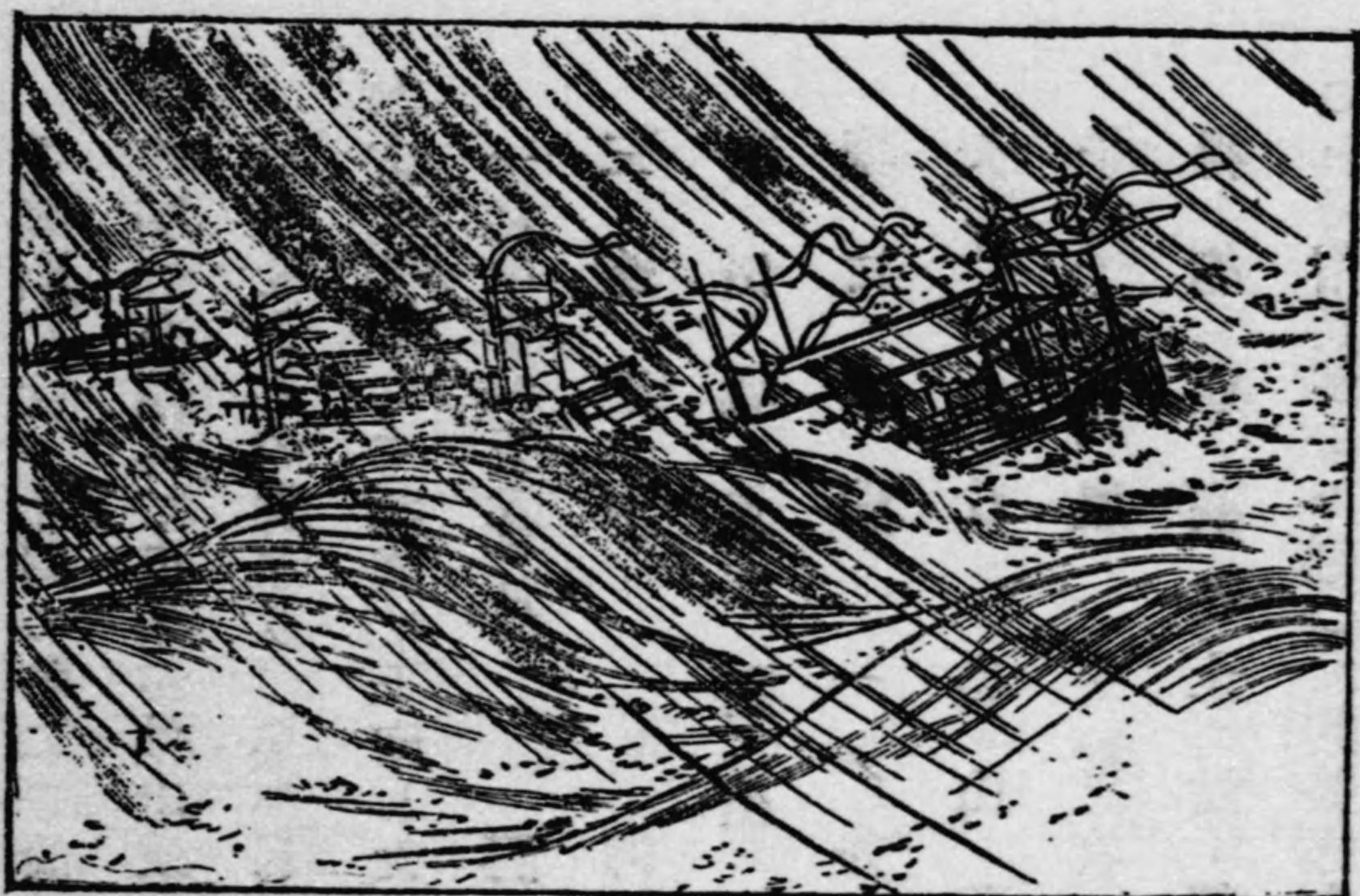
これに僧兵が少々雜つて其勢都合七千餘騎 (太平記)

第二十五 北畠親房と楠木正行

北畠親房等海上にて大風にあふ。(一二四頁)

一 説明

この繪は太平記の記事によつて描いた想像畫である。北畠親房は子の顯家が和泉にて戦死し又新田義貞は藤島にて戦死して南軍の振はざるを回復せんと志し義良親王及び宗良親王を奉じ陸奥に下らんと延元二年閏七月二十五日吉野を發し八月十七日伊勢大湊から出帆したが遠州灘を通り常陸沖にかかつた際俄に颶風に會ひ船が散りくになり義良親王は伊勢



の篠島へ宗良親王は遠江白羽港に入り給ふ。霞が浦に避難して小田城に入つた親房はここを根據として興復の軍を起すこととなる。

二 主眼

北畠親房及顯信等が義良親王及び尊良親王を奉じ陸奥へ下向の際颶風に遭ひ四散して非常の困苦を忍びて興復をはかられし有様を知らしめ飽くまで勤王の志を養ふにある。

楠木正行如意輪堂に歌をしるす。

(一二七頁)

一 説明

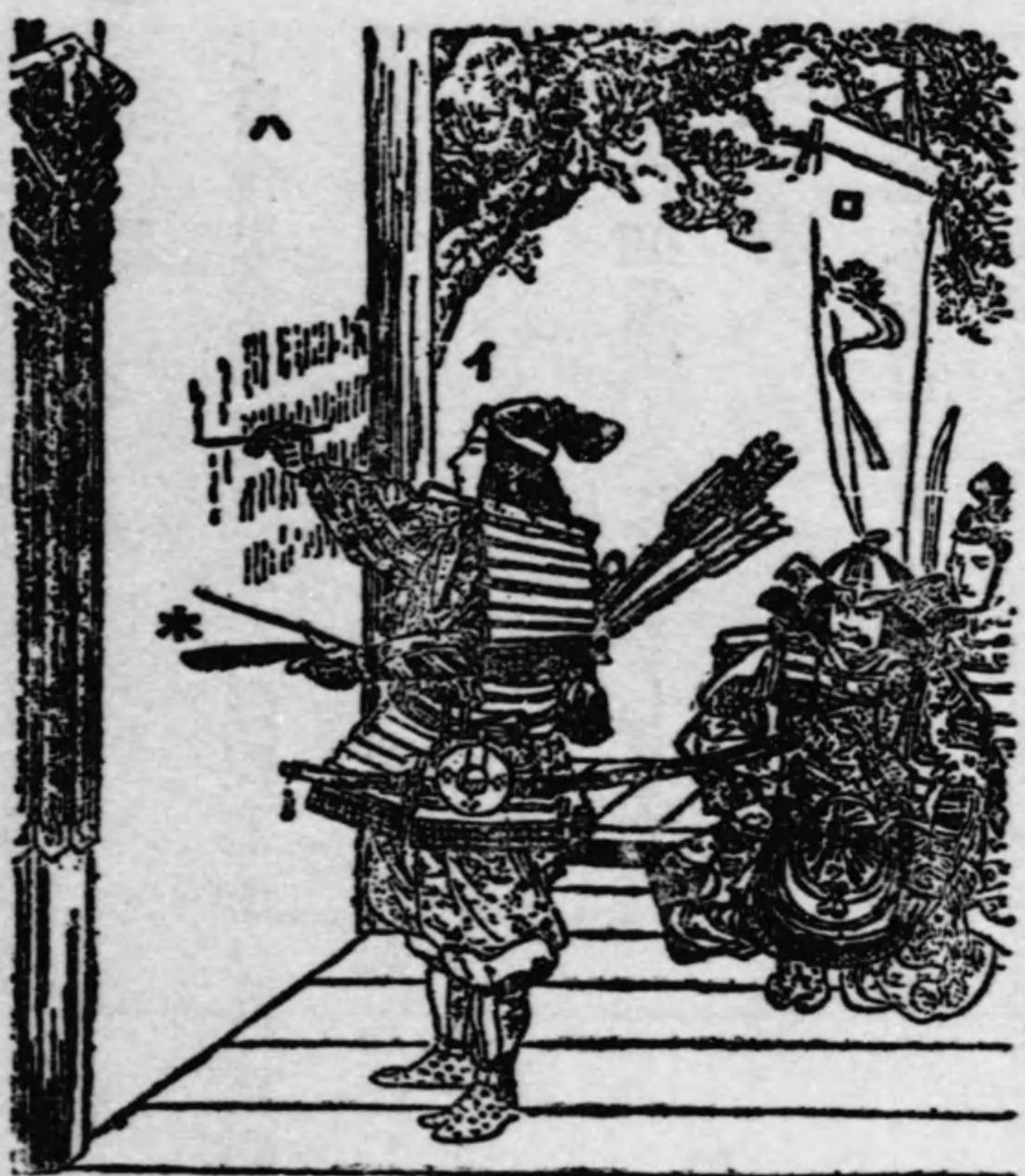
イ 楠木正行

ロ 菊水の旗

ハ 如意輪堂の壁板

ニ 幢

ホ 矢 立



人の氏名を記し最後に「かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞとどむる」

この繪は太平記の記事によつて描いた想像畫である。楠木正行は父正成の遺志を継ぎ兵を河内に擧げしげしげ敵の大軍を破つたので尊氏は大いに恐れ六萬の大兵を以て高師直師泰を大將として攻めさせた。正行はこの度の戦こそ雌雄を決すべき最後の激戦と思ひ定めて弟正時を始め一族と共に正平二年十二月吉野の行宮に參内し天顔を拜し有りがたき勅語を賜り御前を退出し先帝後醍醐天皇の御陵を拜し如意輪堂に到り壁板に一族百四十三

と記し翌年正月五日高師直師泰と四條畷で花々しく戦つて戦死した。この時正行は僅かに二十三歳であつた。

二 主 眼

楠木正行を始め一族百四十三人死を決して高師直師泰兄弟の率ゆる六萬の大軍に打ち向ひし決心の程に同情せしめ。正行がよく忠孝一本の道を全うした若者であることを思念せしめるにある。

三 参 考 解 説

1 神皇正統記 六卷、神代より後村上天皇吉野にて踐祚に至るまでの間に於ける歴代の大要を記し皇統の由て来る處、國家の治亂興亡等を説き、南朝の天子が即ち神皇の正統たるを論じたるものにして、議論頗る温健なり。此の書の奥書によれば一卷の参考書なく、童蒙に示さんがため延元四年秋作り、興國四年秋七月誤謬ある處を修正せりといふ。櫻雲記卷中には興國元年之を作りて吉野へ献上すといへ

り。

2 楠木正行の活動 正行は河泉の兵を以て師直の大軍にあたり四條畷の激戦となりしに遂に破れて一族と共に戦死したのは千秋の恨事である。時に正平三年正月五日年齢僅かに二十三歳であつた。

第二十六 菊池武光

菊池武光少貳頼尙を大保原に破る。

(二三二頁)

一 説明

- イ 日月の旗
- ロ 起請文
- ハ 池武武光
- ニ 菊池槍 (穂先が直刀をなした特別の拵へ)
- ホ 小貳頼尙の軍
- ヘ 筑後川の支流
- ト 花立山

この繪は全く想像畫であるが土地の状態はよく表はされてゐる。時は正平十四年七

月征西將軍懷良親王を奉じて菊池武光は筑後味坂の庄に陣して小貳頼尙と對してゐる處。頼尙は曾つて一色直氏に攻められた時菊池氏に助を請ひ「子孫七代まで菊池氏には弓を引かぬ」と血判した起請文を出した。その舌の根の乾かぬうちに之を破つたので菊池はこの起請文を日月の旗印の竿に掲げて大い少貳氏の不信を表明し之をあざけたのである。

二 主眼

北畠親房始め吉野朝の忠臣多く殺し南風大いに競はざるに際し九州にては菊池の一族

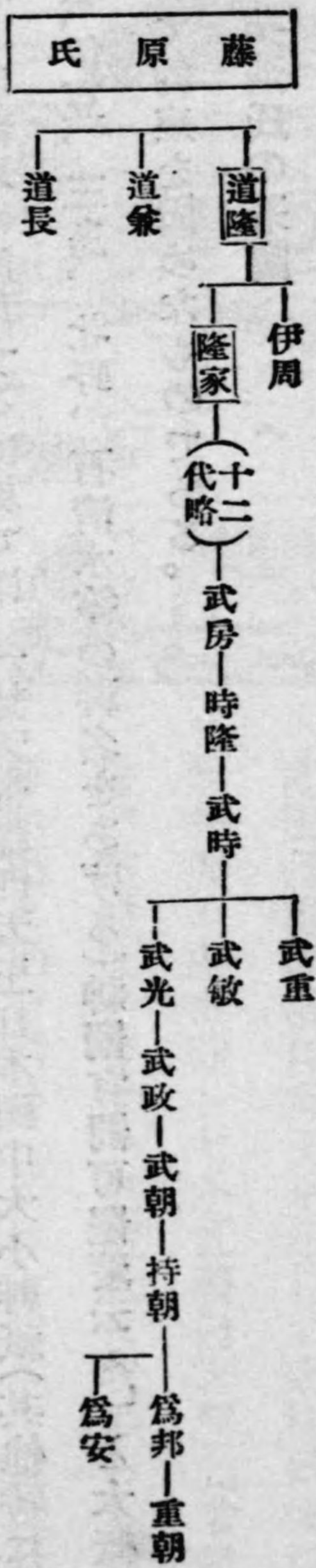


義心鐵よりも堅く大いに敵軍を破り官軍の意を強くせしめたことを知らしむるにあらるのである。

三 参考解説

- 1 起請文 神明に誓ひて契約を變じない事を書いたものである。従つて神社佛閣から發する符印の附いた紙に書くのが通例である。此の符印を牛王ウシノミといふ。其最も名高いのは熊野の諸社から出る熊野牛王である。これは烏點といつて、烏七十五羽を以て、熊野御寶印といふ字形に並べたもので、武士の階級の間に用ひられたのは、殆んど此の牛王である。此牛王の紙上に約束の事項を書き、其の終りには、若し此約束に違背するに於ては、「梵天帝釋四天王日本國中大小神祇(其他特に箱根、伊豆、三島、北野、石清水等の神名をあげる)神罰宣罰可罷蒙云々」と大概書いて約束を固めたものである。

2 菊池氏の系圖



3 筑後川の義戦 九州の全土は大方賊軍方である。それに引きかへて肥後には忠義に聞えた菊池の一族が代々南朝に御味方の旗を翻してゐる。頃しも正平十二年阿蘇山嵐のふき荒さむその霜月の中つ頃菊池肥後守武光は山越え川越え嶮も難所も物かはと五千餘騎の旗風雄々しく日向路さして攻め入つた。六笠の城に畠山治部大輔が官方に抗して居るのを一と揉みにする勢である。之を知つた大友刑部大輔氏時と宇都宮大和前司、肥前刑部大輔とは互に牒し合せ、後から菊池をとりこめようとして旗をあげた。今はたゞ籠中の鳥か網代の魚と菊池を哀れに思はぬものは一人もない。けれども長の年月九國の全勢を一手に引受け

何れの敵の動靜も見透くばかり知つてゐた菊池には道は塞がれようとも後はへだてられようと物物の數かは。況してその勇氣にはなほ又感嘆せぬものは一人もなかつた。まづ手初めに畠山の子の民部少輔の守つた三俣の城を一屠りとして首をとること三百餘級、進んで根城をも手の中に收めんとする勢の凄じさにおそれてか、畠山は父も子もすげなく深山の蔓を傳ふて逃げ入つた笑止さよ。逃げるは追はぬ勇士の寛度。
 「軍もこれまでぞや還せや」
 と下知は凜として一条も紊さぬ。後を塞いだ賊軍は更に戦ふ勇氣も見えぬので矢の一羽も損はず悠々として肥後の館へ歸り行く。
 勇あるものは必ず義あり。この年北に戦があつて太宰少貳頼尙は一色宮内大輔にうち敗けて古浦城に立籠つたがその運命も旦夕に迫つた、天を仰いで黙考することしばし。

「ウム！ 肥後の菊池殿に救を求めると外にない」
とこゝに大廣間には軍評定が開かれた。

「一色の圍みは仲々嚴かであるぞ。誰かこゝをぬけて肥後殿に使用するものはなきか？」

大將少貳がキツト一同を見廻した時憂色は更に深く閉じた。誰一人として望み出るものはない。「この軍に敗ければ日頃情もない大將を捨て、一色殿の味方に降り我が一身の安全をはかるが勝者の業」とこゝまでに行く先をきめてゐた城兵にはこの場の仰も更に耳朶にはひびかなかつたのである。

「これほどの大事に使命を果すものはなきか。汝等代々少貳が祿を食みながら……あゝ情ない今はの仕儀何たる神の報ぞや!!」

涙は大將の兩頬を傳ふてきらめいたが城兵の口は愈々緘してゐる。「日頃の情御大將自らが御使ひに參られて然るべし。」といった面持ちで。頼尙更に語をふる

はせて告げた。

「この大役を果したるものは少貳が家の重臣なるぞ、賞祿は望にまかせ子々孫々までの恵を垂るゝぞや」

城兵はじめ色めき立つた。

「何と重賞を與ふるとの仰や。近頃珍しいことでは御座らぬか。恩賞も情も日ごろから賜らば一儀に及ばぬ易き使命を。」

隣座を省みてのひそく話。頼尙重ねて呼ぶ。

「誰ぞあるか」

つひに進み出た一人の臣が忠義の操を重賞に賭けて南の方肥後への使に向つたのである。

こゝは菊池の館先……………

「君少貳殿よりの御使ひでござる」

「少貳の使とか、疎忽なき様手厚くいたはり遣はせ。疲も癒えなば目通りへ通せ」

いかに人からとはいへ同じく大將にかほど情の別のあるかとおもへば使者は感激の涙にむせんで、よしや少貳の家は亡びてもこの御方さへあらば主に持ちたれいものと勇んで出でた菊池が前、さても小人の義心の卒直なものよ。

菊池は承知の旨の返書を渡して使者をいたはり遠路の慰めに盃をとらせてさて曰く。

「菊池、一家を捧げてお救ひ申さう。武士は義を知るが何より大切なり。かへりなば朋輩にも告げて主家の爲めにつくされよ。」

見れば門口に鞍おいて牽かれた駿馬一頭使命を果したとての引出物、菊池はさすが義將である。

使者は歸つて菊池が館の有様やら君臣一體となつて王軍につくしてゐる有様や

ら殊に手厚い禮遇の模様など細かに語告げ。頼尙をはじめとして有難涙にくだないものは一人もない。

「菊池殿がこの城の後詰賜るとの御返事忝なし。頼尙菊池殿の義によつて祖父の威に對へ奉ることが出来る。今日は何たる吉日ぞ……祝ひ申さう」

城中では一同が蘇生のよろこび。敷を重ねたサカジキ鶴ニに、早や立田の秋の色赤く夕風渡る比ほひは庭樹の下櫓の上に、より／＼に一色勢を見下しての豪談放話。

1 「何とたわけた一色殿では御座らぬか。城中の——機嫌に引きかへてこの蚊の多い濠ばた、草むらに後生大事に番して居られたとは。イヤ。ハヤ」

2 「左様明日にも引くその時は影武者共は明かぬ睡眠に一寸先きも見えまいに。」

1 「その時こそこちらの運時。駆けちらして御目にかけてよう」

2 「御邊の勇氣は見上げ申した。菊池殿の御加勢の沙汰なき時はとんとこの

「勇氣はなかつたものを。」

毎夜濠の北詰めに下りる水鳥が一夜月の明りに行く先きを亂したのが見えた。菊池の勢が来たのである。

驚いたのは城を圍んだ一色方の面々。

「さても不思議や、思はぬ後詰めは……オ、肥後の武光に救を求めたとは、……惜しき圍みも解かずばならぬか……」

宮内大輔をはじめとして。老臣宿將皆事の意外に驚きおそれた。さてあくる日の合戦には浮足立つた一色勢を中にとりこめて散々に打つたので少貳は辛き運命をもちかへし天上天下このよるこびはなしと。恭しく一書を懐にして武光が陣所へやつて来た。

「扱て菊池殿御身が義心今更ながら、某にとつては家門の大恩人この鴻恩はいづかな忘じ申さう……これ御覽ぜられよ、吾が後七世までの起請文熊野牛王ベツツの

裏にかいて御座る。肥後の御一家に向つては弓矢を引かぬ吾がまごゝろに御座る」

武光之を手にとつて見れば全くまごゝろをこめた起請。

「ヤ、頼尙殿！太宰殿!!之は血書では御座らぬか」

「いかにも。……御身の情に聊かのちかひ。」

「是には及ばぬものを。太宰殿、武士は相見互ひであるに。……お心がけ天晴れ。……時に頼尙殿。畏き事ながら南風競はず、九州のうちすら某が細手にはあまり申す。大友といひ、宇都宮といひ大宮司といひ、さてもく順逆を知らぬ族ヤカラで御座るで……。」

「肥後殿その御心遣ひはお察し申す……。この度の御恩には何かの時に必ず御手助け誓ひまする。」

「頂上!!君恩に報ひ逆賊討滅の御味方武光あらためて御願ひ申す。聞え上げな

ば征西の宮も嘸や御嘉賞あらせらるべし。……少貳殿御名残で御座る。國もあけて御座れば心もとなう程に。」

「御名残りに御座る……、肥後殿王事には精々御つくし下されたい、某も及ぶ限り御味方は契ひ申しまする。」

名残りはつきぬ武將の別れと今はの様のうれしさに南の義士も北の武夫もよるこびあはぬものはない。

菊池は肥後へかへつてその年も暮れたがさても憎きは大友の振舞。この度こそは必ず退治してくれようと再び起した義軍の旗風。五千をすぐつて豊後の國へと馳せ向ふ、阿蘇大宮司も少貳も官方を心變りあるまじと旗をすゝめるその先に思ひがけない味方の注進。

「君少貳が太宰府に反旗をひるがへし候」

「何と……よもやさることはあるまいぞ。去年書いた血書の起請今更反故にも

なされまゝ。」

「君まことに候、阿蘇の大宮司と示し合せて前後より我勢を衝くのけはひに候」
武光黙すること稍しばし、

「さては……!!。」

勇猛比類なき菊池といつてもかく糧道を遮られては豊後へ寄せることも、太宰府へ向ふことも難かしい。一先づ返して再舉の術を取ることゝしよう。後は早くも九ヶ所の砦に阿蘇の勢がつめてゐる。

「奴原菊池が槍の味ひを知らぬか。」

當てればもろきかげらうか。攻め落し攻め崩して行くほどに、三百餘騎はまたたくうちにうちとつた。大將阿蘇宮司も菊池の道を塞ぐより、一人の命が稀の壽命とおのゝき入つて命からぐゞ逃げさせた。

正平十四年も七月になつて。菊池武光は用意をさくゝ怠りなく明日にも北上を

待つてゐた。少貳はその勢八千餘騎頼尙を大將として新少貳忠資は子供である甥の頼康等をはじめとして三所に張つた堅陣に五千の菊池はひるむかと思はれるばかり。暑さも昔ならぬ十九日武光は手勢を以てまづ筑後河をうち渡り槍をそろへて少貳の陣を衝つかけた。少貳は何を思つたのかものゝ一里も引き退つて前に沼を控へ花立山を後にして大保原の地に陣を張つたのである。中に通じてゐた細道も三所まで堀り割つて防いだので兩陣は僅かのへだてであり乍ら渡つて攻める手だてもない。

西征將軍の宮懷良親王には新田の一族を率ゐて雄々しくも陣頭に進み敵の堅陣を睥ミまえて在す。官軍の士志氣更に倍々盛である。

沼の向ひには敵兵の話し聲もきこえ、旗の紋所も鮮やかに見えるので、菊池は金銀で日月をうつた軍旗を自ら取り出してその蟬本に、去年頼尙が狂喜の涙に咽んで書いた血書の起請文を高く掲げ陣の眞先におし立て、禽獸にもおとる其の

破廉恥を嘲り、天にも訴へ、人にも知らしめようとしたのである。

八月十六日は空殊の外よく晴れて十六夜の月が中天皎々たる夜半ばかり菊池は何れも夜討ちに馴れたもの共、三百人を選びぬいて山を越え水を流つて少貳の後手に廻らせた。自ら率ゐた七千餘騎は三手に分けて筑後川にそひ川音にまぎれて賊の陣へと亂入した。かねて示し合せたこと故に後に廻つた三百餘人、同時三所に関をあげて無二無三、突き入る槍は名に高い菊池槍、敵の軍兵六萬餘騎は天嶮の要害をたのんで狭い所に犇々と詰め合つて構へたことゝて思ひもかけぬこの夜討ちで遽かに驚き立つばかり、他人の袴をとりあふもあり一本の槍に主三人で奪ひ合ふもあり、他人の引く馬に我もの顔に乗つて争ふもあり、敵か味方見か分けもつかぬ寢ぼけ顔、びつくり顔に、こゝの芦間にもかしこの峯にも寄り合ひ討ち合ひ同士討、その上菊池の勢強く、討たれて死ぬもの數知れず。敵陣は麻を煮した騒ぎの中に夜もほのゝとあけたので第一に菊池二郎は起請

文の旗を進めて千騎に餘る味方の軍の先頭に立てた。この時忠資は五千餘を率ゐて來たが忽ち敗けて自らも組みしかれて討たれて果てた。戦は酣、此處に懸け合ひ彼處に分れ亂れて必死を期する兩軍の兵、力にまかせて組んで敷き、重なり合つては首をとる。敵も味方も討死するもの數多く、父子も扶けず君臣も顧みず半時の間は天も震ひ地も撼ふばかりの激戦奮撃。宮も目覺しい奮戦で三ヶ所の深手さへ負はせられたを見た武光は子供の二郎を勵して「力の限り根限り日頃の約はこの時ぞ我等について討死せよや。」と呼ばはる聲に味方は益々勇み立つて、猛虎の如く駆けて入る。敵は菊池を射たけれども心得て作らせた鎧には立つ矢は一つもなかつたが馬が射られるので騎りかへへへ十七度も駆け合せた。つひに兜を落されて小鬚を二太刀切られたがなほも勇氣を勵して少貳武藤タケフヂといふものと押ならべて組んで落ち直ちにその首とつて鋒先に貫き傷ついた馬から敵の馬にのりかへて又敵の中へと破つて入るその武者振には敵も味方も恐

れ入り。あれよくと見入るばかり。あまり負けに負けた少貳には残る僅かの勢さへもまとめることもおろ／＼と叶はぬ旗を下卷きに太宰府をさして逃げびた。

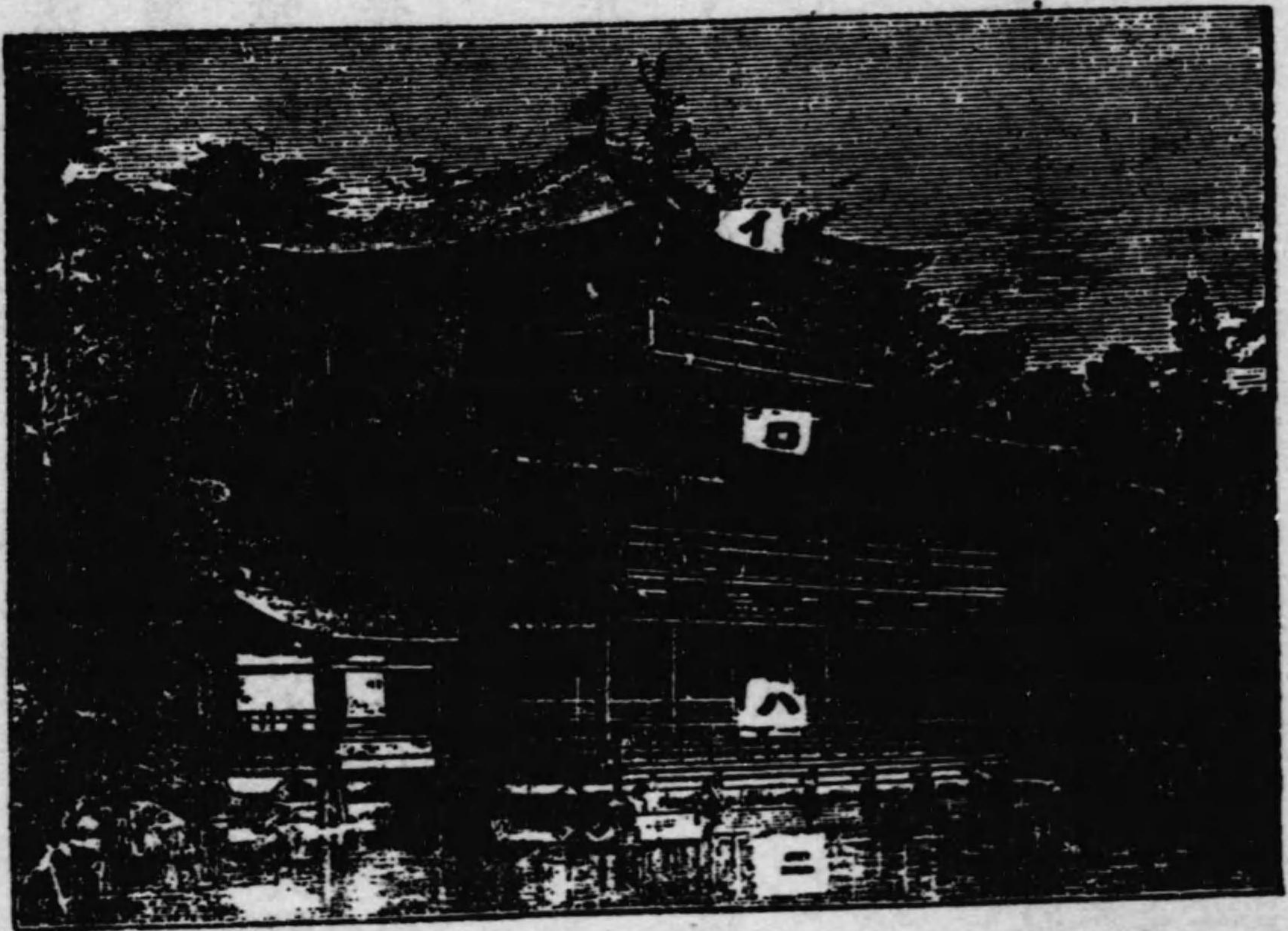
第二十七 足利氏の僭上

金閣 (一三六頁)

一 説明

- イ 究竟頂
- ロ 潮音洞
- ハ 法水観
- ニ 鏡湖

この繪は金閣最近の寫眞によつて寫されたものである。金閣のある寺は京都北山にあつて通常金閣寺といつてゐるが正しくは鹿苑寺^{ロクオン}である。金閣は應永四年義滿が北山に別莊を營み泉殿、天鏡閣、看雲亭等十棟列んで人目を驚かしたものの一部である。金閣の外は烏有に歸し其の面影を止めない。金閣は足利時代建築の代表的のも



のであつて王朝時代の寢殿造と鎌倉時代の禪刹式との合成物と見られる。即ち究竟頂は全くの禪刹式で他の二層は寢殿造である。今内部を概説するに。究竟頂は廣さ三間四尺七寸平方で南の簷には「究竟頂」の扁額がある。これは長くも 後小松天皇の御宸筆、此の室には上下四面金箔を押しして燦たり金閣といつたのはこのためである。

潮音洞は東西七間南北五間半あつて正面には惠心僧都の作觀世音の像を安じ左右には空海の四天王が置かれてある。天井には狩野正信筆の天人奏樂の繪を置く。

法水觀は面積潮音洞と同じく中央には雲慶作と稱する觀音勢至彌陀の三尊を安じ西壇には義滿法體の木像東壇には夢想國師の木像が安置されてある。鏡湖は處々に島あり木あり石ありて其配置よろしく天下の名苑である。夢想國師は僧疎石、尊氏の歸依した高德で天龍寺の開基たり。

二 主眼

足利義滿が當時の財政状態をも考へず、北山に金閣を造り奢侈にふけりし有様を示すと共に足利時代の建築様式を知らしむるにある。即ち美術と經濟との問題は引いて争亂に化することを授けるのである。

三 参考解説

金閣 北山の地はもと西園寺家の別荘のあつた所であるが西園寺家へは別に河内國で領地を進じこれを譲り受けたのである。其の造營については奉行十六人下司二十人を定め大和、河内、和泉三國の御家人が役を勤め材木は唐やまとの珍らしい

ものを集め巧を盡くして構へた。此の金閣が如何に立派であつたかといふことは「臥雲日伴録」文安元年八月十五日の條(金閣が出来てから五十一年後)に最一檢校の言を引いて書いてある。

初め諸大名の士に命じて土木に役せしむ。獨り大内義弘曰く我は士にして弓矢を以て業となすのみ、土木に役すべからずと。即ち義弘深く鈞旨(義滿)に逆ふの濫觴なり。經營未だ畢らざる時、其の費を考へしめしに二十八萬貫なり。然らば即ち功を畢るに至らば殆んど百萬貫か。隆樓傑閣。畫棟雕梁東西南北に葦布星羅し、天より降るが如く地より涌くが如し。故の法雲寺殿雲溪居士、鹿苑院殿に咨て曰く此の新第を以て西方極樂には換ふべからざるなりと。天下今に口實となす。今時西南に護摩堂あり。東に懺法堂あり。今等持寺の宗鏡堂なるもの是なり。懺法堂の東に紫宸殿あり。今南禪院となるものこれなり。紫宸殿の東に公卿の間あり、又これを天上の間と云ふ。今建仁寺の方丈となるものこれ

なり。舍利殿の北に天鏡閣あり。復道舍利殿と相通じて虚を歩むに似たり。閣の北に泉殿あり。殿は今則ち廢す。閣は曾て南禪寺方丈閣となる。而して去歲回祿して灰燼となる惜むべし。又會處の東北、山上に看雪亭あり。内に七佛藥師の像を安んず。像は今法水院にあるのみ。亭は則ちなし。云々。

又「翰林胡蘆集」永正四年五月の條には

北山の別業を翹め、其の壯麗なるや古今に絶勝し、黄金臺を築き、鐵風上に翔り山圍み水繞り兎鹿白鳥快く遊び、名花異草奇石恠岩各其所を得たり。別業は今鹿苑寺にして什の一を有するのみ。

とある。是等の記事を以てすれば如何に驕奢を極めたかが思ひやられるのであらう。今有するものは僅かに其の一部分に過ぎぬのである。殊に紫宸殿天上の間を設けたるが如き僭上の極といふべきである、

第二十八 足利氏の衰微

應仁の亂

(一四〇頁)

一 説明

イ 赤松氏の壘

ロ 逆茂木

ハ 楯

ニ 陣屋

ホ 真如堂附近の戦況

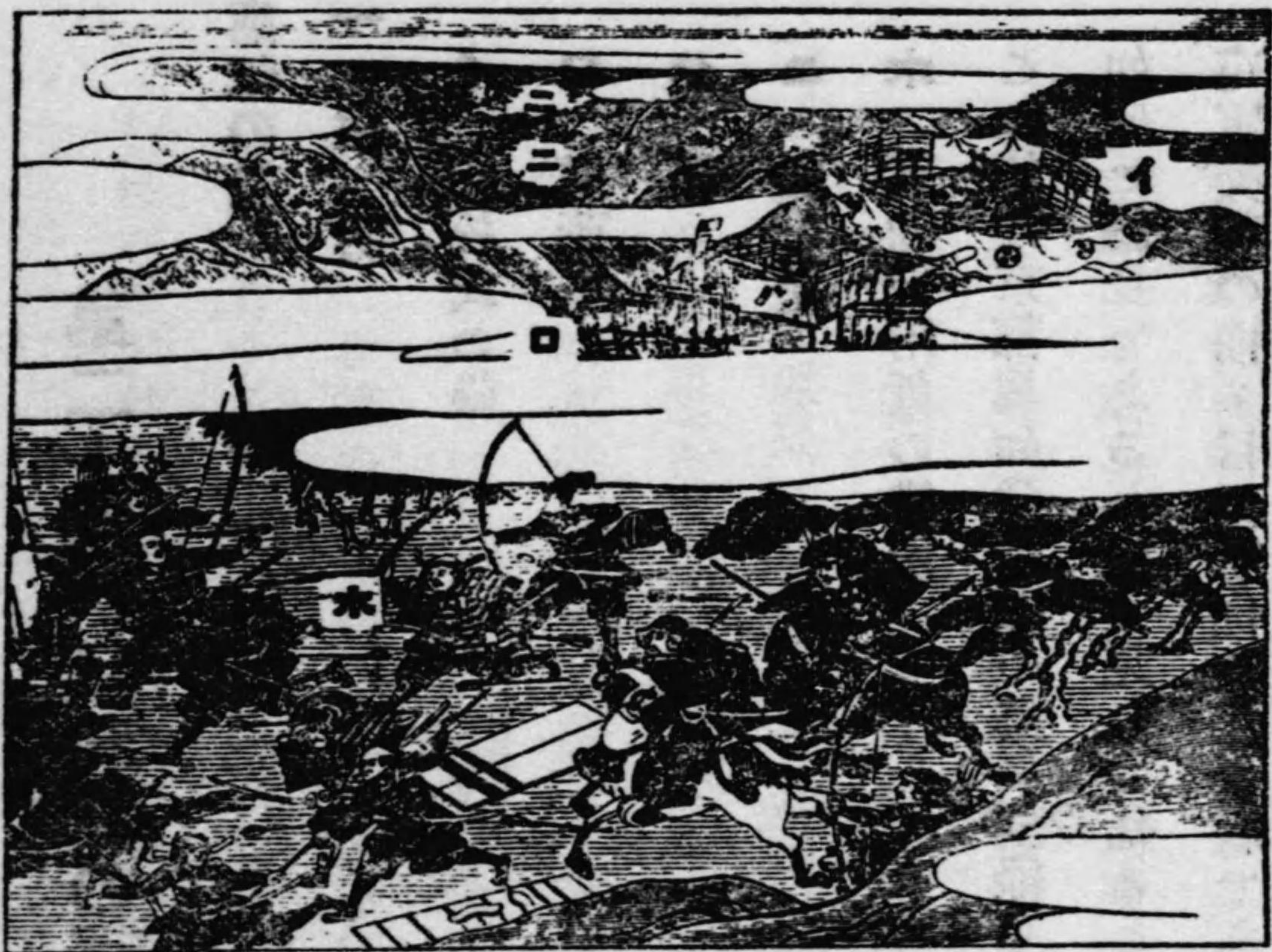
この繪は京都真如堂所藏の真如堂縁起繪卷によつたものである。その戦争の有様の如何に悠長であるかは一見して知ることが出来る。高所高所へと競ふて陣屋を作り屯軍交替の而も目指す仇敵なき戦であることを思ふべきである。

二 主眼

將軍失政の餘、上の争ははしなくも舉國の争亂と化し、應仁元年から文明五年まで九年間京都を中心として東西軍が對峙し遊技的戰鬪に人民の疾苦を顧みなかつたので京都の住民は地方に去り京都の荒れはつるに至つた有様を知らしむるのである。

三 参考解説

義政の驕奢 義政は幼くして將軍となり十九歳で従一位になつた。天下の治亂を思ふことなく専ら驕奢を事とした。



かつて高倉の第を營んだときその腰障子一間の價が二萬錢であつたといふ。奢侈の費用のために重税を課したので百姓は誅求に苦しむこと甚だしく納めることが出来ないから田畝を賣つて流浪するものが諸國に日に月に多くなつた。其の上連年大風や洪水も續いたので五穀が實のらず、惡病が流行して死するものが多く一時は京都中でも日に三百人五百人と死んだと傳へられてゐる。然も義政は暗愚の人で少しも政治をかへりみず宴樂にふけてゐた。それ故 後花園天皇は深く時勢を憂へられ次のやうな御製の詩を賜はつて諷諫せられた。

殘民爭採首陽薇

處々閉爐鎖竹扉

詩興吟酸春二月

滿城紅綠爲誰肥

實に恐れ多いことである。又後柏原帝の御製には
治めしる我世如何にと波風の八十島かけて行く心かな
とある、誦して涙を催すではないか。

第二十九 北條氏康

北條氏康 (二四四頁)

一 説明

- イ 折烏帽子
- ロ 大紋、(上衣の名稱)
- ハ 蝙蝠カハカリ(中啓トモ云フ—先端のやゝ開いた扇子)
- ニ 紐(袖口をくゝる用をする、又一種の飾)
- ホ 袴
- ヘ 熨斗目(下着の名稱)
- ト 紋(鶴龜ハ北條氏ノ紋所)
- チ 小刀



この繪は神奈川縣足利下郡湯本(箱根湯本)早雲寺にある氏康の肖像によつたものである。この服装の大紋は當時武家の通常服である。

二 主眼

戦國時代東國に於ける英雄北條氏康の容貌を示してその雄略羈氣の程を偲ばしめ當時の武士の服装を知らしむるにあるのである。

戦國要地圖(東方面) (一四五頁)

一 説明

野田城||三河南設樂郡千秋村にあつ

た。天正元年正月十一日武田信玄が徳川氏の據つた此の城を攻め降したによつて知らる。

濱松||静岡縣遠江濱松市。徳川家康以來名高い。三方ヶ原に敗れた家康の剛膽を示したのもこの城である。

府中||静岡市、府中とは國府所在地の名稱もと今川氏の居城があつた。後に徳川家康の大御所としての隠退の地、天領のまま明治に及んだ。

堀越||山北條||共に北條氏によつて名高い伊豆の史蹟。北條は前北條氏の起つた處。



小田原城||神奈川縣足柄下郡小田原町に早川の左岸に位する北條早雲以來特に名高い名城。城址は、宮内省の離宮であつたのを大正十二年九月一日の大震で、餘程荒廢した。

川中島||武田信玄上杉謙信の數回戦争をした處、長野縣更科埴科二郡に跨り、千曲犀兩川の挟む地である。

江戸城||太田道灌が長祿年間始めて城を築き、後家康の築城にて千代田城の名を得て今日に及んである。

河越城||埼玉縣河越市にある。江戸城と共に太田道灌の築城による。
國府臺||千葉縣東葛飾郡市川町にある。永祿七年北條氏康が里見義弘を破つた處。

二 參考解説

1 北條氏康 氏綱の子。小田原北條氏の第三世である。天文十三年四月、上杉憲政、足利晴氏の連合軍を川越に破り二十年三月更に憲政を平井城に攻め、憲政終に越

後に走りて上杉謙信に據る。是に於て悉く上杉氏の食邑を併せ威令關東に振ふ。二十三年二月駿河を侵し、かくて四方に領土を廣め豆相武上の四州を併有するに至り實に北條氏の全盛時代を現出した。氏康また和歌の嗜が深かつた。

なか／＼に清めぬ庭は塵もなし

風にまかする山の下庵

元龜二年十月卒す。時に年五十七、相模箱根早雲寺に葬る。氏康陽に柔にして陰に剛であつた。故に平素寸功を遣さず必ず士卒の功勞に報いないことはなかつた。

2 戦國時代の特徵 長友中野氏は次の十三項をあげてゐるのはけだし當を得たものであらう。

- 一 道徳人倫の頽廢したる時代
- 二 下剋上の風潮天下に漲りし時代
- 三 朝廷の御衰微甚だしかりし時代

- 四 實力本位、人物本位の時代
- 五 封建政治の擴充せし時代
- 六 民政の發達せし時代
- 七 國民的元氣の充實せし時代
- 八 武士道、戰術の發達せし時代
- 九 皇室と國民との接觸せし時代
- 一〇 我が特異なる國體の發揚せし時代
- 一一 諸侯の外交術に苦心せし時代
- 一二 主從請誼關係を練成せし時代
- 一三 民心收攬の必要ありたる時代

第三十 上杉謙信と武田信玄

川中島に對陣せる上杉謙信と武田信玄 (一五〇、一五一頁)

一 説 明

- イ 上杉謙信
- ロ 軍 刀
- ハ 驛 馬
- ニ 四半の旗(紺地に赤の日の丸)
- ホ 千曲川
- ヘ 武田信玄(諏訪法性の冑を着す)
- ト 軍配圖扇
- チ 楯



リ 武田菱(四ツ菱)

この繪は甲陽軍鑑によつた想像畫である。謙信の居る處は千曲川の雨渡附近信玄の居る所は川中島の八幡原の陣營と見て、今や謙信が信玄に一騎討の決戦に勇進する處としたい。

二 主 眼

戦國時代に於ける武田上杉兩雄の對陣の有様を示し當時の戦の様を知らしめ兩雄の長所を感得しむるにある。

三 参 考 解 説

川中島の戦

イ 戦場 信濃國更級郡川中島

□ 起原 村上義清、武田信玄に逐はれて上杉謙信に投托せしに起る。義清は信濃葛尾山の城主にして附近の數郡を領し小笠原氏木曾氏と並んで州の舊族なりしが、信玄に攻められ、天文二十二年八月邑を棄てて越後に奔り謙信に投じて回復の事を依頼した、謙信これを諾す。此所に於いて川中島の役は謙信の義戦となるわけである。

ハ 經過 弘治元年七月、謙信は義清と共に善光寺に陣し、信玄は大塚即ち川中島の地に陣して、弓鐵砲を備へ激戦す。同十月に及んで戦決せず。今川義元、中間に居して和を結ばしむ。是川中島の第一戦である。永祿四年十月兩雄亦大に川中島に戦ふ。激戦更なり兩軍殺傷算なく、甲軍破れ、信玄の弟信繁これに死し、死ど危し、時に小山田彌三郎横撃し、因て以て支ふるを得た。是が川中島第二度の戦にして最後の戦争であつた。然るに甲陽軍鑑には天文十六年に始まり永祿七年兵を罷ひとなつて共に誤である。況や兵合十七度とは唯々激戦の形容にすぎぬのである。

二 結果 信玄傷いて歸國ついで死し、謙信も歸國して後之をき、好敵手を失つたことを嘆いたといふ。ついで謙信も京都入を前に急死して終つた。

頼山陽は、不議庵(謙信)機山(信玄)を討つ圖に題して

鞭聲肅々夜過河

曉見千兵擁大牙

遣恨十年磨一劍

流星光底逸長蛇

と詠じたのはこの挿圖の説明そのままである。

第三十一 毛利元就

毛利元就嚴島神社に參詣す

(一二五頁)

一 説明

1 毛利元就 (松壽丸)

イ 細長

ロ 奴袴

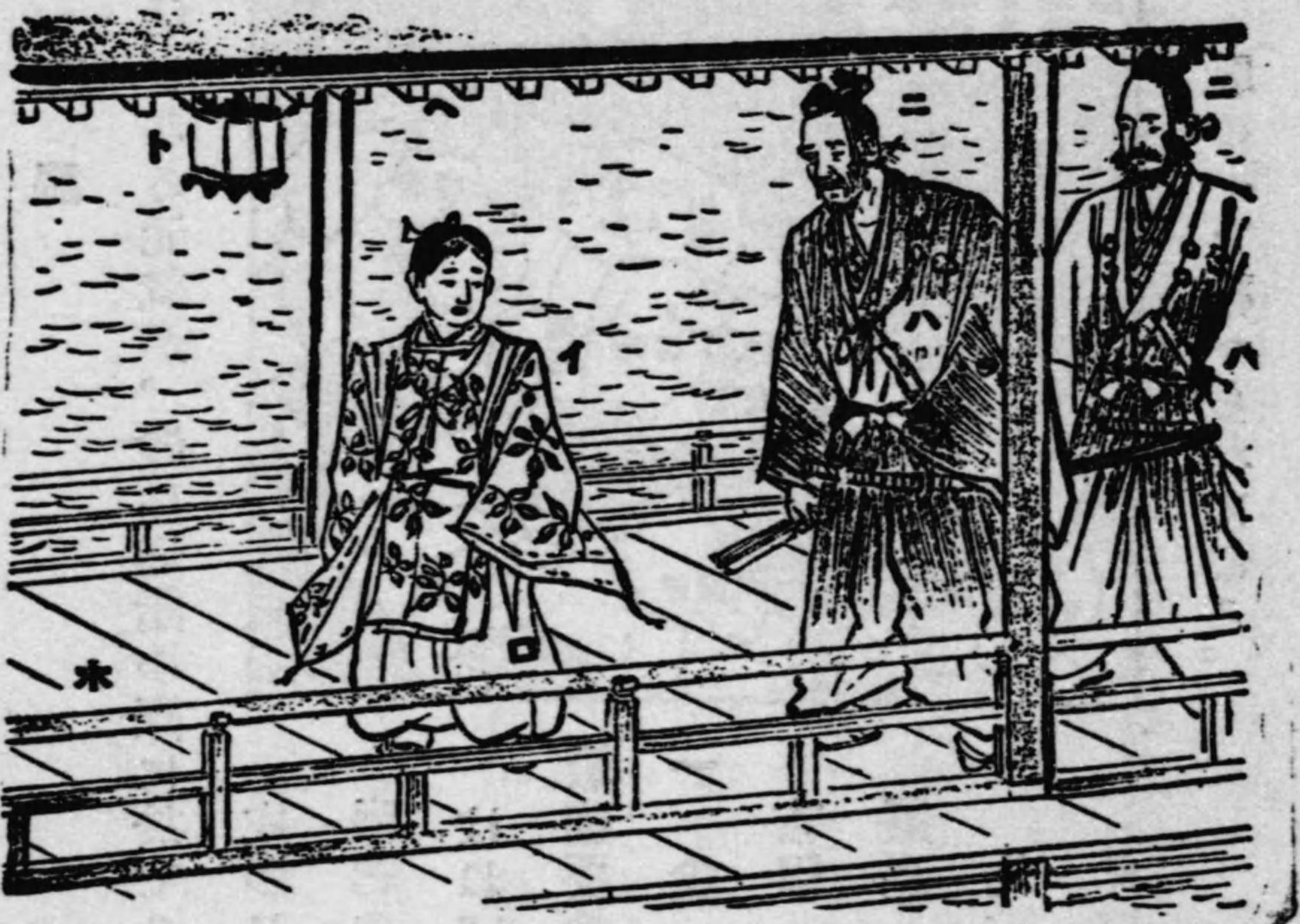
2 從者

ハ 素襖

ニ 烏帽子

ホ 嚴島神社の廻廊 (延長百四十八間)

ヘ 簷檜



ト 燈籠(二間毎に吊す)

この繪は元利元就が松壽丸といつて未だ十二歳の時嚴島神社參詣の歸途從者と共に其の廻廊を歩いてゐる所である。從者の渡邊某が祈願をこめてゐるのを見て「何故中國の主たらんことを祈つたか、天下の主たらんことを祈らぬか人は天下を志して辛くも中國の主たる位のことである。中國の主たらんことを願つてどうして中國の主となることが得やうぞ」といつたとのことである。この繪は勿論想像畫で太平夜話抄の記事によつて描いたものとする。

二 主眼

幼少なる元就が、嚴島參詣の際に於ての逸話は、大志あり、修養の徳を積んで他日大成の日あるを知らしめ、兒童をして立志修養の情操喚起の資とするに足るを以てこゝに掲げたるを思はねばならぬ。

戰國要地圖(西方面)

(一五五頁)

一 說明

吉田 〓 毛利氏發祥の地安藝高田郡吉田町にある。
嚴島 〓 元就が義兵を擧げ、知戰を以て主大内氏の仇敵陶晴賢を破り大に其の名をあらはした處。
此戰は秀吉の山崎、家康の長久手と共に三大義



戰の一と稱へられてゐる。

山口 〓 周防山口町、大内氏の居城

富田 〓 出雲能義郡廣瀬町、尼子氏の居城元利元就が永祿八年に尼子氏を滅す。

二 參考解説

嚴島神社、安藝國佐伯郡嚴島にある。官幣中社、市杵島姫命(主神)外二神を祀る。推古天皇の三十二年十二月神託に因り創立したといはれて居る。歴代尊崇厚かつたが、其の後荒廢した。平清盛同國の守たりし時、大に本社を崇敬し修理を加へ、廻廊百二十間を造つた。今も平家の寄進の寶物が頗る多い。現社殿は元龜三年の造營にかかり、本社及び大鳥居、攝社客神社社殿、大國神社々殿、天神社本殿、末社門客神社左殿同右殿等は特別保護建築物となつてゐる。祭日は三月及九月十五日の定めである。

第三十二 後奈良天皇

参考解説

皇室御衰微の極

後奈良天皇の御時は朝廷の御衰微の極で「遺老物語」に次のやうな記事が見えて居る。

桓齊曰 後奈良院宸筆之物 世に多きはことほり也。此時公家以ての外に微々にして、紫宸殿之築地やぶれて三條之橋より内侍所之御あかしの光、見へしとなり。左近の橋のもとには煎もの居てあきのふ。其例によつて、其茶うりし人の子孫ども年に一たび天子に茶を奉るといふ。此時銀など様の物に札つけてたとへは百人一首、伊勢物語などいふ札つけて、御簾に結びつけておくに日を経てのちまれば、宸筆を染てさし出されたりといふ。此比は、京中を關白料と

し袋にて米をもらふてあるきし。今も其袋二條殿にありとかやいふ。

又次のやうな記事も見えて居る。

信長の時は禁中の微に成しこと邊土の民屋にことならず。築地坏はなく、竹の垣に茨などゆいつけたるさま也。

老人兒童の時は遊びに往て縁にて土などねやし、破れたる簾を折節あけて見れば人も無き體なり。信長知行などつけられ造作など寄進ありし故に少し禁中の居なく能なりたり。定によつて信長を御崇敬ありて高官にも進められた。禁中信長の時より興隆すと雖も太閤の初めまではいまだ微々なり。近衛殿に歌の會などあるに。三方の臺あくまでも黒きころくとする赤小豆餅をのせて出されたり。然れども歌は今時の人に十倍す。常磐殿と云公家に、目見をのぞむ人あり、媒介の人云入ければ夏衣裳にて耻かしきとのたまふ。苦しからずとて具し行たり、彼人も夏の装束ならんと思ひしに帷子も無て蚊帳を身に巻てあらは

れしとぞ。信長の時分也。

このやうな時にもかゝはらず、天皇はおあわれみ深くましましたまゝ少しの貢を奉るものあれば、これを直ちに皇族や公卿に分ち給ひ、また常に大御心を萬民の上にかけてせられた。

天文九年雨降り續き悪病流行して人民の死ぬものが多かつた時、天皇は深く大御心をなやまさされ、御躬ら紺紙金泥の般若心經を寫され京都醍醐の三寶院に下して祈禱あらせられたのであつた。

下 卷



織田信長馬を走らせせら桶狭間に向ふ

第三十三 織田信長

織田信長馬を走らせせら桶狭間に向ふ（二三頁）

一 説明

- イ 織田信長
- ロ 信長の栗毛の愛馬
- ハ 源太夫社
- ニ 鷺津、丸根の砦の兵燹
- ホ 追従してくる家來

この繪は想像畫であるが、信長は栗毛の駒の太く逞しきに金覆輪の鞍をおいて清洲の居城を出發した。従ふものは僅かに十騎であつたが大將の出陣ときいて家來は路

々馳せ參する。源太夫社のところまでくると東天がにはかに白んだので、はるかに丸根鷲津の方をのぞむともうすでに火の手が上つて間にあはぬ。信長駒をとどめて一考し、之に向つて防がず、第二の計を早くも立て、心氣を一轉し他の間道から敵の不意をつくのである。

圖は今や駒を止めて心氣の一轉をしたところ。

源太夫社 は清洲から二里のところにある。

清洲 は尾張の西春日井郡にあり。昔時は國中第一の都邑であつた。

桶狭間 は尾張の知多郡有松村にある。現今の有松町の南方一里の地で、字田狹窪であるが、義元の死所は屋形狹間（屋形は字號）で昔は勿論桶狭間の一字であつたらう。今はよほど離れてゐる。

二 主眼

この繪の主眼は信長の奇策を以て敵に對し戰勝將軍を破つた潑瀾たる若年將軍の意

氣と才幹とを味はせるにある。

三 参考解説

政秀寺、當時は平手政秀の生地にて建てたが今は名古屋の南寺町に移されてある。

馬具武裝等、當時の武具と異らぬ様な注意を拂つて描かれたと圖書官の談



信長正親町天皇の勅を拜す

織田信長正親町天皇の勅を拜す（五頁）

説明

- イ 織田信長
 - ロ 勅使、立入頼隆
 - ハ 信長の家紋、窠紋（木瓜）
 - ニ 勅書
 - ホ 岐阜の稻葉城の正座
- 五頁の繪は信長が勅を拜して居る所で、是は信長が桶狭間の合戦で今川義元を滅し、更に進んで美濃の齋藤を破つて永祿七年岐阜城に移つた。其所へ勅使立入頼隆タテイルヨリカネが來た際、岐阜城中に於て勅旨を奉じて居る所である。頼

隆が、どうかお前が一つやつて呉れ、天下を治めるやうに、さうして御料地などを回復するやうにやつて呉れ、と云ふ勅旨を信長に傳へたのである。信長は勤王の精神に溢れて居る人であるから、直に勅命を奉じて朝廷へ上つた。それは勅使が來た翌年永祿十一年であつたが、京都に入るや真先に朝廷を尊敬してその御經濟を恢復するやうにと、京都の町の人民に米を貸付けた。それは米を貸附けた利子で朝廷の費用を補ふ爲であつた。後には米を貸附けることはいけなと云ふので、だん／＼朝廷の御料を恢復し、又御料地を設けることに力を盡した。朝廷を尊敬して色々朝廷の爲に盡したのである。

信長のやり方は其以前所謂戰國時代に諸國の英雄が皇室に金を献じたのと同様の精神であつた。又信長は足利將軍の後を承けて武家政治をやつたのであるが、普通ならば將軍になるのが當然である。然るに信長は將軍にならない。朝廷を奉じて政治をやるのだと云ふので將軍にならない。さうして後に朝廷の官たる右大臣になつた、右大

臣になつたと云ふのは信長が朝廷を奉じその下に治を圖らうと云ふ精神が現はれ居るさう云ふ精神で將軍にはならず右大臣になつたのである。

挿繪の信長は肩衣(禮服)として麻袴である。

二 主眼

戦國の豪傑はすべて朝廷に費用の献納をして居るが特に朝廷から信長を選んで内意を傳へさせられたのは如何にその勇名と忠君の念の迸つてゐたかを想察するに難くはない。兒童をして君王への道を悟らせるを要する。

三 参考解説

岐阜城は岐阜市の東部の稲葉山上にあつた。はじめ井の口といつて齋藤氏代々の居城であつたが、信長が龍興を亡して永祿七年にこゝを占據して西上の策を立て、居たのである。

五三ノ桐の紋所は後に恩賜されるがこの時は窠紋であつた。挿繪は高等科教科書



第三十三 織田信長

にあるもの、中からとり紋のみかへたのである。

近畿東海地方圖

一 説明

圖に見えた國名は

東海道(伊賀、伊勢、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐)

近畿(山城、大和、河内、攝津)

中仙道(近江、美濃、信濃)

山陰道(丹波、丹後)

の全部又は一部であつて織豊時代の主なる歴史地を示したものである。現在のところ、主要史蹟となつた當時の事件とを舉げて見よう。

大阪 今の大阪市、秀吉の築城でその以前の要津が開發さ

るに至つた。

山崎 山崎の西に天王山がある。この附近は天正十年六月に羽柴秀吉が主人信長の仇を復し明智光秀を討つたところ、今の京都府乙訓郡大山崎村。

伏見 京都の南方にある。秀吉の築城で名高い、關ヶ原の合戦の時守將鳥居元忠が死守して節操を顯はした話も残つてゐる。

京都 都の地、山城の葛野郡にある。明治二年東京奠都後西京と改めらる。

安土 天正四年に信長が丹羽長秀を普請奉行として築いた城。七層の天主は雲にそびえて天下を壓したのであつたが十年に光秀に取られ後焼けた。今滋賀縣蒲生郡安土村の豊浦に總見寺のある地がそれで殘礎は昔を語つてゐる。

賤ヶ嶽 天正十一年に秀吉が大垣から返して柴田勝家の將佐久間盛政を敗つたところ麾下の士に七本槍の名を輝かしてゐる。近江の琵琶湖の北方伊香具村大音の西のほとりの地一帯がそれである。

關ヶ原 「天下分目」とか「關ヶ原」とかいふ名目は最後の勝負、運命の分れ目といふ

ことを意味するほどの古蹟となつた。慶長五年九月十五日に徳川家康と石田三成等の軍とが合戦したところ。岐阜縣の美濃國不破郡關ヶ原村は今の名である。

岐阜 今の岐阜市のことではない。市の東方の長良川畔に聳えた金華山(又稻葉山)のことで齋藤氏の居城であつたのを永祿七年に信長が攻略して龍興を亡しこゝを居城として西上を心がけてゐたところ。昔は井の口城と呼んでゐた。

犬山 尾張の丹羽郡の犬山町にあつて今も天主が残つて木曾川畔に聳えてゐる。天正十二年に秀吉の陣所となつたことがあつた。今の城は後のものである。

小牧山 尾張の東春日郡の小牧町附近の小丘地で、家康が織田信雄を援けて秀吉と陣を對した地として名高い。

長久手 小牧山の南方だが地は愛知郡長久手村の長湫であつた。小牧の對陣の時に秀吉が家康に破られたところ。

清洲 織田氏の居城として知られ當時は尾張第一の都邑であつた。今の西春日井郡の清洲町はその名残を止めてゐる。

名古屋 現に中京の稱ある六大都市の一で特別市政を布かれてゐる。家康が三家の一として義直を封じて後にいちじるしい發展をなしたのである。

熱田 三種神器の一たる草薙神劍を祀つた神宮の所在地として知らぬものはないところ、今は名古屋市南區に合併されてゐるが、信長が今川の軍に向つた時參詣した話が名高い。

桶狭間 永祿三年に今川義元を討つて信長出世の奇功を奏したところ。愛知縣知多郡の有松村桶狭間の田樂窪の地。

岡崎 家康の出生地として知られ矢矧川に面した地である。

濱松 遠江の同市で家康が若い時分の居城となつてゐた。北にひらけた三方ヶ原で武田信玄と戦つて敗れ城中に逃げ入つて午睡して敵の膽を奪つたといふところ。

今は静岡縣西部の中心地である。

東を流れる天龍川は大井川と共に徳川時代交通に難所の中に數へられてゐたもの。

駿府 今の静岡。今川氏の居城の地。西を流れた安倍川は竹千代時代の家康が今川氏へ人質たりし或年の石合戦を思はせる。家康の主として隠退後の居住地。巨城の名残りは現に第三十四聯隊の兵營が本丸をしめその他師範學校や刑務所縣廳等皆昔の城内に設けられてゐるのに止めてゐる。營舎内の蜜柑は家康が庭前に手植したものといふ。兵士が秋にその實を貰ふときには年々こんな説話をきかされるといふ。營舎の性質が古今に宵壤のちがひを生じたのも面白い。

久能山 静岡市と三保松原との中間で静岡縣安倍郡の久能村にあり海岸に挺聳した山である。はじめには城であつたが元和二年に家康が薨じた時此所に埋葬し。やがて又日光に改葬されたが今も東照宮があり小日光の美觀を誇り、登攀すれば駿

河灣から伊豆半島を及三保の松原から芙蓉峰一帯の眺望を擅にしてゐる。

富士川 は甲斐から流れて駿河灣に入る日本五急流の一。平維盛が鳥の羽音で逃げたのは壽永四年此の河畔の出來事。徳川時代にはこれも街道の難所であつた。

二 主眼

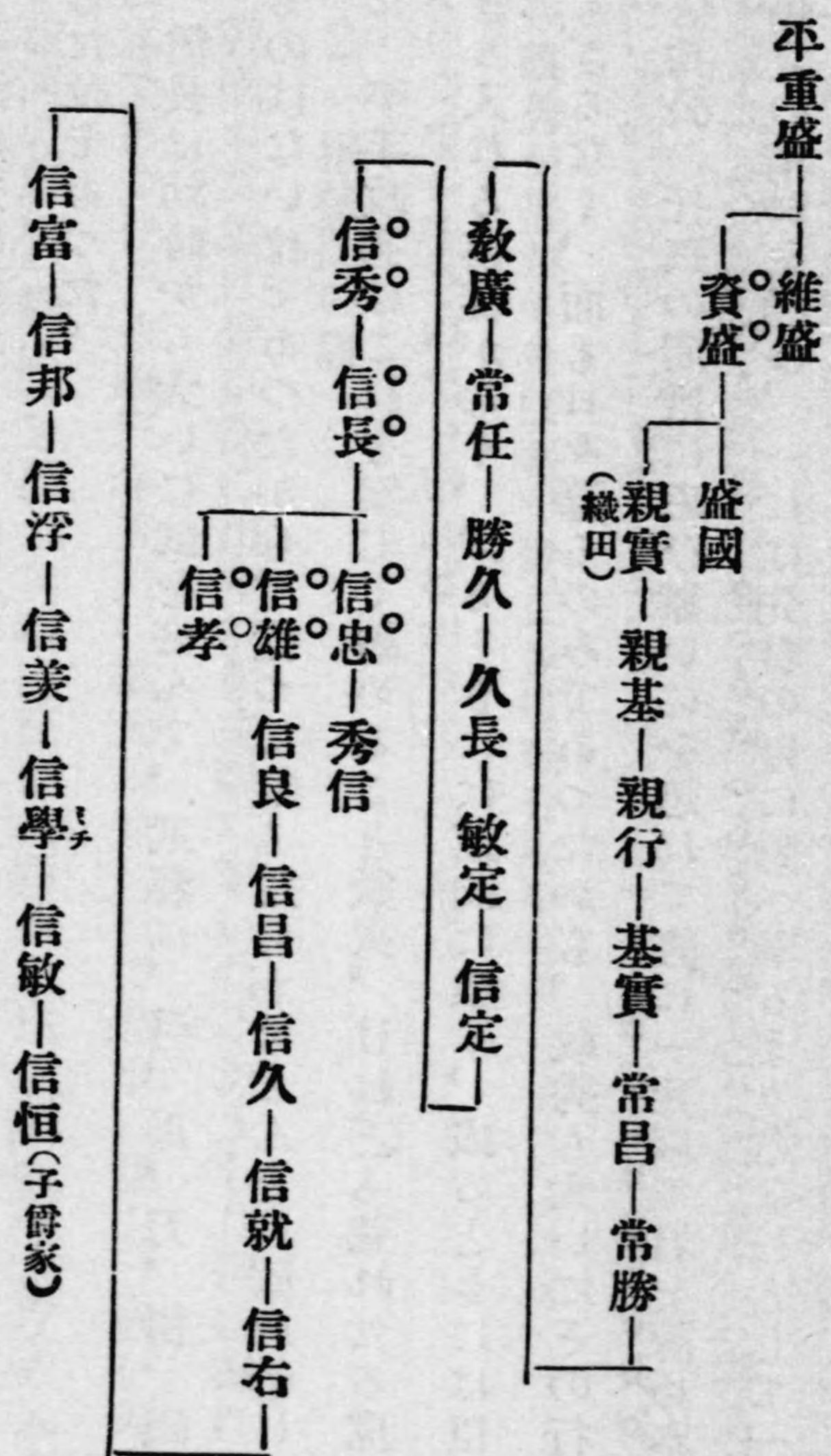
織豊時代の歴史的躍動の地的觀念を正確に與へる。

三 参考解説

1 信長の生立

織田氏は平氏から出た、平重盛の次子資盛が元暦年間に西海に滅びた時に孤兒が母と共に遁れて近江に落ち、後に越後にうつつて織田庄ハツリベの祝人に養はれて生長し、元服して親真といふ。子孫はその職をついで越後を保つてゐたが、足利代時となるや、その一族斯波氏の所領となつたので召されて輕身の臣となる。後家老となつて尾張國に住する様になつたものである。信秀の代になつて威名が近國に震ひ今川氏(駿河)齋藤

氏(美濃)と屢々槍を交へてから、頓に名をあげる様になつたのである。



信長は天文三年に生れ吉法師といつた。平手政秀と林通勝とがその傳役であつた。

十六歳の時三河の今川氏の屬城を攻めたのが初陣で之を落して名を知られた。

美濃の齋藤道三もその非凡を知つたので、先づ和を結んでからその女を送つて婿とした位であつた。

信長は幼時から大いに武を好んで、武藝は、弓、馬、刀、槍、鐵砲、何一つ出來ぬものはない位であつたから、従つて氣も荒らかでとんと、國政等には意を用ひなかつた。平手政秀はこれを案じて諫めること數次、けれども荒れたる虎は抑へ難し少しもきゝ入れる模様がなく、或るときには荒駒に乗り、或るときには臣下を苦しめ亂暴至らざるなく、而も日々募るのみであつたから、政秀も大いにその行末を嘆き且は先君信秀公の托孤の所旨に添ひ難いのを恐れて終に一死以て君を諫め奉り、一には幼君の獨立の精神を涵ひ、一には先君の鬼に對へ奉るより途なしとして一書をささげて潔く諫死をとげたのである。

信長こゝに初めて大いにさとるところあり。前非を悔ひ、その屍にとりついて謝

し、「吾あやまてり、政秀よ、汝が残したる事は永く身の守りとすべきぞ」

と。終に政秀寺を建て、その靈を吊ひ以後は専ら意を國政に用ひ、天適れ覇を天下に唱へて亡父の靈にも政秀の忠にも報いようと志したのは全く、君も君、臣も臣として共に國粹を發揮したものである。後名を成す様になつた時に信長は

「政秀が無かりせば吾、豈こゝに至らんや」

といつて一生その忠を忘れなかつたといふ。

2 桶狭間の戰

戰國の英雄は皆京都に出るのを主眼においた。かうした例に漏れなかつたのは今川義元であつた。永祿三年五月に義元は京に出て將軍に謁し、威を天下に布かうと、まづ駿河の府中(静岡)を發して駿遠三の兵四萬を以て尾張へと攻め入つた。

信長は先にこのことあるを慮り、鷺津丸根以下の諸砦を固めておいたが、この時すでに義元の軍は之を陥れ(十九日)で進んで來た。信長是をきくや諸將を居城清洲に會

して軍議を疑したが。この時老臣林道勝は進言して曰く、

「今川の軍は四萬。我兵は僅かに三千に及ばず、戦は城により平野にてすべきに非ず」と

信長きかず

「今はこの城にて戦ふべからず、將に國境を出で、戦はんとす、死生は已に天にあり。今は何をか遅疑せんや。」と

酒をすゝめて將士をいたはり、自ら立つて歌つて舞つた。

「人生五十年、

乃如夢與幻

(人生五十年乃ち夢と幻の如し)

有生斯有死、

壯士將何恨」

(生あつてこゝに死あり、壯士何をもつてか恨ませんや)

と高らかに扇の風もゆゝしく見えたがたちまち鞭をあげて呼ばはつた。

「貝ふけよ具足よこせよ我に従ふものは來れ。」と。

この勇すでに四萬にあまる敵をのんでゐたのである。従ふもの僅かに六騎、駛せて熱

田まで三里の間を一氣に行けば、このときには雜兵が二百人に増してゐた。之はこの時代には所謂兵農の別が明かでないのを示すものであつて、凡て農兵であつた爲めに主人が軍に出るときくと途中之に參加したからである。

熱田の祠前に戰捷を祈つたのも、武將の心掛けとして崇神の道をうかゞふことが出来ることで、祠前に兵に告げて曰く、

「今祠殿に祈りしに金車の音ありて進み行く。おもふに神明我行をおくるにや勝すでに決しぬ。」と。

衆大いに勇んだといふはまことに頼才のいたすところ、傳へにもこの時信長が錢を散じたときへ云はれてゐる位で、衆志を得るに巧であつたのはうかゞはれる。進んで善照寺砦に至るころは兵三千を得た。時已に迫り諸砦の敗報接を織る如く來る。老臣信長の無謀を交々いさめる。梁田政綱進言して

「東軍は勝に乗じて驕る、不意を討たば義元の首を獲るは掌をかへすより易かるべ

し

と。信長大いに喜び、兵を勵して進み最後の宣言をしたのである。

「名を擧げ家を興すはまさにこの一戦にあるのみ、汝等努力せよや」

辭令凜として將士の膽を扶つた。その掛引の巧さ、機は已に熟してゐる。果せる哉義元は丸根、鷺津の捷報をき、桶狭間の北方田樂狭間に陣して揚言して

「我軍のすゝむところ我旗の向ふところ鬼神も亦避く」と。

近郷の僧侶神職等のもてなし諛ふ酌をくんで意氣揚々敵の近づくも知らず驕つてゐたのである。この夜暴風雨俄かにおこりたゞさへくらしい五月サツキの空は一寸先も見えぬばかり、信長の攻め工合はまことに天運によるか、熱田の神の冥助によるかこの上なく好都合に運ばれた。枚をふくませて近づき矢庭に本陣に直入した。義元の軍は周章狼狽、醉顔に槍をとつて出るなれば眼くらみ足元は亂れて爲す術もない有様。すかさずはげます信長の下知、信長の士に服部小兵太忠次といふものがあつたが、直ちに名乗

つて義元に突きかゝつた。あはやと思はれたが、義元さすがの曉將たやすく討たれはしない。直ちに槍の柄を切つて落せば、このすきに毛利秀高は後から組みついて肋を刺し、忽ちにしてその首級をあげたのである。東軍の將士多く死し首二千五百を失つた。稀代の奇勝を博した信長は二十日に清洲に凱旋した。

これより信長の威名は一時に著はれ、つひに美濃に齋藤龍興を破り、近畿に進む基を開いたのであつたが、この役信長の膽略が目覺しい。敗報を聞いて驚いた様子もなく家臣と談笑してゐたことは、これが二十七歳の壯年大將とは誰も思ひがけなかつたのである。

△桶狭間は今愛知縣知多郡有松町の一部である。あたりは絞りの産地として知られたところ、愛知郡大脇村に今の屋形狭間と唱へてゐる所が義元の討たれた田樂狭間の一町歩あまりのところ、土地が低くなつてゐる。桶狭間から西は大高方面へ東は沓掛の方へも通じてゐる。

3 信長の拜勅と勤王

信長は(秀吉も)常に皇室中心主義であつた。幕府をおかず上皇室を奉戴して勅命によつて政治を行つた處は特筆したいものである。信長が將軍義昭から副持軍とか管領とかの職を授けられようとしても、固辭したこと、統一的機運に向いて來た應仁亂後に處しよくその手腕を振つたことは「天下布武」といふ朱印を用ひてゐたのを見てもその主義とするところは窺はれる。

戰捷將軍信長はいかにかしてその志を遂げようと考へ、終に遠交近攻の策に出たのである。即ち強敵の鋒芒を避けて志すところに突進しなければならぬことをさとして三河の松平氏と結び、美濃征伐の後には近江の淺井長政と結び、妹を送つて妻とした信玄をおそれて和し且つ養女をして勝頼に妻せ後顧の患を絶つて後、西上の準備にとりかゝつた等はいかにも智謀のすぐれた者と見てよいのである。美濃の齋藤を滅したのは永祿七年九月のことであつたが、龍興を亡してその稻葉山(金華山)城をとつてこ

ゝに移つたがこの時その顧問たる僧決彦が、周の文王が岐山から起つたといふ瑞祥をとつて岐阜と改めたのである。かうして名聲が日に振ふので、これを聞召した正親町天皇には、畏くも十一月の九日に勸修寺時豊に勅して、立入頼隆を勅使に立て岐阜城に遣はされて、美濃、尾張の御料所を回復すべき由を勅命遊ばされたので、信長も感涙に咽んだのであるが、之が又信長にとつては無上の好機を天授されたものであつた。信長が入京するとき、京都の人々はその威名をおそれて、各逃れのびたといはれ天皇も亂のなき様御計り遊したといふことであるが、信長は決してそんな無謀の將ではなかつた。先づ錢萬匹を獻じ、御料を奉り公卿を賑恤しその上市民には米石を貸し付けたので、民も案に相違して堵につき、正親町天皇も大いに喜ばせられ、天正二年に従三位參議に任せられ繼いで權大納言右近衛大將にすゝめられ同四年には内大臣に、五年には右大臣に陞せられてゐる。殊に正倉院の御物蘭麝待を切つて與へられたなどはいかに思召に叶つたかゞ推察される。

4 足利將軍の滅亡

足利九代義尚は夭折して義政が再び政をとつたが、薨後は義視の子義植ヨシタケが立つた。けれども山名と細川との争はまだつゞいてゐて、義植は細川政元の爲めに喜ばれず、政知の子義澄が天龍寺から迎へられた。こゝで義植は政元と戦つて大敗し、周防に走り大内義興によつたので義興は永正四年に之を擁して東上し、義澄を廢して義植を復位せしめ、私費を以て幕府を支へてゐたが、漸次迫る苦しみに管領代を辭して歸國した。將軍も細川高國と不和となり淡路に走つたので、高國は己むなく義澄の子義晴を迎えて自ら管領となつて専權をいたした。義晴はその子義輝が十一才になつたので、加冠の式をあげようとしたが、京都は物騒で行ひ難く日吉神社の神官の宅で私に式を行ひ、ついで軍職を襲がしめたとは幕威の程も思ふべしだ。こゝに細川政元の臣に三好長慶といふ者が陪臣の身で國政をとり、幼將軍を扶けてゐたが、後その家臣松永久秀に委した。久秀は無禮にもその威をたのみ永祿八年に將軍義輝を弑したので、弟義

昭は信長に頼つたのである。道德のこの廢れ方は大凡を推知するに難くはない。弱肉強食、下剋上、戰國の戰國たるの色彩はかくも濃厚となつたのである。將軍にして幕府に安じて居ることの出来ぬ始末となつた。義榮ヨシヒサが將軍となつたのは永祿十一年二月であつたが、信長の入京に先だつて四國に逃げついで薨じた。

そこで信長は義昭を擁立して入京したが、義昭はその徳に服して菊桐の紋を許し、又副將軍とし管領代としようとしたが、信長は辭してうけなかつた。義昭は信長を父と。呼。ん。で。ゐ。た。

義昭は信長の聲望が盛になつてくるのを忌み、ひそかに信玄の西上を促した。信玄は元龜三年遠江に出て徳川との聯合軍は信長と大いに戦つて走り傷いて歸り三方ヶ原に敗し間もなく病死した。後義昭は信長に逐はれた。義昭の失敗に對しては信長が、元龜三年九月に「天子に朝せざること、諸侯を撫しないこと、賄賂が公に行はれること賞罰に私多きこと、貨利を冒し、土木を盛にし細民を省みない」等のこと十七個條

を上書してゐる。義昭を追ふたのについては、信長ははじめ、義昭に二心のないことを陳じてゐるのにきゝ入れて呉れなかつたのによる。惜しいことに足利幕府は尊氏が將軍となつて以來、二百三十六年の天正元年に滅びてしまつたのである。(教科書八頁、足利氏系圖参照すべし)

5 安土築城

安土城は天正四年に起工し三ヶ年の月日を費して竣工し、信長は根據を尾張からこゝに移した。(岐阜へうつして再轉)、我國の戰術は弓矢刀槍馬上の名乗といふ壇取りであつたから、一朝事ある時はまづ要害の地を選んで、外廓としなければならなかつた。それが蒙古の來襲以來一騎討は集團戰の模様となり、鐵砲傳來後は全く隊伍を堂々として合戦する様になつた、随つて築城法にも改良を加ふべきは當然である。信長はその先鞭をつけ天主を起し、七重の閣は雲座に聳え、城濠は汨羅の深淵を作すといふ有様、當時の大砲をもよく防ぎ得る金城湯池と誇つたのである。

6 四方經略

A 武田氏滅亡

天正三年に武田勝頼は大兵を率ゐて西上し、有名な長篠の戰となり、信長は家康と共に之を破つて武田氏の宿將を多く亡した。鳥居勝商の忠死もこの時の事であつた。信長は家康と共に甲斐へ攻め入つた。時は天正十年諸砦は陥つて、勝頼は新府に退いたが。重臣小山田信茂の甘言にのせられて岩殿城(猿橋驛前面の山)に入らうとしたところ、織田信忠の先鋒や瀧川一益、川尻鎮吉の急追頗る烈しく、且つ前面には叛臣小山田の兵が阻んだので、詮なく道を左方田川にそふて、天目山を指して落ちて行つた。山上からも案内知つた小山田の軍が遮れば、前後の敵に狭まれて田野の景德院に入つた。時に勝頼の嗣子信勝は十六歳で元服をしてないから、こゝに大急ぎで元服の式をあげ妻北條氏(後妻で十九歳)と共に三人枕を並べて自刃した。天正十年の三月十一日のことで勝頼はこの時三十七歳、武田氏は二十八世で滅びたのである。この時特

に忠死の士二人があつた。一人は小宮山内膳といつて久しく勘氣を蒙つて塾居の身であつたが、主家の最後に強いて出てきて勘當を赦免されて喜び勇み表口の聯合軍を拒ぎ、一人は土屋昌恒といひ天目山から來る小山田の軍を險によつて獨り防ぎ、片手でよく敵を斫り落して谷をうづめたといふ、今片手斫の遺蹟が残り日川の水は爲めに三日紅であつたといふので三日血川と云はれてゐる。共に主の自害を悠々として面目あらせ自らは後に從容之に殉じたのである。内叛した家士の多かつたうちに見上げた武士とせねばならぬ。

B 北條の爲めに瀧川一益を關東に出した

C 上杉氏を抑へんと柴田勝家を北國に遣した

D 神戸信孝を四國に遣して長曾我部氏を討させた

E 丹波平定

明智光秀を丹波に遣して波多野秀治を八上城に攻めたが思ふに任せず光秀は効を急

母を人質として之と和し欺いて秀治を捕へ安土に送る。信長は秀治を斬るに及んで、國人は怒つて光秀の母を殺す。光秀は母の未だ歸らざるに秀治を斬りたる信長を恨みしが、急に八上城を屠つて慘を極めるに至つた。

F 中國征伐

羽柴秀吉を西に遣した。彼は天正八年に但馬因幡を征し淡路をとり、十年大舉して備中高松城を圍むに至り、有名な水攻めをしたが可惜この間に本能寺の變がおこつたのである。

7 本能寺の變

徳川家康と穴山梅雪(信君)とが甲州征伐の恩賞をうけた御禮の爲めに、安土に來ることがあつた時に、信長は接待役を光秀に命じた。光秀は正直な男であつたから主人の歡心を得んと思ひ、私費を投じて京都及堺から珍器をとゝのへ歡待の用意をした時、急に中國應援の命を下し、歸國を命じたので不平を起させた。之が天正十年五月十五日の

ことである。光秀は十七日に坂本の居城に入り、丹波龜山城にかへつて準備を整へ廿八日に愛宕山に詣でその西坊で連歌師里村紹巴と共に神前に納める連歌をしたが、光秀の句に

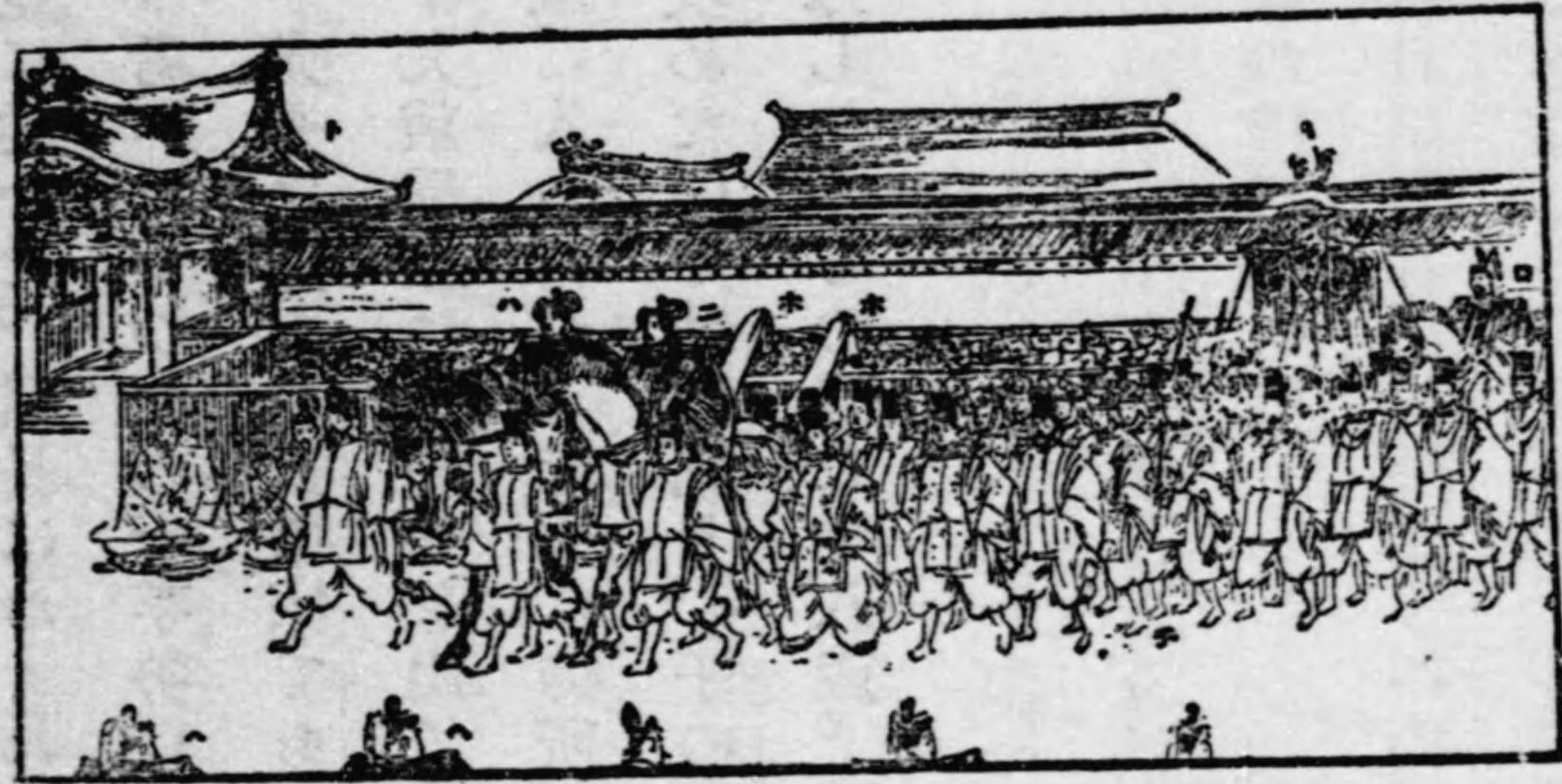
「時は今天の下しる五月かな」

といふのがあつた。明かに天下經略の下心が見えてゐる。或は粽を喰ふて糝まで喰つたこともあつたといふは、一心にこんなことを思つてゐたからであらう。光秀の領地佐和山を數年後には森蘭丸に與へるといつて信長が暗に光秀を亡きものにする心があつたのを、光秀は先んじたとか信長が衆前で光秀をうたしめたことを恨んでゐる爲めに、返報を考へてゐたとか云はれてゐる。八上城の母を失つた事件をも含んでゐたにはちがひない。兎に角六月一日に腹心の身内と共に龜山から中國に出るべきで老坂から京都へと向つたのである。信長は家康が来るや大いに歡待して自ら盛宴を設けた。家康は五月二十一日に信忠と共に京都に入り信忠は妙覺寺に宿し家康は大阪堺寺の遊

覽に趣いた。信長はおくれて二十九日に本能寺に宿り諸國の兵の集つた時、中國へ立つ考へであつたので手勢は至つて少かつた。

光秀は聞えた武略家である。本能寺攻略位は一擧手の勞であつた。信長はこの時四十九歳信忠は妙覺寺を出て本能寺に會しようとし、煙の上るを見て父の死を知り二條城に入つたが、光秀は御所の隣りの近衛前久邸の屋根から見下して鐵砲をうち込んで攻めたので城は陥り、子の三法師は前田玄以に抱かれて岐阜に走り自らは城を枕に自刃した。この時二十八歳。時は天正十年六月二日。

第三十四 豊臣秀吉



後陽成天皇聚樂第行幸にまたふ

後陽成天皇聚樂第に行幸したまふ（二・三頁）

一 説明

イ 鳳輦（後陽成天皇）

ロ 左大臣近衛信輔

ハ 右近衛大将（大納言西園寺信益）

ニ 左近衛大将（大納言近衛信房）

東帯に巻纒と追懸

ホ 笠袋（一の資格なり）

ヘ 前の方に列座する者——公卿百官

向側に列座する者——秀吉方の將士等

ト 聚樂の正門

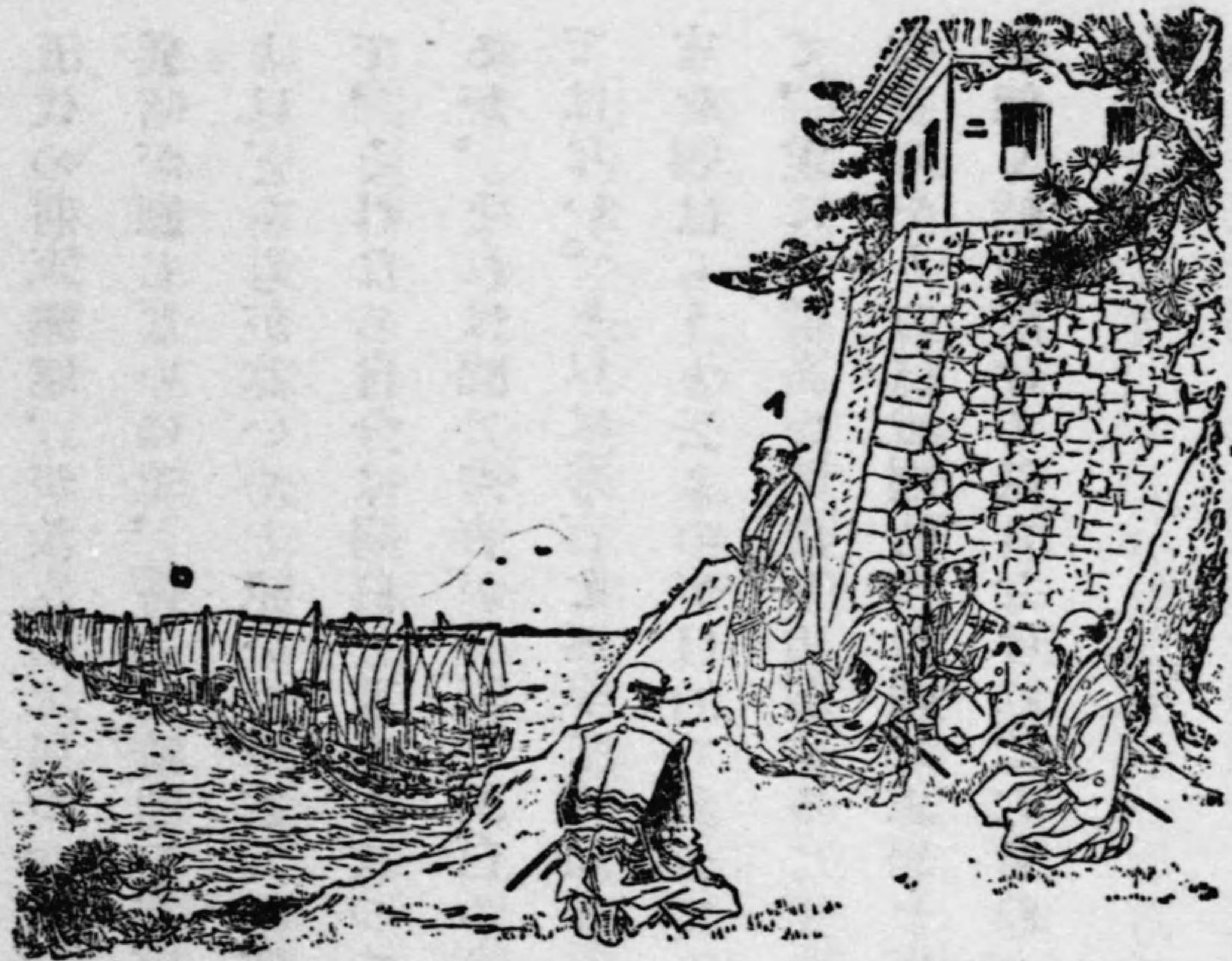
テ 樂人

秀吉のやり方も信長と同様で、信長の後を承けて皇室の尊敬に力を盡した。十三頁の繪は秀吉が京都に聚樂第を營んで、後陽成天皇の行幸を仰いだ所である。聚樂第の建物は、佐野伯爵家に在る聚樂第行幸の屏風の繪を基にして、畫家に描かせたもの、行幸の様は大體は聚樂第行幸の屏風にもあるけれども、それはどうも面白くない、それで聚樂第行幸に據つて、屏風の繪を参考にして考案したもので、是は屏風にはない行列の極めて大切な所を現したものである。前の方に馬に乗つて居るのは左近衛の大将と右近衛の大将で舍人が馬の口をとつて進む。鳳輦の中には後陽成天皇が在します。鳳輦の前に帽子の一寸變つた者が居るのは音楽をやる樂人で、三十五人ほど居て、安城樂といふ行樂を奏して行くのであるが、國民は此音楽を奏する様を見て泰平の様を偲んだと云ふことである。鳳輦の後に馬に乗つて居る人は此行列の主任で、左大臣近衛信輔と云ふ公卿の一番の頭である。つまり行幸の一行の支配人である。是

から行列が続くのだが、其中の大事な所を見せたのである。此時秀吉は御迎へに出て御供をして來たのだが、此行列のズツト後に居る。何しろ非常に長い行列で、十五町にも餘り風輦が聚樂第の門を入つた頃、秀吉は天皇の御所の門を出て居つたと云ふことである。京都の御所から聚樂第まで行列が続いた譯である。其頃の御所は今の御所と同じ所であるが、聚樂第は今の二條離宮邊に在つたのだからかなり遠かつた。其間行列が続いたのである。

此行幸の際に秀吉は非常な費用を掛けて、山海の珍味は勿論あらゆる方法で天皇を尊敬し奉つたので、天皇の方でも三日間御逗留の豫定であつたが、餘り面白いので五日間逗留なされたと云ふことである。其頃秀吉は天下の大名に、天皇に忠義を盡す、朝廷を尊敬すると云ふ誓をさせた。是等の事實から見て、秀吉が如何に朝廷を尊崇したかと云ふことが能く分ると思ふ。又信長と同じやうに皇室中心で行かうと云ふのであるから、將軍にならうとはしないで、矢張り朝廷の官を受けるやうにした。足利十

五代の將軍義昭、が浪人して居つた時、足利の將軍職の名義を呉れぬかと言つた所が義昭が應じないので、秀吉は義昭を高野山に逐うて、それから近衛信輔に將軍と關白とはどちらが尊いかと訊いた。其人が將軍は武官だ、無論關白の方が尊いと言つたので、それなら自分は關白を貰ふと言つて關白を貰つたのであると云ふ話が傳はつて居るが、それは嘘で秀吉が將軍と關白の區別を知らぬことはない。それほど無學な人間ではない。それは秀吉を無學な人間と考へて作つたのである。秀吉は信長と同じく朝官を賜はらうと云ふのが目的であつたのである。さうしてだんくんに朝廷の官を陞つて、遂に一番高い關白を頂戴するに至り、全く信長と同様に行つて居る。故に信長と秀吉のやり方は戰國時代の國民思想を代表して居るものであるから國史は上巻と下巻を能く結び附けて話さなければならぬ。それが極めて必要である。



豊臣秀吉名古屋城にて軍船の出発を望む

第三十五 豊臣秀吉

豊臣秀吉名古屋城にて軍船の出発を望む

(一六頁)

一 説明

イ 豊臣秀吉

ロ 征韓の軍船

ハ 小姓

ニ 名古屋城の天主閣

想像繪である。舊教科書のまゝを描いたが小姓の刀の持ち方は之が正しい。所は肥前國松浦の海岸名古屋の城においた

大本營の下である。

二 主眼

秀吉が小日本に安んぜずして海外を征して國威を張らうとした。その大志は凡人の追従を宥さぬところである。匹夫より起つてよくかゝる大業を企てたことの意氣を知らせなくてはならぬ。

三 参考解説

秀吉ははじめに明との修交の爲めに朝鮮王の李松に「先驅たるべし」と云ひやつたところが却つて「日本が大明國を伐つは蜂の龜甲を螫す如し」と罵つて來たので、忽ち征韓の役が準備されたのだ。即ち關白は秀次に譲られた。出征の部署は定められたのであつた。

先鋒の二將は勇猛の聞えの高い加藤清正と小西行長。總帥として宇喜多秀家、參謀として小早川隆景である（小早川の知謀のほどは秀吉は信長の部將として高松城を攻

めた時に見抜いてゐた。諸軍は島津義弘、毛利輝元、淺野幸長ヨシナガ、黒田長政、福島正則、羽柴秀勝等十萬に餘り、水軍としては藤堂高虎、九鬼嘉隆、加藤嘉明、脇坂安治等であつた。時は文祿元年二月。秀吉は三月京師を發し四月に名古屋に下つた。

小西行長は四月十二日釜山に上陸し、加藤清正の軍は十七日に上陸して北進を起してゐる。この後三ヶ月ばかりで朝鮮の頭は抑へてしまつた。この間に碧蹄館の戦、平壤の戦は名高いものでとう／＼媾和條約といふ段取りとなつたのである。媾和使伏見に來つて書を呈した。和議にも相當日子を費したが、僧承兌の讀上げた明主の書に「封爾爲日本國王」の一節があつたので忽ち成りかけた條約も破棄となり、事に當つた小西行長も首が危かつたし、明使は空しく歸つて行つた。

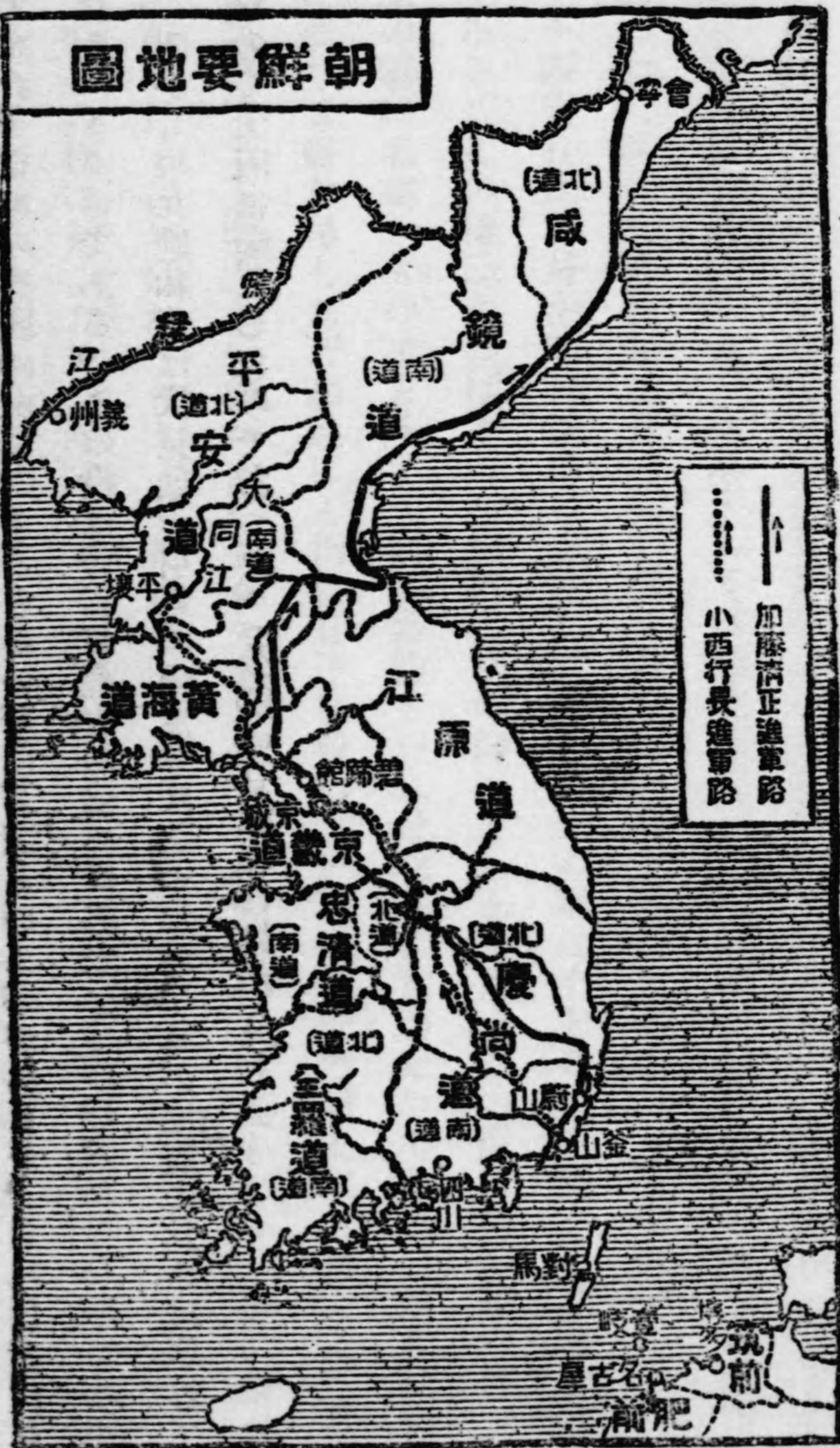
慶長の役は初つた。二年の正月に總軍は同じく十三萬。小早川秀秋が總帥である。

諸書の明文から見ると秀吉が挿繪の通りに諸軍を望むのはこの時であらう。

義に篤い清正が淺野幸長を蔚山に援けたのも、義弘が泗川に奮戦したのもこの役で

あつた。義弘の軍は三萬八九千の敵首を斬り、その鼻を大樽に鹽漬として内地に送つて來た。京都の豊國神社に詣ずるとその所に耳塚といふ塔があるが、それは實は鼻塚たるべきものである。この役は秀吉が薨去の爲めに終未をつげた。

明から來た媾和使は伏見城で引見の豫定ではあつたが、城が地震の爲めに壞れてゐたので大阪に變更したのであつた。(公卿の日記等に見える)



○朝鮮要地圖

一 説明

この地圖は現今のものに、小西行長と加藤清正との進路を表はしその上教科書本文中の地名を挿加してあるのである。

釜山 入鮮の關門をなしある。諸軍の上陸地であり今も亦然り。

泗川 鳥津義弘の奮戦の地。敵は義弘のことを石曼子シマツといつておそれたといふがこの戦の爲めである。

蔚山 慶長二年十二月に淺野安政と幸長とが守つてゐた。明軍は揚鎬、麻貴を將として之を圍む。城中大いに苦しんだが清正はこの時に南に出て機張城にあつてこの報を得。吾出征の際に幸長の父長政より吳々も托されしことあり約を踐むの秋なり」といふので直路歸つて危中を挺身城中に入つた。飢渴と苦寒に苦んだが吾軍の外援を得て敵を挾撃して大勝を博して名高いところ。

碧蹄館 文祿二年に小早川隆景が、行長のすゝめを卻けて、「日東に吾あるを知らし

めんも快なり」といふので京城の北方の地に止つて二萬を以て明の李如松の十萬の大軍を迎へ、立花宗茂の奮戦の爲めに大勝を博した。

京城 は首府の地。

平壤 文祿二年小西行長の籠つて居た平壤城を攻めに來たのは沈惟敬の二十萬であつた。行長は一萬五千、如何とも出來ずに、八日に大同江上凍結の上を渡つて開城に入り又京城に止まり隆景にもこゝまで退却をすゝめたが、隆景はつひに碧蹄館に大勝をしたのである。

義州 滿洲への入口で、古今ともに交通の衝路に方つてゐる。

會寧 京城に迫つた清正は二王子の逃げるのを追ふて北進しこゝまでいつてつひに之を捕へてかへつた。

二 参考解説

秀吉は諸軍出發の際には各將の進むべき地方を示す爲めに豫め對馬の宗氏から五つ

の色分圖を作製して奉らせ之を持つて行かせたのであつた。

そして清正は黒國へ行け、行長は赤國へ進めと命せられたのでその通りに進んでゐる。

清。正。は。釜。山。到。着。後。に。東。北。に。進。み。慶。州。を。と。つ。て。西。進。し。烏。嶺。と。い。ふ。山。を。跋。渉。し。て。首。都。を。目。ざ。し。行。長。と。合。し。て。進。ん。だ。後。仲。よ。く。北。進。し。た。が。臨。津。江。あ。た。り。で。別。れ。て。元。山。津。に。進。み。二。王。子。を。追。ふ。て。感。鏡。北。道。の。會。寧。に。入。つ。て、最。も。長。行。軍。を。不。開。未。知。の。地。ま。で。敢。行。し。た。行。長。は。四。月。十。三。日。に。釜。山。に。上。陸。し。て。西。北。に。進。み。烏。嶺。を。こ。し。て。漢。江。岸。に。出。で。割。合。に。平。路。を。と。つ。て。京。城。に。入。る。五。月。三。日。に。清。正。と。合。し。た。清。正。は。南。大。門。か。ら。行。長。は。東。大。門。か。ら。入。京。そ。の。後。北。進。も。同。行。し。た。が、兩。軍。は。臨。津。江。で。朝。鮮。兵。を。破。つ。て。別。れ。西。北。に。進。ん。で。開。城。を。陥。れ。平。壤。へ。返。つ。た。の。で。あ。つ。た。

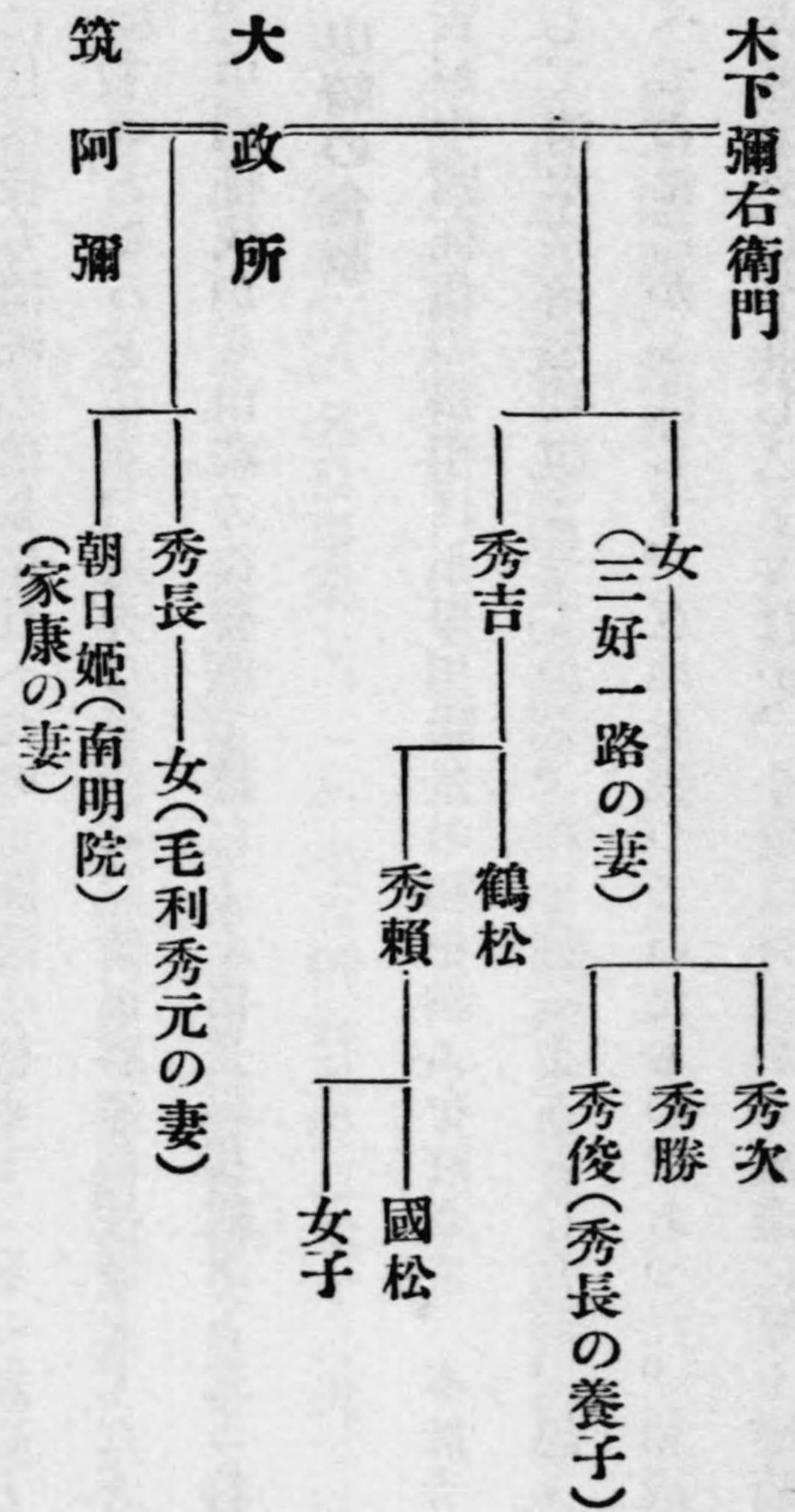
之が文祿の役の時のこと故に兩人は仲はよかつた。然るに媾和の時から後は兩人の戦に對する意見が異つてゐた爲めに仲が悪しくなつた。朝鮮八道に名を轟かした清正

は主戦論者で、行長は構和論者であつたことは丁度明治の西郷隆盛と大久保利道の様なものであつた。然らばなせ二人が進路を争はなかつたかといふと、それは秀吉の軍令が至つて周密なものがあつたからである。「先鋒争をするものは罰す」といふので兩人は並行を保つたのであるし他の諸軍も抜き懸けの功名はしなかつた。

1 秀吉の出生

秀吉は尾張國中村の産であるがその生父については四説がある。第一は皇室の御落胤となし、第二は私生兒となし、第三は筑阿彌の子となし、第四は木下彌右衛門の子となすのであつて、第一と第二とはその異りの甚しいことは何といふことであらう。松永貞徳や天野定景といふ人は第一を唱へ、第二は母が或る夜日が懐中に入つて懐妊したといふ傳説から起つたもの、日吉丸の幼名にあとから附會したものらしい。小瀬甫庵は第三説を主張してゐるが、筑阿彌は繼父であることは太閤素生記などに明かに見えてゐるが、第四が有力なものである。父彌右衛門は信長の足輕で病の爲めに歸郷

して居る間に愛知郡御器所村の女を娶つて、秀吉と瑞能院を生んだが自らは天正十二年に病死したので秀吉の母は織田家の足輕で彌右衛門の同輩筑阿彌に再嫁し、大納言秀長と家康の室南明院を生んでゐる。



秀吉が面貌猿に似たなどは取るに足らぬが幼名を猿松と呼び、十六歳(天文二十年)

に永樂錢一貫文を懐中して清洲に趣き、針ととりかへて路用とし、濱松に出て松下嘉兵衛に仕へ後ち清洲の信長に仕へたのが開運の初めで、その熱心と機智とはよく主人の嘆稱するところとなり、遠大な氣性は、柴田勝家の按摩をしたときの傲語にも知られる。中國征伐から山崎の復讐戦で終によく信長の後繼者となり終ふせたのである。

2 山崎の合戦

秀吉が中國征伐の掛引は小早川隆景の和を請ふを許さず、本能寺の變をきいても之を秘して清水宗治を切腹させてから、和を整へようとしたが、思ふやうに行かず大いに憂へてゐたにかゝはらず、意地を張つてゐたものであつた。和議ははじめ毛利から安國寺惠瓊をして申し込ませたが、今度は秀吉から惠瓊に厚く贈賄して事を運ばせたので、氣の毒なのは清水宗治であつた。

山崎合戦の天王寺の戦について、正史には之が分目の戦の様には見えてゐないし、明智光春が光秀を援けようとして、安土城を出て大津に来て堀秀政に遮られ、湖水を

大鹿毛に乗り、永徳の筆の墨繪の龍の陣羽織を着て阪本城に着き光秀の末子を殺し、珍寶を敵に致して自殺したといふことは疑ひを入れられる事である。

3 秀吉が信長の後繼者たる事業

A 眞先に弔合戦をしたこと。

B 嗣子問題の解決。

之は信忠の遺孤三法師丸秀勝を立て、信孝を後見としたのである。

C 信長の追善供養をしたこと。

明かに繼嗣的の名目事業で、この佛事供養を營み爲すに就ては事毎に宿將共の鼻を開かせてしまつた。この供養は年の十月に紫野の大徳寺で行ひ一萬貫を奇進し總見院といふ位牌所を建て寺領を寄附した。當時の見物人がこの孝養を賞嘆しないものはなかつたのだ。

4 賤ヶ岳の戦

天正十一年一月に瀧川一益を長島に討つ、そのあとに柴田勝家は甥、佐久間盛政をして近江に出で、賤ヶ岳に陣せしめた。三月、勝家は大兵を以て梁ヶ瀬に陣をすゝめたが、この時織田信孝が又岐阜に兵をあげたので長島には部將を當らせ、自ら岐阜を攻めた。四月十八日の曉に盛政は、中川清秀の守つてゐる大宕山を抜いて清秀を戦死せしめ、大に驕つてゐた。勝家之をきいて歸る様に命じたが、伯父の老耄とあなどつて悠悠賤ヶ岳に止つてゐる。敗報は秀吉に飛んだ。盛政が未だ歸らぬときいて「我軍勝てり。」と速刻岐阜から近江に出て晝夜兼行、曉風面に寒きころ盛政の面前に現はれ二十一日の朝日の上る前に盛政の陣に突入した。先鋒鎗をそろへて進む、之を七本槍といふ。加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、片桐且元、糟谷武則の七士である。石河貞友、櫻井左吉、伊木遠雄は刀を揮つて跳り入つた。之を賤ヶ岳の三振太刀といふ。この役首をとること五十餘級、勝家も従ふもの百餘人となりて北ノ庄に逃ぐ、二十三日秀吉追ふて之を圍み所在を従へた。勝家は宿臣を天主に集めて別離

の宴を張り、夫人織田氏及び腹心の士と共に自及したのは翌二十四日のことである。この夫人はじめは淺井長政に嫁し、長政亡びて柴田に嫁したもの、かの淀君の母に當るのである。

5 大阪の築城

秀吉はもとく織田の一部將に過ぎなかつたが、一朝主帥の位置に立つに至つては同輩であつた部將等及主人筋の諸將も、その配下たらしめねばならぬ。然るに確たる居城すらないので、その根柢を定めて置かねば一朝の風亂に柴田の轍をふまなければならぬ。彼は之を洞察してゐたので天下に令する便地を相してつひに、石山本願寺御堂の地でもと信長の亡したところは、水陸の接點で地域廣大而も船舶は蒐集し、軍略上からも經濟上からも好箇の地である大阪を見立てたのであつた。

工事は天正十一年五月から日夜三萬の人夫を使ひ、壘壁を高く濠は淀川の水を引いて深く、五重の天主は平原を威壓してゐる。内外古今無雙の金城が成つた。關西三十

餘國の大名は此の工に賦課されたのであつた。

6 秀吉の勤王

秀吉は居城は出来たが、京都に邸宅がなかつたので、舊大内裏のあと即ち内野に、一條から二條まで東は堀川から西は内野までの宏大な地を相して、四方に三千歩の石垣を繞した大邸宅を構へたのだが、天正十四年起工し一年間かゝつて出来上り聚落第と稱した。後陽成帝と正親上皇が御同列で行幸、皇后も准后も女御も妃嬪もいでましたのは十六年の四月十四日であつて、十五日には御前に諸大名の誓を立てさせ十六日には大饗宴を張つた。この時天皇は、「松寄祝」と申す御題で

わきてけふまつかひあれや松か枝の

世々のちぎりをかけて見せつゝ

といふ御製を賜はり、上皇も同じ御題で

萬代にまたよろづ代にかさねても

なほかぎりなきときはこのとき

といふのを賜はられた。十七日には音楽の催、十八日に還御といふ盛儀を極めた。

7 小田原征伐

小田原征伐について一言したいのは、北條氏が強かつたことである。秀吉が自ら總帥となつて出陣したことである。秀吉と北條との交渉は天正十六年五月頃から始つてゐる。愈々破烈したとき小田原を最後の地と定め韭山と山中城とを前衛としたのであつたが、韭山の城將は北條氏規、山中城は松田康長であつた。氏規は實に義に勇む大將で却つて細川忠興や蒲生氏郷や福島正則の軍の武勇を賞した位、非凡の才を表はし攻めると徒らに味方が討たれるので、秀吉は正則と蜂須賀家政に長圍の計をとらせて他はすべて山中城に向はせた、山中城は要害といふ程ではないので忽ち陥り一氣に小田原に迫つて十八年七月五日に氏直は開城し、十一日に氏政と氏輝の兄弟は自殺したが、まだ氏規の韭山城は陥らず終に二十四日に至つて開城した。實に三月以來百餘日

間、十餘倍の兵を拒いで陥落させなかつた氏規の力量と武勇とは、武士の間にも無比の評があつた。

8 朝鮮征伐

その原因は秀吉の大志、明を征せんとしたのである。鎌倉の白旗宮に小田原征伐の歸りに詣で頼朝の木像にいつたことでも中國征伐の時、信長が功あらば中國を遣さうといつたのに、中國は麾下の將士に與へ臣はすゝんで九州より朝鮮明國を平げようといつてゐることでも知れる。考へは明をとつて天皇をこゝに移し奉り、自らは天竺まで攻めてこゝの王となりたかつたらしい。朝鮮は証明の案内を命じられていふことをきかなかつた丈けでよい迷惑をしてゐる。

9 秀吉の人物

秀吉は一生を通じて悲觀してゐたことがある。それは身分の賤しかつたことである。秀吉が海内を統一した頃義昭は備後の鞆トモに流遇してゐたので、其の猶子となり征

夷大將軍とならうとしたが、義昭がきかなかつたので右大臣今出川晴季の助言で關白近衛前久の假子となり、天正十三年七月に關白宣下を見たのである。秀吉は元來姓さへもなかつたので、信長のまゝの平を稱してゐたが、關白となつたので藤原氏を稱する様になり大喜びであつたらう。九月には更に晴季とはかつて豊臣の姓を請ひ奉つて許されたのであつた。こんな風で天下に號令するに苦心した。家康と長久手に戦つて破れ爲め大いに之を待遇して家康の子義丸を養子としてゐる。御前に關白の命に叛かぬと誓立させたり、御料を献上したり、御所や社寺の修復をしたりして如才なく人心を收攬した。けれども結局はやはり戰國武士であつて、自己本位である。最も恐れられた家康に妹朝日姫を遣して婿としてしまつたなどはまるで技巧も甚しく、やがてその政策は婿に引き繼がねばならぬ運命となつたが、彼の寢覺はこの婿のある爲めによくはなかつたらう。五奉行五大老をおいた事は明かに將軍となり了ふせた象態でこゝが幼年時代からの立志希望の中心でなければならぬ。

然し秀吉は感心な人物である。幼年の時の主人、松下之綱を優遇したことである。之綱は今川の家臣であつて、氏真が亡びて家康に屬してゐたが、小祿の士であつたのを、山崎合戦の後に家康から乞ひうけて天正十一年に三千石(前は三十貫文の地主)を與へ、小田原征伐後には遠州久野城主として一萬六千石を與へた。時に一萬五千石を代官させたので、之綱も三萬一千石の大名となりその厚情に感激してゐたといふ。又足輕の當時結婚の媒介をしてくれた夫妻を呼び出して物を恤はし夫人は自ら衣類を洗濯をしてやつた話等もある。

報恩の念は忠君の舉と共にその美談である。



第三十六 徳川家康

第三十六 徳川家康

徳川家康駿河にありて學問を修む(二頁)

一 説明

イ 徳川家康

ロ 雪齋和尚(大原)

ハ 机上の經書

處 静岡在の臨濟寺の奥殿階上の一小書院
 挿繪は臨濟寺の奥の階上にある一小室(口
 繪参照)で、今もそのまゝ存してゐてこの通
 りである。それ故これを寫真に撮つて製版し
 たもの、そこへ子弟の學問受業を附描したも

ので、挿書がいかにも眞をうつすに苦心したかゞ窺知出来よう。なほ又一度この室を見て家康の用ひた硯や守本尊の懷中像や、大原長老の什器等を目にしたものは轉た徳川氏十五世の太平も縁由ある哉と領づかすには居られない。

二 主眼

家康の後年の大立身といふのは、幼時に修養した賜であり、玉磨かざれば光なきものであり、人學ばずんば決して知謀の表はるべきでない。第二國民たるものゝ思ひ當るところあらしめたいといふのを主眼としたい。

三 参考解説

1 家康の生立

岡崎の徳川は東に今川、西に織田といふ兩雄があつて容易に獨立し得べきものではなかつた。そこで家康の父廣忠は今川氏に頼るところがあつた。しかしこれには悲しい運命が伴つてゐた。それは家康の母は織田氏方の水野忠政の女であつたから勢相容

れず悼ましくも夫妻は離別となり、とう／＼家康は二歳で母を失つた。織田信秀が大軍を以て三河に攻め入つたのは、家康が六歳の時で爲めに國は大騒動が起り、結局救援を今川氏に求め、その誓のしるしとして可惜家康は駿河に送られることゝなつたのであつた。ところが途中で、田原康光の手勢の爲めに奪はれてと／＼信秀の手に送附されてしまつた。

信秀が岡崎に談判を開始したのはこれが爲めであつて、無論尾張來屬を憐憫したのである。廣忠は義ある城將どうしても、之をきゝ入れなかつた。信秀もさすがは豪將家康を害するやうな無法はしなかつた。そして名古屋城下の萬松寺の天王坊といふところに置いて大事に養育してゐる中に又して家康にとつての一大事が起つた。父廣忠が病死した。爲に岡崎城は今川氏の出城となるに至つた。八歳の時である。この頃安祥城は織田信秀の子の信廣が守つてゐたが、之を攻落して信廣を捕へてしまつた。こゝで兩軍には各々敵の幽囚者があるわけだ。捕虜交換といふ議がまとまつて家康は一

度岡崎に歸ることが叶つたが、後に又今川氏の許に行くことになつたのである。

今川義元は家康を安東の臨濟寺において大原長老雪齋をして養育させた。

家康は學ぶに求遂的であつたと同時に、素質も極めて聰明であつた。教科書にも見えてゐる人語をまねる鳥の一件と安倍川の石合戦見物は之を證するに足る。この話は共に徳川實記に見えてゐるから示して見よう。

家康が萬松寺の天主坊に囚へられてゐた時のことである。

「或る時熱田の社の神官が其の徒然を慰めんとて黒鶉といふ小鳥のよく諸鳥の鳴聲に似る鳥を献じければ近侍の者いと珍らしきものに思ひて興じけるを家康は思ふ旨あれば返せとて返させたり。神官思ひの外にて持ち返りぬ。其後家康近侍に向ひ、此鳥は己の音の劣りたるを以て、他の鳥の音を借りて、これをかくすなるべし。大凡鳥には其々自然の音あり、鶯は杜鵑の語を學ばず、雲雀田鶴の聲を眞似ず、各其本音を以て人に賞せらる。人も亦かくの如し。性質巧智にして萬事に

能あるものは、必ず遠大の器量なきものぞ。かゝる外邊のみかざりて眞の能なきものは、鳥獸と雖も大將の玩には備ふまじきものぞ」

といふのであつた。その鳥については諸説あつて或は黒鳥、ニハトリ、カラス、ツグミ等といふもそれは詮索の要はあるまい。

石合戦のことは

「今川氏の許にありし時、端午の節(五月の節句)に、印地打とて小供等のする石合戦を安倍河原に見んとて、近侍のものに負はれて、出て行きけり。一隊は三百人あまり、一隊は百四五十人ばかりなり。人々皆多勢の方によりて見んとす。家康曰く『己は小勢の方に行かん。小勢の方は自ら志を一決して恐怖の念なく、隊伍もいとよく整ふものぞ』と近侍の者『何を以てかく云はるゝか』と審しく思ひしに程なく打合はじまりければ、多勢の方一さへもせず敗走し、其爲に見物の人々押しすくめられ、辛うじて逃げ散りたり。是を傳へ聞きしものども家康の幼

少なるに似ず聰明なるを感せぬはなかりしとぞ」

と見えてゐる。長じてはあれほどの大器量となり、長久手の一戦に秀吉を敗つてかつはその客將となり、秀吉の薨するに方つても、遺言して託孤されたのであつたことは誰も知る所。この遺言も一に家康を頼りとしなければ、豊臣の不爲めといふので一再也なかつたといふは、今、廣島の淺野家に残つてゐる文書が、最も正しい證左である。

天下をとつたのは宿望であつたのに加へて、その機運を作つてやつた大阪方こそ先の見えぬ淺ましが窺はれる。

2 雪齋の人物

雪齋といふ坊主は仲々の豪の者、今川氏の軍師で常には法衣に誦經の佛者姿であるが、いざことあればたちまち鎧兜に身を固め、馬上に采配を打ち振つて進退の懸引をする。學は兵、經、書に通じ勇は關項を超絶してゐた傑僧。家康が大將軍となる修業

には充分の師であつた。

雪齋長吉太原崇孚禪師略傳（妙心史妙出）

太原は駿州今川氏の一族菴原城主菴原左衛門尉の子である。最初京都東山建仁寺へ錫を掛け西堂となつたが、後妙心寺の大休和尚が道聲四方に振ふを見、來り參禪久しうして投機の偈を呈して曰く「平生底不受他瞞、大地都盧鐵、一團臂破將來無寸土、三更紅日黑漫々」と遂に證明を得故國駿州に入りて今川義元の歸信を得て臨濟寺を中興し大休を請して其が開山となし自ら下つて第二祖となつた、後妙心寺に出世し更に富士山善徳寺に住した。晩年同州葉梨の長慶寺に入りこゝに示寂した。遺偈に云ふ。

高懸業鏡、滿六十年、任手槌碎、平生潭然、

と是れ實に弘治元年十月十日なり。同三年乙巳三月禪師號を下賜せられ勅諭寶珠護國禪師と云ふ。

太原元より軍書に通し活潑々地の禪機を示して道風四方に振ひ天文十八年今川義元

の織田信秀(信長の父)を攻めんとするや後奈良帝は太原をして和議を講せしめた。是れ所謂笠寺の條約であつて其の勅書の如きも現に臨濟寺に存してゐる。

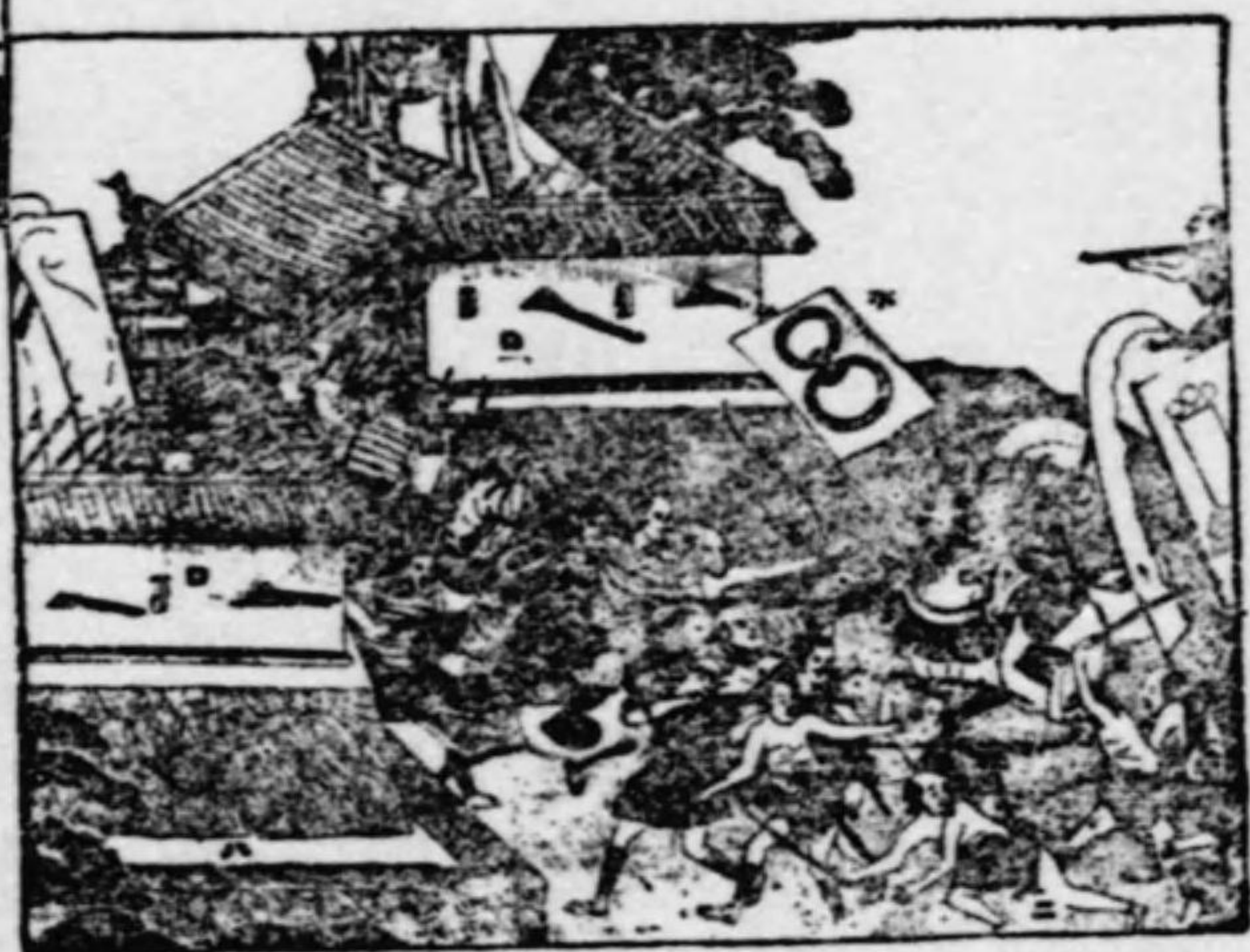
是れより先き三河の大將徳川廣忠は援を今川に請うて織田氏に備へたのであつたが外祖一族に誤られて今川の怒を買ふたのである。而して今や織田今川の講和解決には其中間に在る徳川を抑制するの必要があつた。そこで彼の徳川家康は質子として今川義元に監せらるゝ事となつた。當時太原は駿府臨濟寺に法幢を掲げて居たので家康は義元の許を得て太原に従ひ諸史兵書を學び太原門下の智岳觀公(本州結成寺開山)を友として其感化をも受けたのである。家康未だ十六歳の年少であつたけれ共、英邁の氣眉宇に現はるゝものあり。太原常に義元並に家康の爲めに薰陶を怠らず、兩者英雄の將來を囑望しつゝあつたのである、其頃太原が太平の雀と題した一詩がある。

何鳥太平呼雀稱、
希音出鷓響重屬、

宣和及第却堪笑、
濟北頻伽是大鵬。

と。蓋し二者の將來を諷するものにあらざるか。其鳥と言ふ者は義元が雀と呼ぶものは家康に代ふるに似てゐる。思ふに太原の家康を養ふは、鷓の卵を孵化して其の殻を剝啄するが如く、義元の小雀を蔑らんアナドの概あるは後日、大鵬の雄飛するを感知せざるによるものと言ひ得るのである云々。(雲齊についての文献はこの以外には見えない)

家康大阪城を攻む



第三十七 徳川家康（つづき）

家康大阪城を攻む（三〇頁）

一 説明

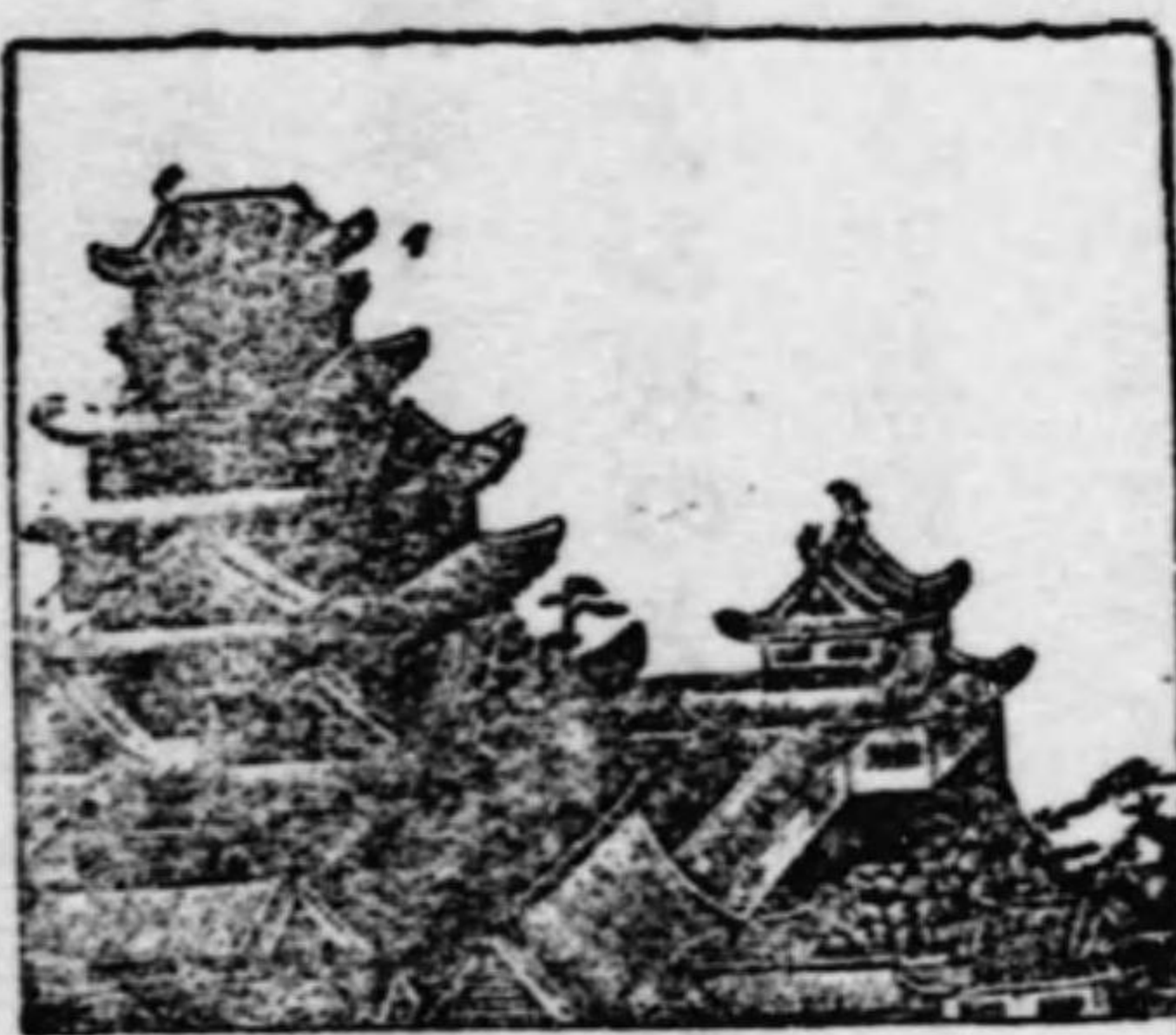
イ 大阪城天主閣

ロ 土塀

ハ 城濠

ニ 裸體戦争

ホ 幟指物（違輪の紋所）



この繪畫は大阪夏の陣（元和元年五月）の時の堀河口の戦の模様を描いたもの、乗り出して来た城將は誰とも定め難いが、その堀河御門内にはまだ多くの將士が居て三巴の幟指物等武器が

見える。之れは夏の戦で暑熱に堪へられないので一と戦しては引き込んで休息し代りが出て来ては又寄手に當るのである。裸體のものもあるが装甲したのも甲の素着をやつてゐる。徳川方も同じである。それから注意すべきは武器である。以前の飛道具は専ら弓矢であつたが、天文十二年渡來した鐵砲はすでに長篠の戦以來用ひられてこの大阪の陣の時は盛に使用されたことである。土塀の城垣からはそれが爲めに鐵砲穴をしつらへねば新武器に對抗しかねることとなり、こゝに築城法に一大改新が來た。けれども結局は大砲の威力は實に國崩しの稱の通りで籠城の戦も不利となり又戦術上にも大變化を來し野戦の巧妙をきはめることとなつたのである。

挿繪はその過渡期とも見られ武器も新舊入交りであるし戦も大阪方は一方には冬の陣の講和で埋壕されてゐて不利のこともあるが、兎に角茶臼山の陣所に對して重成以下は奮戦してゐる。

挿繪に態々天主を示したのは安土桃山時代以來發達した天主といふ築城法を説明す

るにある。安土の七重の天主は輪奐天下を睨壓したものがあつたが可惜その信長亡後は廢滅に歸したので繪畫だも殘存せぬ。然るに大阪城のこの繪は家康が大阪を攻陥した後に畫家に命じてその狀を描かしたものであつて之を後に山形の城主最上義光に下賜したものに係り、最上氏が滅びてからは市の南郊光禪寺に寄納したのであるといつて今なほその所藏となつてゐるので之を以て當時の城の模様を知らせたのである。

大阪城の天主閣

この挿繪は光禪寺の堀河口の戰の圖と共にあげて説明もそれと共にしておいたが實は全然別の繪畫である。即ち大阪の陣に従つて黒田長政が命じて從軍者中のあるものに描かせたもので後に大阪の當時を語る爲めに保存してゐたので今以て黒田侯爵家に藏されてゐる。蔓かゞやく五重の天主凜として天下を鎮したものの、雄丰を思ふ。

二 主眼

この繪によつて大阪の夏の陣の模様を知らせると共に當時の築城の様子を示し、事

こゝに至つて豊臣氏は滅びるのは是非なき運命に遭逢して行つたことを考察させねばならぬ。秀吉は一世の智勇を以て國內はおろか朝鮮支那までも國威を轟かせてゐたのにその薨去後はわづかの日子を算してかはりはたこの運命、大阪城に諸雄が衣冠を正した時は誰かこの日を思ひ設けたものがあつたらうか。

榊花一朝の夢よりも桐花一夕の果敢なさを思はせそゞろに阿彌陀ヶ峰に眠る太閤の靈を偲ばすには居られない。同時に恐るべきは小人、語るべからざるは女子、實に女子と小人は養ひ難きものであることを諭したい。

三 参考解説

1 片桐且元の赤心と豊臣滅亡

慶長十九年まで五年間の工事で出来上つた大佛は八月一日に開眼供養と定められた然るに七月二十九日に所司代板倉勝重は家康の命といふので之を停めしめた。無論大鐘の銘の事件である。銘の作者は當時の碩學東福寺の僧清韓長老であつた。けれども

之を解釋したのはかねてからその篤學を羨望してゐた五山の生半熟學者の僧共であつた。彼等の弄策は正に敵は本能寺にあつたのだ。且元こそは大萎れとならざるを得ない。けれども大御所の鬚髯を撫でて出世を願つた學者があつた。林羅山はあれ程の學者でありながら、なほ且説を曲げて家康におもねり五山の僧に加擔の進言をしたことは云ひ甲斐ないことであつた。

片桐且元は供養の日取を無期延期として折角出來上つた準備をも投げすて、清韓を伴つて駿府に下り城西の大鱧オホクマといふところの誓願寺に居て本多正純をして事をたゞして陳謝した。すると家康は

- (1) 秀頼が大阪を立退くこと
- (2) 秀頼が參勤すること
- (3) 母淀君を人質として關東に入れること

の三難題の一を選べといふ。之が大阪にとつてどうして堪へられよう。且元も今は全

く百策つきて、(2)、か(3)、を採らずばなるまいと申し送つた。大阪では更に大藏卿(大野治長の母)を駿府に遣して陳謝させた。すると家康は之を頗る厚遇して江戸にも行かせたり土産物を山と贈つたりして、鐘銘のことなど意にも介せぬ風を見せた。而して歸阪すれば且元の報告。さては且元に二心と疑心暗鬼の怨みに沈んだのは是非もない女の淺慮。大阪の修理太夫治長は天晴れ忠義隨一の者なり遣はすべかりしをと、且元は讒せられたるが如く悪ざまの風評が立てられて、二心者、變心者との聲が高く歸れば捕斬の手筈が固い。年月の彼の苦心も今は水泡に歸した。大鱧の寒風に安き夢さへ知らずして心を焦したのも小人輩の爲めにあやまられ老猾なる智者の爲めに陥穽されたのであつた。君の行末を窺知し得る者は且元のみなりとは是非もない。調停は破れた。關東と關西とは手切れとなつた。小人の招きに應じて集るものは浪人のみとは悲しいよりも寧ろ當然である。國持大名の一人や二人なかつたのも眞に秀頼の意でなかつたのよることを示す證左で、その十萬はすべて浪人、關東方は總勢二十萬、

けれども城中には糧食も多く仲々陥らなかつたが、大砲をうちかけられて淀君の怖ぢけによつて東軍の申込んだ和議が結ばれた。時は慶長十九年十二月のこと、之が即ち冬。の陣であつたが、講和條件履行について行違ひが起り翌元和元年に再び開戦の擧となつたがこの時は本多正純の爲めに中堀も埋められてゐたので、木村重成等が如何に奮戦してもこらへきれない。その上城中には内應者も出来てとう／＼陥落し、秀頼も淀君も近臣もすべて自殺して天下の持て餘し物は片附けられた。之が夏五月のこと故夏。の陣といふのである。

四 参考解説

1 徳川氏

家康は三河加茂郡松平村を出所とする松平系から出てゐる。源氏の末流であつてもとは新田氏である。

源義家—義國—義重—義秀……(六代略)……有親—親氏—

—泰親—信光—親忠—長親—信忠—清康—廣忠—家康

松平氏は土豪であつたが、上野の新田氏の族に、親氏といふものがあつて得川に居た。如何なるわけか浪々の身となり三河に来て松平氏の女の婿養子となり松平姓を繼ぐことゝなつた。親氏と泰親の二代に松平氏の勢力が大いに加はつた。信光は殊に武勇の譽も著しかつた。今川氏が伊勢新九道長氏(早雪)を遣して討たしたが長親の爲めに却つて破られた位であつた。清康も雄才志略の大將で近郷を破つた。廣忠は幼くして後をついで松平の主となつてゐる。この頃から三河武士の氣風は培はれて來たのである。(参考、三河物語、藝文第七年第十號の原博士の三河物語の武士道、當代記、駿府記等)家康後にその出所上野の得川を徳川と改め又姓を之に得たのだ。徳川は天領として代官をおいて維新に及んでゐた。松平村は岡崎の東北の六所山の西の麓にある山間の地である。巴川に添ふて下ると西部三河平野に出て來る所である。

2 徳川氏と三河武士

廣忠が家をついだ時は幼少であつたから櫻井信定といふ者が實權を握つてゐて廣忠の位置も危かつたので一時他郷に流寓するの狀態であつたが天文六年に今川氏の力で歸城して後に水野忠政の女を娶つて竹千代を生んだ。忠政の歿後にその子信元といふ者は織田氏と通じたので妻はたうとう離別となつた。織田信秀に三河を攻められた時に松平氏は今川氏に援を乞ひ、愛子竹千代を質として遣る途中で織田方に捕へられて尾張に連れて行かれた。そのうちに廣忠は歿した。その後今川氏の援で三河を恢復し竹千代をとりかへして今川氏に送つたのであるがそのうちに信秀も歿した爲めに松平氏は辛くも三河の一角を保つことが叶つたわけであつた。けれども今川が松平に對しては實に慘酷であつた。その領地は奪ひ家士は戰に驅使される有様で、三河武士は弱者の運命に立つたのだ。領主は質、物資は失せ、その上犬馬の役をしなければならぬ。これが隱忍不拔、艱苦缺乏に堪ゆる天適強志の三河武士の精神が生れ出た。所以である。

ことを忘れてはならぬ。

3 小牧山の對陣と家康の才畧

家康は長久手の一戰に於て秀吉の鋒先を挫いたものゝその力は到底彼に及ぶ所でないといと知つてゐたので戰勝を機として和するのを利益と見てゐたし、一方秀吉も世局から見て家康を敵として有つてゐることは不爲めと知つてゐた。織田信雄シノカウはその間に立つて甘い周旋をして和議をとり運ばせたのであつた。それから後に秀吉は朝日姫を家康の許に嫁せしめ姫の母大政所を遣して三河を訪はせ天正十四年の家康の上洛をも促がすに至つたのであつた。この時に家康は大阪城で秀吉に謁して臣事の禮をとることゝなつたのである。

4 關ヶ原戰役について

久しい間壓伏の不運に陥つてゐた三河武士には秀吉の薨去といふことは一の壓力を除かれた様なものであつた。内々家康はこのことを豫期してゐた爲めに早くから諸大

名に私恩を施してよく人心の收攬につとめて來たのだがこの壓力減退からは一層無遠慮に之をする様になり豊臣家の法意を無視したり委任された權限を犯したりする様になつた。されば一面に之を除いて豊臣家の不利のしるものを絶やさうとするものが起つたも無理はない。

關ヶ原の役の様は最早や述べる要はないとおもふが、たゞこの役に於て天下の形勢が定まり家康の霸權が確立し各々覇者とならうとした英雄の氣分も一變して戰國氣風は平和時代に變つたといふことは注意を要することである。(關ヶ原の參考書は參謀本部の日本戰史や渡邊世祐の稿本石田三成がよい)

戦後の處分は大分に寛大であつた。石田三成、小西行長、安國寺惠瓊は斬られたが、浮田秀家も長曾我部盛親も増田長盛も眞田昌幸幸村父子も助かつてゐる。吉川廣家は毛利の領地の安泰を得られるとおもつて内應したのに却つて六ヶ國(備前、備中、安藝、石見、隱岐)を奪はれ僅かに長門と周防の二國だけを保たせられ。上杉景勝は會

津の百二十萬石から米澤の三十萬石に落され佐竹義宣は常陸の五十四萬が秋田の二十萬石に轉封された等は手ひどい罰であらう。

慶長六年の二月には諸代大名の論功行賞が行はれた。その主なるものは

	新封	石	舊封	石	新封地
前田利長	一一九、五〇〇〇	八三、五〇〇〇			加賀金澤
伊達政宗	六〇、五〇〇〇	五八、〇〇〇〇			仙臺
小早川秀秋	五七、四〇〇〇	五二、二五〇〇			備後岡山
黒田長政	五二、三〇〇〇	一八、〇〇〇〇			筑前福岡
池田輝政	五二、〇〇〇〇	一五、二〇〇〇			播磨姫路
加藤清正	五二、〇〇〇〇	二五、〇〇〇〇			肥後熊本
福島正則	四九、八二〇〇	二〇、〇〇〇〇			安藝廣島
淺野幸長	三九、五〇〇〇	二一、七〇〇〇			紀伊和歌山

細川忠興	三六、九〇〇〇	二三、〇〇〇〇	豊前小倉
藤堂高虎	二〇、三〇〇〇	八、三〇〇〇	伊豫今治
山内一豊	二〇、二六〇〇	六、八六〇〇	土佐高知
井伊直政	一八、〇〇〇〇	一二、〇〇〇〇	近江佐和山
奥平信昌	一〇、〇〇〇〇	八、〇〇〇〇	美濃加納
加藤嘉明	二〇、〇〇〇〇	一〇、〇〇〇〇	伊豫松山

5 家康隱退の理由

家康が將軍となつてから二年位で將軍職を譲られたのは、秀忠を將軍として自分は後見となつて將軍の威嚴を一層重からしめる爲めと之で政權を代々に傳へるといふ威を示す爲めとである。又隱に豊臣氏を臣事さす示威の爲めでもあつた。

6 鐘銘事件

方廣寺の大佛殿の完成は慶長十九年の夏であつた、開眼供養と堂供養とを八月一日

に行はうとした。家康は之を別々にせよと命じ且つ鐘銘棟札に不審があるとして供養の延期を命じた。奉行は片桐且元で大いに驚いたが家康は元來なじる心底であつたので銘に不吉の文字ありとして之を五山の僧に問ふたのである。選者は一代の博學僧清韓である何で不吉のことがあらうか、けれども五山の僧どもはかねて清韓の博學と能文とを嫉視してゐたので之を批難して家康の意に迎合せしめた。且元は之について駿府に來て辯解をする考であつたが家康は態と面會せず僧崇傳と本多正純とに棟札の異式と大阪に浪士を招くことを詰問させ鐘銘は之を磨り潰しを命じた。大阪では容易ならぬことゝ見て、老女大藏卿を使として駿府にやつたが家康は之をこゝろよく引見して「大阪のことは且元からよく聞いてゐるが秀頼母子のことは何とも思はぬから安心せよ」として鐘銘の事件などは口にもせなんだ。この後も且元と大阪との離間策はかうして種々の形式でくりかへされたのだ。且元は歸國に際して秀頼に誓書を出させようかと尋ねたが、夫れ位ではすむまいとの返事であつたので、大藏卿に、家康の内意とし

て、大阪の國替と淀君の江戸詰秀頼の江戸詰の何れかを選ばなければ落着きまいと告げた。大藏卿は女である家康の策にのつてゐた。大いに驚いて且元を疑ひ大阪に報じたので秀頼は大いに怒かり祿を沒收し駿府と江戸へ且元の不忠を訴へた。且元は詮方なく領地茨木へ落ちこゝに東西の手切れとなつた始末である。且元は恪勤精勵の資であつたが小人物のところから家康の具とされたのは遺憾であつた。

鐘銘について清韓の文を賞讃したのは妙心寺の海山和尚一人であつた之は天下の泰平を祈るものだといつたが、林羅山の如き學者は且つなほ之を批難して説を立てたことは當時に當つて口惜しいことゝいはねばならぬ。

7 大阪方の戦備

關東軍が整々と進んでくるに反して大阪方は稍々後れ手をとつた米の搬入も太閤縁故者の招致も思ふ様には行かなかつたが時は丁度關ヶ原の戦後幾年もたゝないので大名は一人も應じるものはない中に浪人は名あるものが集つたのである。真田幸村、長

曾我部盛親、後藤基次、毛利勝永、塙直之、明石余登、御宿正友等の諸傑、參謀係には大野治長の指揮の下に織田右樂、木村重成、薄田兼相等であつた。かくも浪人が多いのに一人の大名すら招きに應じなかつたとは人の心はさてもさもしいものである。又浪人はよく革命的氣風を有してゐて氣概は實に高かつた。不利と知りつゝも夏の陣の如きは奮戦したのであつて天下の大敵を物ともしない不敵さは、家康、秀忠さへも死地に陥つた位であつたので役後は關ヶ原の戦にあんな寛大な家康でありながら木の根草の葉を分けても浪人を見つけ出して片附けたといふやり口をとつたのである。

8 家康の薨去

家康は元和二年の正月に獵に出て鯛の天麩羅を食つて中り之がもとで四月十七日に薨去された。薨するに臨んで本多正純と崇傳、天海に後事を托したが、この時秀忠は三十八歳で將軍となつてからも十年を越してゐたのに用心深さが思はれる。遺骸は久能山におさめ、遺命によつて翌年四月に日光山に改葬する時には勅使が下向したし、

正一位を贈られ日光大権現の神號をさへ賜つた。日光廟は寛永中に家光の建立にかかり、佐渡の相川と伊豆の繩地の金を掘つて之を盛に使用し眼も欺くばかりの華麗を極めた。正保二年には人臣の廟としては未曾有の宮號を賜はり東照宮と呼ぶ様になつたのである。

家康は忍耐の人で、今川、武田、織田、豊臣に押壓されつゝ六十歳を越すまで機を待つのであつた。その間に三河武士の氣風を培養し大名の心を收攬し一足飛びの成功を度外にして質實に着々歩をすゝめて行つたがその精神はかの「人の一生は」の遺誠に見えてゐる。世人が

織田が搗き羽柴が捏れし天下餅骨も折らずに食ふはさくがは

と見たてゝ居るも

鳴かぬなら殺してしまへ時鳥

(信長)

鳴かぬなら鳴かして見せう時鳥

(秀吉)

鳴かぬなら鳴くまでまたう時鳥

(家康)

と三英雄を川柳子の比較したのも皆その隠忍持久の特徴を裏書してゐる者である。苦勞して酸いも辛いも世の荒波を知つてゐた家康は圭角が失せて思慮が周密で決して一方に偏しなかつたところに偉大な人格がほの見えるのである。



徳川家光諸大名を試む

第三十八 徳川家光

徳川家光諸大名を試む (三三頁)

一 説明

イ 徳川家光

ロ 伊達政宗

ハ 小姓

ニ 外様大名

家光が軍職についた時は元和九年で父秀忠はまだ存世してゐたのであつた。「余は生れながらの將軍なればすべて我が臣なり。」とは振つた挨拶、諸侯は思ひがけなかつた

が又一人づゝ別室で丸腰のまま刀を興へて中身を檢せしめた。寛永九年に父秀忠の喪を發し、弔問に出た諸侯に「父は戰場武功のもので皆共に恐れられしが余は若年にして戦をしらずこの期を好しとして叛くものは早々歸つて用意すべし」と申し渡した。此の時伊達政宗が進み出て「勇敢なる御掟を御治世の初めに承り喜び入りまする誰が恩惠を忘れて叛くものがありませう。もし萬一にも左様のものあらば君の軍を煩はす程にも候はず。老いたる政宗一人馳せ向つて春秋に富まれたる君に働き振を御見せ申す。」と答へた。

二 主眼

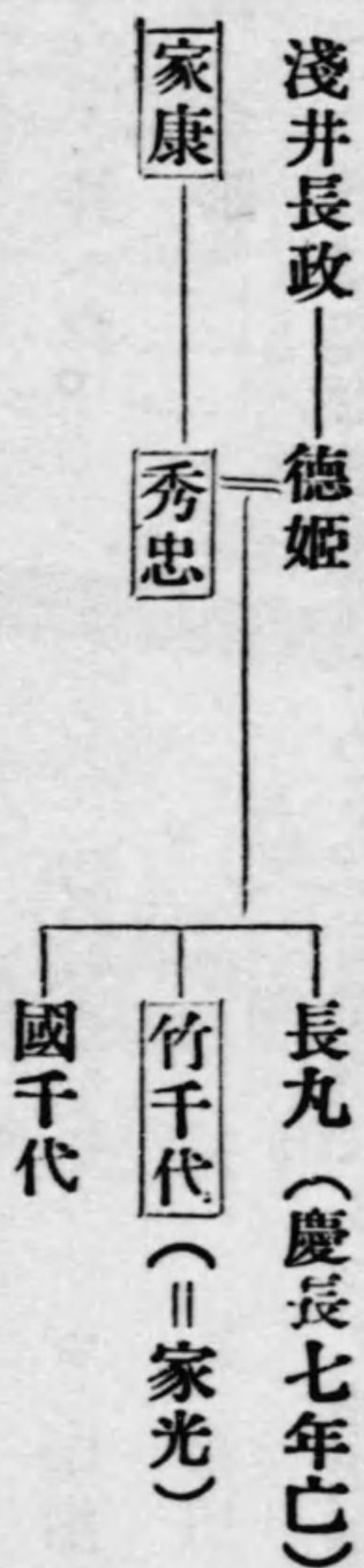
この繪は勿論想像畫である。この繪によつて徳川家光の強膽不敵なる有様を知らしめ以て徳川三百年の大平をなせし基礎を思はしめねばならぬ。

三 参考解説

1 家光の幼時

第三十八 徳川家光

彼は幼名を竹千代といつて秀忠の次男（慶長九年七月出生）である。母、兄の關係は系圖に示す通りであるが、乳母は名高い賢婦人春日の局であつたので、幼君の素性は遺憾なく伸ばすことが出来た。つまり家庭教育に成功したものであつた。



春日局は本名を阿福アホクといつて齋藤内藏助利三トシサツの女であつた。稻葉正成ナガハの妻となり後に召されて竹千代の乳母となり年二十六歳で従三位となる。國千代が小憫恰の性質から相續問題が色々取沙汰されて竹千代は除かれようとした時、伊勢參詣と詐つて駿府の家康に國亂の基と訴へ家康が突然の下向で竹と國との禮待を異にして「國は竹を眞似よ」と誡め家康の座した上座に竹のみを召して、茲に上らうとした國を「こゝは將軍の上るところ」と叱したといふ話は國最負の家臣共を如何ばかりか失望させたこと

であつたらう。秀忠にも諭して世嗣は竹千代と確定し世間の噂も鎮つて高いは局の名のみとなつた。家光は局を便りとしてゐた。寛永五年に家光が痘瘡にかゝつたとき、自分の命にかはつて御助けしたいと祈りその爲めに病を得たなら醫者の藥は服まぬと神に祈願をこめた。寛永二十年に局が病にかゝつた時は家光は毎日見舞ひ自ら藥を與へたが、局は服む風をして懷中に傾けて神の約に背かず六十五歳で薨去したが、幕府は歌舞や音曲を禁ずるの令を發し三家はじめ諸侯は家光を弔問した程であつた。葬は局が嘗て兩親の靈を祭るために營んだ本郷の龍岡町の麟祥院で行はれた。（今も墓がこゝにある）

2 家光の剛膽

家光は春日局の保育で、その天性を發揮することが出来、前記の如く就職の初から諸侯の膽を奪ひ、先天的の將軍と自他共に任ずることになつた。こんな風であつたから、彼の政令はよほど嚴重であつた。武家諸法度に違ふたものはどしどしと罰してゐ

る。こゝに、改易された者の中寛永中の分で

寛永四年	村上、義明	(村上九萬石)
同五年	福島正則	(廣島五十萬石)
同六年	徳永昌重	(高須五萬三千石)
同七年	最上義俊	(山形五十七萬石)
同八年	本多正純	(宇都宮十五萬石)
同九年	松平忠直	(北庄六十七萬石)
同十年	加藤廣忠	(熊本五十二萬石)
同十一年	細川忠長	(駿府五十萬石)
同十二年	松倉重政	(島原六萬石)
同十三年	池田輝澄	(山崎六萬石)
同十四年	生駒高俊	(高松十七萬石)

等は主なるものであるがこの他にもなほ多く沒收されてゐる。中でも正則と廣忠は人の目を牽く。正則は秀吉の愛臣であり、關原の役には徳川家の殊勲者であつたので憚られてゐた。廣忠は清正の子で紀伊頼定の室とは兄弟の間柄であつたが共に無斷で壁を修理した件によつて改易となり、正則は信濃に、廣忠は庄内に謫されたのだ。

3 外國との交通

南蠻人は天文十二年八月(三百五十年前)に大隅の種子ヶ島にきて島主種子ヶ島時堯に鐵砲をつたへたことが鐵砲傳來記に見えてゐる。(漂着した葡國水夫ピントウが初めて持参した火繩銃と漁夫の娘と交換したといふ情話が今なほ傳つてゐる。ピントウ紀念碑が葡國公使カーネーロ氏等の爲めに目下建設計画中である)

慶長の頃豊後に和蘭船リーフデ號が漂着した。船長はクエツケルネクといひ水先案内としては有名な英國人ウィリアムアダムス(三浦按針)が居た。アダムスは家康の顧問となり横須賀の逸見の地方を賜はり三浦按針と改名して歸化した。妻は馬込某とい

ふ平戸人であつた。和蘭は按針の斡旋で慶長十八年に日本との貿易の許可を幕府から得た。以後英蘭二國は貿易のみを事として天主教を宣傳しなかつたので、我國に迎合されて來た。我國人で海外へ渡航したのは天正十年に大友宗麟、大村忠純有馬晴信の三侯が羅馬に使を送つたのに初まり十八年には伊達政宗が支倉常長を太平洋を横斷してローマに遣つてゐる。その時主、伊達政宗は常長の行を送るに、

邪法迷邦不唱終ハシナフ 欲征蠻國未成功シテ
圖南鵬翼何時奮レノニカハシ 久待扶搖萬里風シツ

の一詩を以てしたのを見れば大抵何の目的であつたかは了解出来るのである。

その他には濱田彌兵衛、山田長政等が名高い。何れも幕府の朱印狀を有しなくては斷じて渡航ならぬのであつた。

4 キリスト教について

我國キリスト教の傳播は耶蘇教の一派エヌイタ教の創立者の一人であつたフランシ

スコザビエルが天文二間に日本へ來て布教したのに初まり九州山口方面に歸依者が相當にあつた。秀吉は自ら信じたが後に國を奪はれるものとして之を禁じ、家康も國の事情を知られることを恐れたので嚴禁し、家光も固くこの志をついだのであつた。

5 島原の亂

この亂は徳川治世中の大事件であつた。亂者は小西行長の浪人共で島原城主松倉重敏の秕政に乗じて起つたのであつた。天草の叛徒と力を合せて益田四郎時貞を總大將としたが盛に基督教徒を煽動して熱狂的の力を以てした。幕軍が攻めあぐんだのも之が爲めであつた。板倉重昌が失敗して更に松平信綱と戸田氏鐵を遣したので重昌は寛永十五年正月の元旦に決死の攻撃をして戦死した。けれども賊はこの日十七人の死傷があつたのみ、信綱は和蘭人の援助を乞ふたが効なく方策が殆んどつまるまで賊は強かつた。二月末に山田右衛門作エモなるものゝ内應によつて漸く落すことが出來た始末であつたので以來幕府はキリスト教を恐れることが一と通りでなく、かくて嚴重な鎖國

令が出たのである。發令は十六年の七月で以後はオランダ船と支那船の他は絶対に來航を禁じ、宗門改をして踏繪を用ひ人民は必ず一宗一寺に屬せしめたのであつた。



後 光 明 天 皇

第三十九 後光明天皇

後光明天皇(三九頁 御肖像)

一 説明

イ 御冠

ロ 東帶

御肖像は京都の泉涌寺センヨウジにあるもので最も正しい。先年帝國大學の史蹟編纂係によつて公刊されてゐる。

まだ御少壯の時の御容姿であるが仲々に英明の氣風を備へて

遊ばさるではないか。

二 主眼

御影を拜しても如何に英明な方であつたかと云ふことが分ると思ふ。天皇の御盛徳を知らせやうと思つて教科書に掲げたのである。天皇が英明な方で、幕府を抑へ附けられたが、早く亡くなられたと云ふことは公幕関係を説くに必要なことである。

三 参考解説

1 後光明天皇

後光明天皇の所には後水尾天皇のことも書いてある。其後水尾天皇の時に彼の紫衣事件があつた。後水尾天皇は大徳寺とか明禪寺とか云ふ寺のエライ坊さんに紫衣を賜はることがあつた。是は實際朝廷から拵へて賜はつたものである。然るに幕府は之に對して異議を申立てた。つまり餘り紫衣を多く遣り過ぎると云ふので故障を申込んで其上に朝廷から賜つた紫衣を奪つてしまつた。すると澤庵和尚澤庵漬の發明者、名は

宗彭)が大いに反對を唱へた。澤庵和尚の考は理屈のあることで好い考であつた。それは『幕府のやり方は形式に關はつて居るのは二十五年経たなければならぬと云ふ規則が作つてあるけれどもそれはいかぬ。禪宗では頭腦の良い者は一年か二年でも悟りが開ける。馬鹿な奴は二十五年やつても三十年やつてもいかぬ。故に唯年限を定めて二十五年経たなければ紫衣を戴くことは出来ない』と云ふのはいかぬ。エライ奴は長くやらないでもエライ坊さんになれる。どうしても二十五年掛らなければ貰へないと云ふことは不當だ』と言つて反對したので、幕府では怒つて澤庵を上の山へ流してしまつた。是が有名な紫衣事件として、名高い公幕關係となつて居る事件である。江戸幕府が朝廷を輕んじた譯で、天皇が勅を以て賜うたものを取上げたと云ふのだから繪旨を無効にするものである。それで後水尾天皇には、澤庵和尚が流された時分に

あし原やしげらばしげれおのがまゝ、

とても道ある世とは思はず

と云ふ御製を詠ませられた。即ち紫衣事件に憤激して詠ませられた歌である、兒童にむかつては、幕府が如何に朝廷を壓迫したかを説明しなければならぬ。後水尾天皇の次の次に後光明天皇が、御年若くて位を嗣がせられた。後光明天皇は非常な英君で、幕府のやり方を憤慨され、之を抑へ附けることに極力努められた。それだから後水尾天皇の話をしなければ後光明天皇のことが分らない。其所を注意して説明する必要がある。天皇が幕府を抑へつけられたことは色々あるが、其中で名高いことが二つ書いてある。一つは後光明天皇が仙洞御所に在らせられた、後水尾上皇の御病氣を御見舞に行かれた時のことである。仙洞御所は京都の御所の近くに在るのだけれども、幾ら近いと言つても矢張り御所の門を出なければならぬ。門を出ることは天皇行幸になる一寸上皇の御見舞に行かれるのでも行幸と云ふことになるので、時の所司代板倉重宗は「それは行幸になるから一應江戸へ斷つて置かなければ行幸を宜しいといふことは申上げられぬ」と申上げた、すると後光明天皇は「上皇の御病氣の御見舞に行くのに一

々江戸へ話さなければならぬと云ふのか、それほど言ふならば京都の御所から仙洞御所まで長い廊下を造れ、さうすれば朕は廊下傳ひに毎日御見舞に行く、さうすれば外出にはならぬから宜いだらう、それが出来なければ一々外出する外はない」と申された。近いと言つても其所へ長い廊下を造るのは容易なことではない。高架線でも設けなければ出来ぬ話である。重宗が幾ら言つた所で若しそれが出来なければ仕方がない。宜しいと云ふ譯でお出でになられたと云ふことである。又一つは天皇が擊劍を御やりになることは、幕府で定めた公家法度の中に止められて居る。所が後光明天皇には之を好ませられて度々御覽になる。又御やりになることもあるので、重宗は「天皇が擊劍を御やりになることは江戸に對して聞えが悪いから止めて貰ひたい」と申上げたけれども、御止めにはならない。そこで重宗は、どうしても御止めにならないければ死を以て諫める、死諫をしなければならぬと申上げた。すると後光明天皇は、「それは面白い、朕は未だ武家の切腹を見たことがないから是非見せて貰ひたい。明

日、紫宸殿の前に蓆を敷いてやるから一つやつて見せないか』と言はれたので、重宗も實際に腹を切ることも出来ない『實は強、申上げる爲に切腹をすると申上げたのであるから、切腹のことは一つ御免を願ひたい』と願ひ出た『それなら擊劔を見ても宜いか』、『それは已むを得ませぬ』と云ふことで相變らず御覽なされたと云ふことで、斯う云ふ天皇になると公家法度を作つても、法律を作つても駄目であるが、其所が皇室の尊い所で、又重宗が幾ら言つても仕方のないことであつた。後光明天皇のやうな御方が若しももう少し長壽を保つて居られて、幕府を抑へることが出来たならば、或は朝廷の権力は、モット早く伸びたかも知れないが痘瘡の爲めに御年少で崩御遊ばされたことは國家の大不幸であつた。

2 京都に於ける幕府の權勢

家康は秀吉の造營した宮殿を仁和寺や南禪寺に寄進し、更に皇居の敷地をひろめて結城秀康に命じ、小堀政一マサカズを奉行として諸侯に課し新殿を營み御料を奉り、かうして

主上の御よろこびを買つてゐいて一方には所司代といふ宮中の張番を設け承久亂の轍を踏むまいと計つたのであつた。板倉勝重は初めて之に任せられ十八年間在職、子の重宗ついで三十五年間も任にあり以後代々之に當つた。

4 外戚政策

この政策はすでに家康が企てたが後陽成院の勅許がなくて止んでゐたのに、秀忠の代になつては藤堂高虎と近衛信尋ノブノブとが周旋した爲めに元和六年第七女和子カクコが十四歳を以て御水尾天皇の女御に上り、九年には興子内親王が御誕生になつてゐる。和子はこゝに中宮に進み内親王御即位の後は東福門院といふ稱號を賜つた。新女帝は明正天皇と申す。

後陽成天皇——後水尾天皇——
 明正天皇
 後光明天皇

—後西院天皇

—靈元天皇——東山天皇

和子が入内の時は御附武家といふ武士を數十つけて上せた。之れ御所の用向を巨細となく足す爲めとは表面で裏からはそつと朝廷の事情を幕府に報じさせてゐた。

4 幕府の専横と紫衣事件

寛永三年に秀忠父子が上洛して天皇中宮に拜謁した時、黒衣宰相と云はれた例の崇傳がついて行つて、京都の僧には勅賜の紫の衣を有するものが大部にあるを見て歸つてから之は公卿諸法度に反してゐると述べたので所司代に申付けて奪ひとらうとしたのに、勅賜の品を取りかへすは不當なりといふので朝廷の役人も怒つた。大徳寺の僧澤庵玉室、江月等三人は應じなかつたので江戸送りとなり。澤庵は出羽の上ノ山に流された。天皇はお怒の餘り皇子高仁親王に讓位を傳へられたが幕府は内心大よろこびであるのに表面は恐縮の體を装ふた。然るに親王は三歳で薨去遊ばされたから明年(六年)

興子内親王に讓位を傳へさせられた。十月秀忠は一侍女たる春日を上洛せしめて、拜謁し天皇の御憤怒の度合と東福門院和子との間柄を内察せしめるや公卿は「無勿體事候。帝道民の塗炭に落候事候」と慨くに至つた。宜なる哉。十一月に天皇は急に御七歳の内親王に讓位遊ばされた。御製を御詠みになつたのもこの時である。

5 後光明天皇と御大徳

明正帝は御在位十五年二十歳で異母弟の御光明帝に讓位遊ばされたのである。この時新帝は御年十一歳に渡らせられたが「天下に君たるものは聖賢の道を學ぶべきである」と仰せられて御側の人々が御身體を氣づかふまでに勉學遊ばされた。御父御水尾上皇が御製の和歌を御覽になつて天才と御ほめになつた程和學にも長じてをられた。學問は主に儒學であつて朝山意林庵を召して師事したことは後三條帝が匡房を御召しになつたのとよく似てゐる。源氏物語の如きは淫猥の書と思召されておとり上げにならなかつたといふ位である。雷鳴を嫌つてをられたのに或る大雷雨の日玉座の外に出

御になつて之を御覽になつたことは名高いが、こゝに一の美談として徳大寺公爵家に傳つてゐる御太刀がなほ帝の聖明を語つてゐる。帝は御酒が大好きであつたので玉體をかばつて大納言徳大寺公信が御諫言を奉ると御怒りのあまり御佩刀に御手をかけて斬りかゝらうとせられた。この時公信は「帝の御手討ちは忝い。御酒の諫めとお取りかへ下さらば臣の寸命は惜しとも思ひませぬ。」と赤誠面に表はれてひれ伏した。人々は公信を退かせ帝はそのまゝ奥に入らせられたが、翌朝小倉實起を召して「昨夜のことを詫びる」と仰せられた。「公信はもう御所へは出まいな」と御嘆き遊ばされた時に「いや早朝より出仕に御座います」と申し上げると帝はいたく喜ばれて公信を召し御涙を落されて「汝の諫めは用ひるぞ以後酒はやめる。この刀は汝のものだぞ」と昨夜の御刀を賜つた。

この位の聖帝たるが故に政權の所在は如何あるべきかも御承知であれば臣下たる幕府の專横をも御見すかしてをられたので所司代を取つて抑へられたのであつた。

天子は文武の道をも辨へねばならぬと仰せられて擊劔をも御稽古遊ばされたが之は公卿諸法度の第一條に

一、天王者藝能之事第一學問也。不學則不明古道、而能致太平者未有之也。貞觀政要明文也、寬平遺戒雖不究經史可誦習群書治要云々、和歌自光孝天皇未絶、

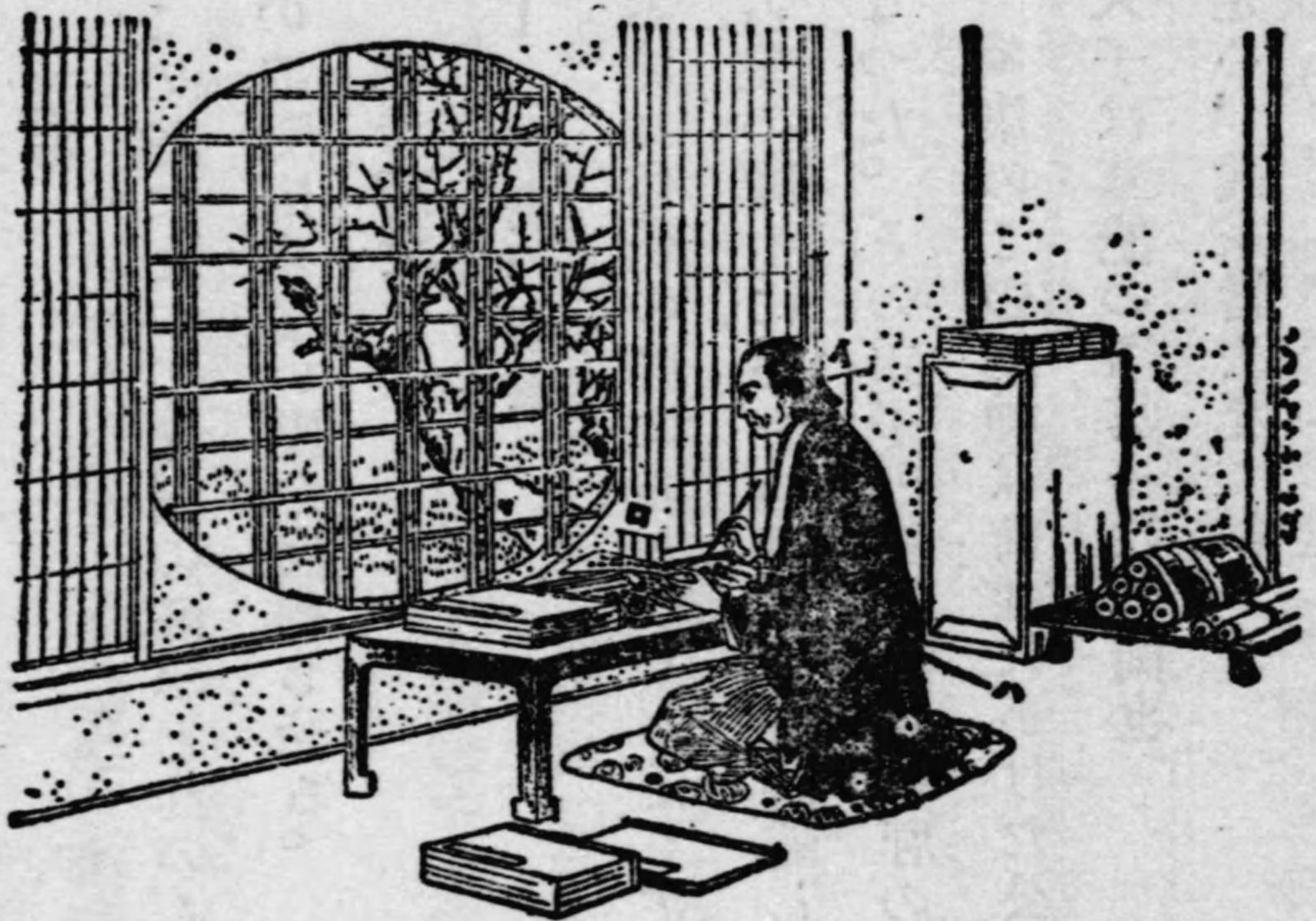
雖爲綺語我國俗也。不棄置云々、所載禁抄、御學習專要候事。

といふ様にあつて天皇は和歌でも詠んでゐて武事は遊ばすなといふ意味で禁物であつたから板倉重宗が驚いたのである。

重宗が腹を切らねばならぬと申し上げた時に、帝はすでに武士の切腹は御承知での御答へが頗る威壓するものがある。

「朕は武藝の練習は止めぬぞ。その實習として武士の腹切りも大切なり。幸汝は實演して見るといふならば紫宸殿の大前にて庭を設けてこゝにて致せ。朕はよく實見すべし。後方の爲めにいと幸の事ぞ」との仰は如何ばかりか幕府を恐れしめたらう。帝

の崩御は家綱の時代の承應三年、御年は二十二歳、天然痘の爲めに崩御遊ばされたのは哀の極であつた。次に靈元帝十歳で御即位遊ばされた。



第四十 徳川光圀

徳川光圀大日本史を著す

第四十 徳川光圀

徳川光圀大日本史を著す (四四頁)

一 説明

イ 徳川光圀

ロ 大日本史の校本

ハ 葵の紋

徳川光圀が大日本史を著した場所は現在の西山の別荘(茨城県太田町の西十餘町)で此の書齋は三疊敷ある。丸窓の前の梅の木は當時のもの、建物は一度焼失し其の後其の場所へ以前の如く建てたも

のである。

二 主眼

この繪によつて光圀の好學と其の人格、大義名分を明かにし水戸學風を開き他の學者の追隨出來ない點を體得させる。

三 參考解説

1 幕府の觀學

家康は倭寇の間にありつゝもよく文教の大切なことを考へてゐた。藤原惺窩(肅)が名古屋の陣中に召されて儒學を講義したことすらあつた位で後に江戸に招かれて學師となつた。その弟子の林信勝も幕府の御用學者となつた。信勝は道春とも羅山ともいふ。家康のこの精神は前課にあげた公卿諸法度にも

天子は藝能の事第一に學問也

と定め、武家諸法度にも

文武弓馬之道專可相嗜事

といつて左文右武は古の法としてである。家康が泯滅に類してゐた戰國以來の圖書を保存させようとして、禁中や院の御所公家等から蒐めたものは五山僧に命じて騰寫させた。夫は古事記、舊事記、釋日本記、續日本後記、文德實錄、等の類で非常に多いが更に學問を普及する爲めに刊行したものに、孔子家語、六韜三略、真鑑政要、東鑑、周易、武經七書、群書治要等はすべて活字を用ひた。

綱吉は自ら學問をし、本郷湯島の高臺に大成殿を建て林信篤(鳳岡)を大學の頭としてまづ官學を司らせ、自らも論語や孝經をこゝに來て講義した。弟子といふはすべて諸であつた。

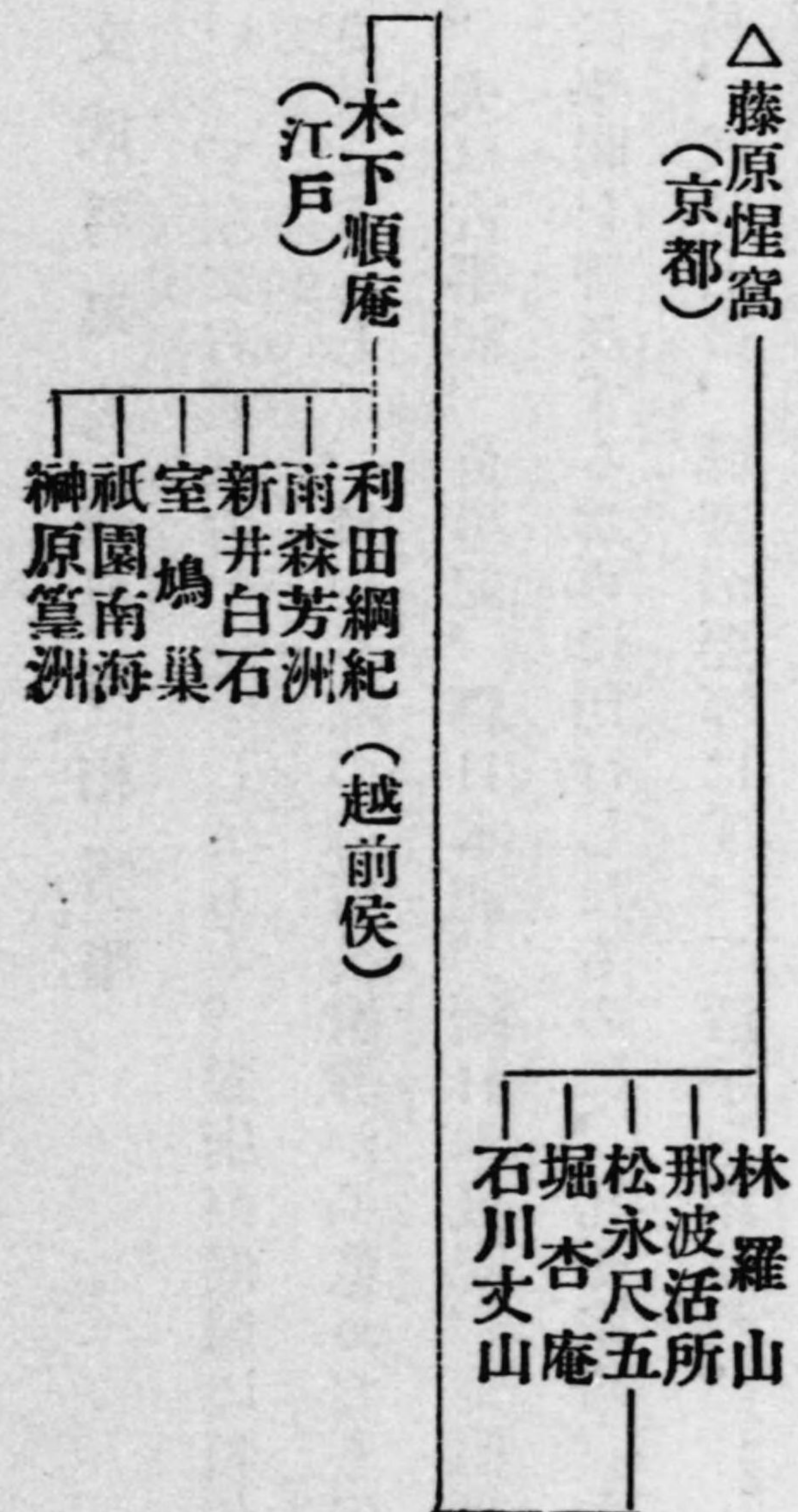
(大成殿は昌平學問所、後に昌平黌といふは昌平橋の外にある爲めで今の教育博物館と東京女子高等師範學校とを連ねた地域であつた。大成殿は大正十二年九月一日の午後五時に完全に焼けてしまつたので、後に同志の士がさゝやかな聖堂を建て、名残を

止めてゐる)

以來林家の學といつて林氏の子孫は長くこの學問を司つてゐた。

2 民間の學者

當時の儒者に、中江藤樹(近江)山崎闇齋(京都)山鹿素行、木下順庵(江戸)伊藤仁齋(京都)荻生徂徠(江戸)等は名高くその弟子も仲々に名を得たものがある。その系統を記して見ると、



△谷時中 (土佐) 小倉三省 野中兼山

△中江藤樹 熊澤蕃山 池田光政

△山崎闇齋 (京都) 吉川惟足 (吉田流神道) 淺見綱齋 佐藤直方 三宅尙齋

△山鹿素行 (赤穂) 大石良雄 子 東涯 伊藤仁齋 (京都)

△荻生徂徠 (江戸)

服部南廓 太宰春臺 山縣周南 安藤東野 平野金華 高野蘭亭 宇佐美澹水

△中村暢齋 (弟子ナシ)

△貝原益軒——東軒(妻である)

この頃は國學もすでに興つて來た。

加茂真淵——本居宣長——平田篤胤

△荷田春滿——在滿

△下河邊長流——△僧契冲——△北村季吟

3 水戸光圀

光圀は家康の孫で頼房の三子、寛永五年に生れ幼名は千代松麿といひ九歳で元服して家光の一字を賜つて光圀となつた。

十八歳の時に史記の伯夷傳を讀んで伯夷叔齊の高節に感じたといふ。伯夷と叔齊とは兄弟で殷の紂王の臣であつた。父の孤竹君が弟の叔齊を嗣としようとして歿した。後で叔齊は兄に譲り兄は父の命とて弟に譲り互に禮節を守つてゐた。周の世となつて武王が紂王を亡したのでその民となるを恥ぢて首陽山にかくれ蕨をとつて喰つてゐた。

がつひに餓死した人々である。

光圀の人物は義公壁書によく見えてゐる。

- 一、苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし。
- 一、主と親とは無理なるものと思へ、下人は足らぬものと知るべし。
- 一、子程に親を思へ、子無きものは身にくらべて近き手本とすべし。
- 一、掟におちよ火におちよ分別なきものにおちよ。
- 一、正直は一生の寶、慈惠は一生の祈禱、堪忍は一生の相續と知るべし。
- 一、恩を忘るゝ事なかれ、慾と色と酒とは敵と知るべし。
- 一、朝寢すべからず、咄の長座すべからず。
- 一、小なる事は分別せよ。大なることに驚くべからず。
- 一、九分は足らず、十分は溢るゝと知るべし。

元祿十一年二月十四日

大日本史編纂は大事業であつた。明應三年に江戸の本郷の駒込の下屋敷に史館を設け學者を招いて着手したが寛文十二年には小石川の邸に彰古館を建てた。其の學者に佐々宗淳、安積澹泊、栗山潜鋒、三宅觀瀾等が順次總裁となつてゐる。文體は記傳體をとつて三百九十七卷、二百二十六冊、目錄は別に五冊神武帝から後小松帝まで百一代間の歴史である。主なることとして、弘文帝をとらず、南北正閏論では南朝を正としてあること等であつて、之を要するに大義明分を最もよく表はしてゐる。

光圀の消息をよくかいてあるものは桃源遺事であるが、之によれば元祿五年八月に臣の佐々木三良と良峯宗淳を湊川に遣り楠正成の墓を修し碑を立てさせたが「嗚呼忠臣楠子之墓」と自筆し、碑陰には朱舜水の讚がある。舜水は明の遺臣で當時日本へ逃れて來てゐたのを光圀が水戸へ聘しておいたものであつた。

元祿三年に六十三歳の時歸國した光圀は太田町の西山に山莊を結んで隱退した。それ故に西山公といはれてゐるが、一汁二菜の質素な生活をしてゐられた。廻國の話は民間に美談として傳つてゐる。元祿十三年に薨せられたので水戸家の墓地瑞龍山に葬つた（太田町の北一里ばかり水戸から輕便線がある）明治三十三年正一位を贈られ、水戸の常磐神社は齊昭と合祀された格別官幣社である。



大石良雄等その主の讐を復す

第四十一 大石良雄

大石良雄等その主の仇を復す（五〇頁）

一、説明

- イ 大石良雄
- ロ 原惣右衛門
- ハ 堀部安兵衛
- ニ 布を巻いた長刀
- ホ 富森助右衛門
- ヘ 大高源吾
- ト 大石主税

この繪は最も信すべき資料によつて編纂者が畫

工に命じて書かしめしもの。場所は兩國橋である。

二 主眼

本課の如き課は記憶を要求すべき教材ではない。專一に情操の陶冶を心掛ねばならぬ。

義士が赤穂城引上げ以來二年間苦心慘憺周到なる企劃により亡君の遺恨を報ひた義烈の行爲千古の下情夫を起たしむる慨あるを感せしむるにある。

三 参考解説

1 綱吉の善政

綱吉は十一歳で軍職をついだ。保科正之が酒井忠勝や松平信綱、阿部忠秋と共に輔佐してよく英主の譽を高からしめ、慶安の事件も未然に防遏することが出来た。綱吉立つては下馬將軍酒井忠清を斥けて堀内正俊を用ひ、母の桂昌院の用心で經學を修めよく諸侯の尊信を得て居たが、仁慈に偏し且つ大局に通じなかつた缺陷があつたのは

玉瑾といへよう。

2 綱吉の弊政

老中堀田正俊は執政あまりに峻嚴に過ぎたので稻葉正休の爲めに殿中で刺されてからは側用人を増員したが、柳澤吉保がこの機に乗じて出世したのは異例であつた。彼は綱吉の學問の弟子であつた。

この時知足院の僧隆光は自家の主意に反しつゝも甘言を奉つた。「嗣子なきは生類を憐まざりし前生の果報なり。若し之を欲せば殺生を禁じ殊に御生年の犬を愛せよ。」と何たる諫言ぞ。これで國政が定るのだから恐れ入る。生類憐令といふものが貞享二年から元祿十一年までの十三年間に六十餘回も出た。而も一令は一令より嚴を加へて、犬を殺して斬首されたり、泥棒犬に棒喰はして辻番所に引かれたりするものがあつたといふ。「犬が臺所とても荒すまではそのまゝおけ、もし仕方がない時は水をかけよ」といふのだ。雨がふつても傘もささない畜生が水でおちよう筈がない。市外の中野に

犬小屋を作つたのは元祿八年其の地域は十六萬坪、之を督するに犬小屋奉行、之がみとりに犬醫者をおき主なき犬を收容すること十餘萬匹、江戸市民からは犬金上納として毎日〳米を三百三十石と味噌を十樽、干鰯ヒボシを十俵、薪を五十六束取り立てた。人間でも食にはぐれるものがある大江戸に犬だけは中産階級の生活が出来て而も明日の心配もないとはさても呆れた世の中であつた。

幕費が不足勝ちになるのも無理はない。こゝに萩原重秀の議を用ひて鍾錢ビシヤンを鑄たため、貨幣の價格が下つて物價騰貴を來すに至り一方太平の世の華美はつるばかり新井白石の筆で見ると、この間六十年間に二百三十九萬七千餘貫の金貨と三十七萬四千二百二十九貫餘の銀、銅は四十四年間に十一億千四百四十九萬八千七百餘斤が外國へ流出してゐるとある。だから鑛山から出る金銀はすべて貨幣とする有様で品質は落ちて物價は上るこれが元祿時代の經濟状態であつた。

3 元祿時代の風

この間に發達したのは平民文學であつた。小説(浮世繪草紙)は井原西鶴によつて起され小野お通が淨瑠璃十二段草紙を綴つたのが淨瑠璃のおこり、近松門左衛門の靈筆に成る淨瑠璃を妙音に語らせ竹本義太夫の名は天下にひろく平民的なうたひものとして喜ばれた。竹田人形は之を三味に合せて木偶を活動させるとつひに市川團十郎が肉體を以て之を演ずることに妙を得た爲めに芝居となつて流行したのである。

町人はおろか武士が武勇を尙はず所謂元祿風を裝つて遊野郎を氣取つたので、町奴の伊達衆といふものが一方に之を疎んじて常にかゝる武士と争つて來た。

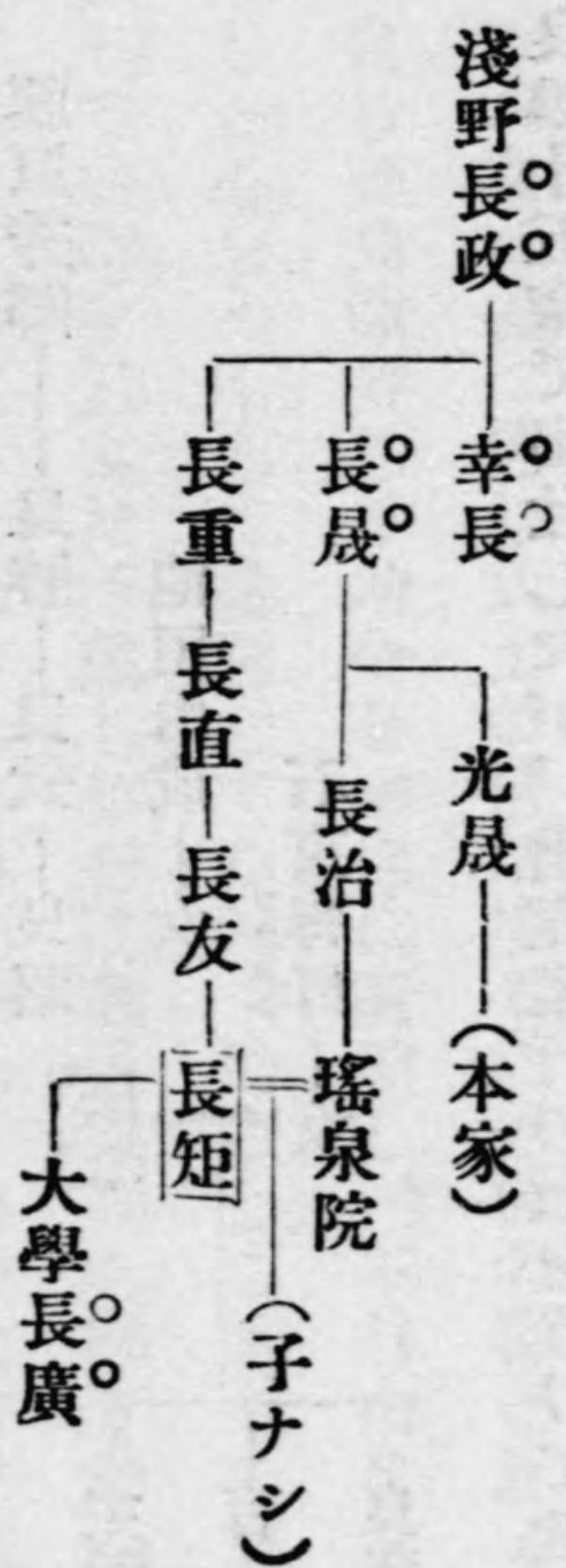
4 淺野長矩の刃傷

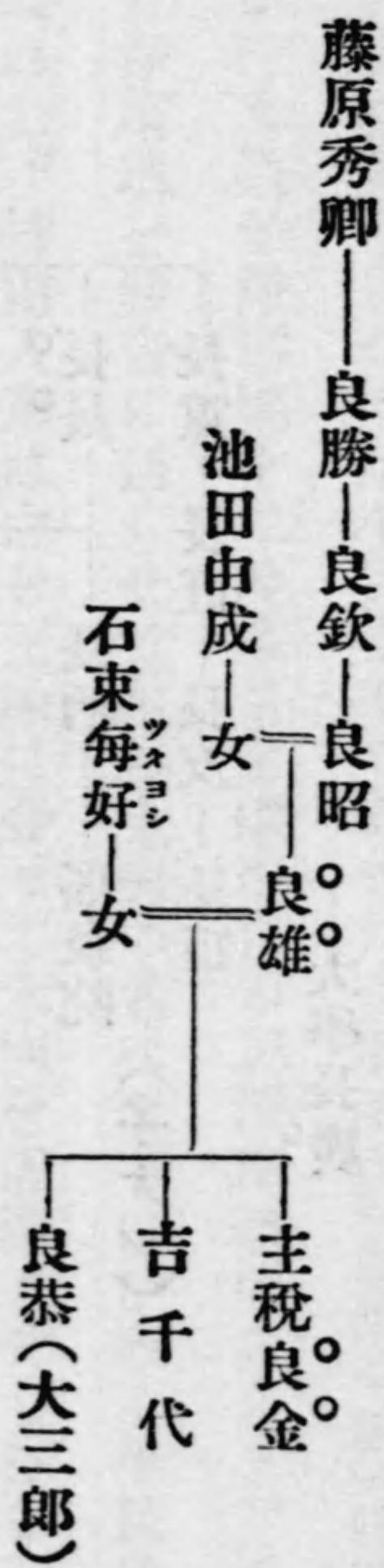
長矩の刃傷はよほどの事であつた。いかに短氣といつても一國の城主、規則位は知つてゐた。時は元祿十四年三月十四日の出來事である。下向の勅使は前大納言柳原資廉、前中納言高野保春、及び院の御使として前大納言清閑寺熙定であつた。長矩が己を凌辱した吉良義央を殺し損じたのは力量家梶川與惣兵衛照頼に後から支へられた爲

めで、其時長矩は「梶川殿情におはなし下され」と懇願したのに放さなかつたのは梶川は頭の利かぬしれ者であつたと見える。長矩が義央に刃傷するや嚴則により即日芝の田村町の田村右京太夫建顯タケノカミの邸(今もある)公孫樹下で腹を切つたのであつた。

5 大石良雄の人物

大石は藤原秀郷の裔で近江の大石村に住んでゐたので姓をとつたものである。良勝が始めて淺野家の臣となつた時同じくこゝに移つたもので孫の良昭は岡山の池田家の家老池田玄蕃由成の女を妻にして良雄をあげてゐる。





良雄十五歳で出仕したが、山鹿素行の教をうけて武士道を辨へ後に京都の伊藤仁齋に師事した。良雄は仁齋の講義中に居眠をはじめたことがあつた。終つて門人共は之をのゝしつてゐたのを仁齋が聞いて「良雄は凡庸の人ではないぞ、打ちおけく」と言つたといふが偉人の眼には偉人がうつるのである。なほ劍術は高松の奥村權左衛門に學んでゐる。良雄はかくて漢學和學おさめ繪もかいた。良雄が迎へた妻は但馬の豊岡の京極家の臣石東每好の女で貞節の女であることは周知の事實である。良雄の血が武士道に固つてゐたのは山鹿の感化であつて、吉田松陰や乃木大將と通じてゐる。その山科の隠棲中苦しい酒をのみ、心にもない遊里に足を入れ外見を放蕩兒として

内に尺寸の刀を磨し陰に同志の士を操縦してゐた才腕はすべて嘆稱の他はない。

6 義士の復仇

元祿十五年十二月十四日の夜は大雪であつた。この時四十六人は本所松坂町の吉良邸に討入り本懐を達し、義央の首は海路之を泉岳寺に廻し堂々勢をそろへて、缺けたもの一人もなく陸路勇ましく引上げた。義士の中には苦しい浮世の義理をすてたものが幾人もあつた。十五日のひるごろは瓦版の讀賣りが市内をとんだ。(今ならば號外が飛ぶのだが)四十七人は細川綱利、久松定直、毛利綱元、水野忠之の四家に預けられた。四家は義に勇む武士の世話することを名譽と思ふたのであつた。中でも細川綱利は自ら齋戒沐浴して助命を神佛に祈願し、不自由なき様もてなしたが他の三家も我劣らじと心をつくして餐應してゐた。助命をこふものが多かつた。林信篤も之の擧を稱賛して助命を乞ふた。然し幕府は赦免すると終りを全うし得ぬものがあつては却つて彼等受害として十六年二月四日に死を賜つたのであつた。

淺野大學は召出されて五百石の旗本となつたが、吉良義周は父の討たれた時の仕打ちがよくないとて十八歳で諏訪忠虎に預けられ間もなく死んで家は断絶した。

7 義士の批判

義雄等の擧を可とするものと否とするものがあつた。

△可とするもの

林信篤……切腹の後哭辭を賦す。

室鳩巢……義人録を著はす。

△否とするもの

佐藤直方
太宰春臺

時と處を辨へぬと長短を批難し義士を見當違ひしてゐる。

たとへ兩様の説はあつたとしても稱揚論者の方が優勢であつて反對論者は理窟を主としたものであつた。良雄等の行動は沈著で堅忍不拔、武士道の典型と見なければならぬ。當時の世相から考へて見てもこの産物を得たことは決して時代が然らしめたも

のではない。赤穂五萬石の小藩から五十近い義士を出したことは何といつても異例であつて偏に良雄の人格の顯現である。十九年も赤穂に止まつてゐた山鹿素行の薰陶も與つて力があるのでよく之が我が國民に適合したことは、義士が詩となり歌となり戯曲小説にまで綴られて稱へられ、(このことを仕組んだが後の假名手本忠臣藏で芝居道の獨參湯とまで稱せられる。)義士の譽は如何程後人に感化を與へてゐるか知れない。

○教授上の注意

本課あたりの教授になれば歴史學的の教法では全く拙策といはねばならぬ記憶を要求すべき教材ではない。專一に情操の陶冶を心掛けねばならぬのだ。前教科書にない材料を特に新教科書に入れたのは衷心うれしい。然し之が金科玉條ではない目的を遂行するにはなほ幾多缺陷が見える。けれども之は教授法の如何によつてどうにでもなること、文字や文章を傳へるのみさへしなければこの補ひは直ちにつくことである。

第四十二 新井白石



朝鮮使者の行列

朝鮮使者の行列 (五四、五五頁)

一 説明

- イ 大森
- ロ 韓人の伶人(七人より成る)
- ハ 國書を納めた輿
- ニ 正使
- ホ 大鳥毛
- ヘ 騎馬の中宮
- ト 人夫(四人づゝ)
- チ 韓人の隨員

この繪は秋元子爵家の藏品朝鮮人行列繪卷から取つたものである。使節には正副使各一名従事官一名があり、これを三使といふ。その他馬醫侍者や上官中官下官の三官などがあつて一行數百人の多きに上つてゐる。この繪には見えないが後にまだ副使等の輿が續き随分長い行列である。幅の廣い帽を戴いてゐるのはすべて朝鮮人である。

二 主眼

家康が朝鮮と親交を修めてから將軍の代がはりごとに聘使が來た。幕府では只之を優遇し府庫の豊富であることを示すに止まり諸侯の迷惑が少くなかつた。それ故白石の建議により待遇法を改むるやうになつた。この繪は如何にも仰々しき有様を示して白石の建議の至當であることを知らしむるのである。

三 参考解説

1 家宣

家光の第三子の甲府宰相綱重の長子で綱吉の兄であつたが母が賤しかつた爲めに家

老新見正信の許に養はれてゐて、随つて下情にも明るかつた。はじめ綱吉と襲職の争ひをしたので仲悪しく、綱吉の世子がなくなつても綱吉は子を擧げる事の祈禱を熱心にした位で世間では家宣（綱豊といつてゐた）を呪するのだとさへ唱へた程であつたけれども寛永六年正月十日綱吉は薨じ、嗣が絶えるので當然の順として世をついだのであつた。家宣はその十四日に老中以下を召して、「前代の如く柳澤吉保に申し上げて又將軍に申し上げたことは今後改める。」と申し渡して人々の膽を冷したのをはじめとしてこれから弊政の改革が行はれるのである。生類憐令も廢せられた。幕府への内證の贈献も役人への贈献もすべて廢された。その代り獎勵されたのは武藝である。吉保は居たまられず。六月に隠居した。人民は之を大いに謳歌した。落首に

前代の龜の甲府が代となり寶永事よ民のよろこび

民の喜びはその如何であつたかを窺ひ知られる。

政治は間部詮房（御側用人）と新井白石（御儒者）の二人の手にあるまで重用した。

2、白石の出生

白石の父は土屋氏の臣與次右衛門正濟といふが後辭して堀田正俊に仕へた。正俊の遭害後は零落したので白石は貧しい生活の家になつた。或時其師木下順庵の爲めに加賀侯前田利常に薦められたが同門の友人岡島石梁に之をゆづり後に再び甲斐に薦められたので仕へたのが出世の緒口である。白石と家宣とは水魚も雷ならぬ仲であつた。白石の人格として見るべきは、同門の友、三宅觀瀾も室鳩巢も深見天猗もみなその推舉で幕府に出仕してゐる事である。（参考——白石傳、折焚柴記等）

3 家繼の就職

家宣は正徳二年十月十四日に五十一才で薨去した。生前から後嗣として四才の家繼か又は尾張から吉通を迎へるかの二つを以てその一つにしようとしてゐた。白石は後の騒動を恐れて堂々家繼説をといた。家繼は經書に通じてゐたし藝術にも明るく造庭建築にも疑り過ぎる位であつたから白石の諫めを時々うけたが何分人を察するの明あ

る主であつた爲に、間部や新井の手腕を充分に振はせたのが何よりの取り所である。悲しいかな薰蘭に秋風、在職僅かに四年で薨去とはまことに玉を奪はれた様な感じがしてならぬ。

4 白石の政治(其の一) 四親王家

白石の封事として名高いのは皇子皇女の出家を廢すべき先例を破ることであつた。折焚柴の記に見えるところによると、人情としてその子女を廢することは庶氏もしない。先例であるとして上が黙つてゐられるのを打ちすて、おくのは政者のすることでないといふ意味であるが、家宣は之を用ひて朝廷へ奏上したので東山法皇の第三子である中御門帝の皇弟秀宮に閑院宮直仁親王といふ宣下があつた。白石の功勞はこの爲めに大なるものがあつた、後桃園帝の後がなかつた時に閑院宮家から光格帝が立たれた。仁孝帝、孝明帝、明治帝、大正帝を経て今上帝はその御皇統である。

閑院宮家が出来て、從來の伏見宮、京極宮、有栖川宮と合せて四親王家と唱へられ

る。

同 (其の二) 鮮便接待改善

朝鮮との交通は家康が開いたが、家光は幕威を輝かさうとしてその遣使を大いに好遇したのが本で分にすぎた習例となつてゐた。將軍の代がはり毎に大行列で御祝言に來る。幕府は之を迎へて、沿道の大名に課して、朝夕七五三晝は五五三といふ膳部の御馳走を供し、其の上大阪、京都、伏見、駿府等では大宴會をひらいて好待したのでその費用も莫大に上り又こんなことは勅使に對してもせぬ所ですては廢止の意見をのべたのである。そして接待は彼我對等としたのであつた。

同 (其の三) 貨幣改鑄

家康が貯へておいた金は綱吉の奢侈からしてつかひ果しなほそれで足りずに、萩原重秀をして惡質の貨幣を鑄らせたので物價は高くなり、良貨は姿を消した。白石は家宣に建議して見たが實行は不能であつたが家繼はその議を用ひて改鑄した。

同（其の四）金貨流出制限

外國に流出する貨幣（金貨）は國內では掘り出す高の四分の一を失ふことに當つてゐる。金は一度とると又とないから國（内國に）へおけとの方針で海船互市の額が定められたのであつた。即ち

唐人船——年三十艘

阿蘭陀——年二艘

といふので之によつてよほど制限された。

5 白石の著書

白石は政治家である一面に又博識の學者であつた。六十歳で辭職して後種々の書を作つてゐる。内で藩翰譜、讀史餘論、本翰軍記考、東雅、西洋紀聞、采覽異言、折焚柴の記等は有名である。



第四十三 徳川吉宗

徳川吉宗オランダ人を招いて部下に馬術を授けしむ

第四十三 徳川吉宗

吉宗オランダ人を招いて部下に馬術を授けしむ

(五八頁
五九頁)

一 説明

イ ケイヅル

ロ 洋馬

ハ 幕府の馬術師

この繪は幕府の馬術師であつた安達氏の家に傳はる和蘭馬藝圖によつたもので原圖はもつと長いものである。吉宗は長崎に來りし蘭人ケイヅルを江戸に召し竹橋御門内の馬場で其の馬術を見た。その頃齋藤三右衛門盛安なる

ものが彼の弟子となりて騎法を習得した。當時一般に行はれてゐた和風の乗鞍は中古の遺物で實戦には適しなかつた。圖のケーツルの乗つてゐる鞍は今日のものとは大差はない。其他の馬具も同様であることに注意したい。

二 主眼

幕府の統が絶えた時、吉宗は紀伊家から入つて軍職を襲つた事情を明かにし吉宗の聰明なる資はよく元祿の風を矯め人才を用ひて善政を布き産業をすすめ一方には畜産の道を講じたことが徳川治世の中に特筆すべきものがある。

本圖は鎖國時代に於ける吉宗の向上心を知らしめ現代の政治文藝其他萬般の進歩に影響せることの偶然ならざることを知らしむるにある。

三 参考解説

吉宗が將軍となつたのは享保元年三十三歳の男盛りの時である。それから延享二年の六十二歳まで凡そ三十年間がその治世である。系圖は

家康——南龍公(頼宣)——光貞——吉宗

はじめは越前の鯖江の三萬石の大名であつた。それが二兄の天死で本家紀伊をついだが將軍家繼が八才で薨じたために家宣の遺言によつて柳營の主となつたのである。

1 吉宗の主義

吉宗は四代以下七代までは大抵老中や近臣の手に政權があつたのを不可と考へて、自ら執政をして功臣もゐたまらない位の力量を持つてゐた。

2 人材登用

自分の思ふままの政治を行ふには服心の士を得る必要から紀州の藩士であつた有馬氏倫、加納久通を側用人に登用したけれどもその紀州系統を多數とり入れて偏愛に溺れる様なことはなく、先代の名臣碩儒はすべてこれを再び登用した。

大岡忠相が紀伊家から登用されたことはよく人の知るところである。

3 吉宗の政治

(1) 士風振興

元祿の文弱を矯める必要からといった手段であつた。鷹狩が衰へてゐたのを（生類憐令によつて）復興させた。鷹師頭を置いて（戸田勝房、間宮敦信）。

狩獵も大いに増された。小金ヶ原の大狩は享保十年十一月とつづいてゐるが前年には二千七百兩、翌年には五千二十一兩を費し大獲物を得てゐる。諸大名も大分その感化をうける様になつて來てよろこばしい現象を示した。

游泳は武士の大切なことゝて之を旗本に奨励したり、武家の大事な故實を研究させたり。名ある刀鍛冶をして奨励し自らも新刀を差したなどは世に刺戟を興へてゐる。なほ浪人でも武藝の上達してゐるものは引見して登用するので大いに武藝は振肅した中でも特筆すべきは馬術の名人和蘭人ケイツル氏が享保十三年に來朝したので富田又右衛門をして之を學ばせて士人を取り立て遠乗りも屢々行はせてゐることである。

(2) 財政々策

吉宗の政治中最も目立つものはその財政々策であつた。窮乏の後をうけた爲めに一層力をこの方面にこめてゐた。

足高の法を立てた（享保八年）夫は小身のものが高官に拔擢された時には、（五千石以下であつて登げられた時はその者は困窮するから）その不足額丈けを在職中補給するのである。

五千石の役の外すべて役は石高で定めてあつてその身分以下のものが任官した時は常に不足額を補つたのであるだからタシカである。一方には勤儉をすゝめて治績を擧げたが同時に米價が下落したので吉宗は心配した。之は米を作る農民と封米の餘りを賣つて生計を立ててゐる武士が苦境に立つからであつた。良價の改鑄をしたので其の新貨幣は富豪の倉中に藏められて通用せず貨幣の價が上り物價はますます下落したので萩生徂徠は鐵錢の鑄造説を立て、用ひられんとしたことさへあつた。吉宗の租法は定免法である。これは數年間の平均を見て率を定めて、出來不出來にかゝはちずある

年限間はとり立てるのである。天災の時之を減じたときは破免ハクマンといつた。

4 學問獎勵

吉宗は紀州藩主であつた昔から、學者をして漢籍の講話をさせ和漢の書に眼をさらしたので將軍となつても士臣に自ら講義をしたり宿直の士には勝手に讀書もさせてゐた。又私塾を獎勵したり禁酒の取締りを寛にしたりしたが、吉宗の傑いところは又他にあつた。朱子學を主んじてゐるは當然だが萩生徂徠クイエンの護園學派の説も、外國の學もすべて排斥しなかつた。享保八年には下田師古は抜かれて國學を以て仕へ吉宗自らも古書をよんだ。室巢鳩の重用と同時に鳩巢の喜ばなかつた異派の學説もきいてゐる。木下順庵の子の菊潭や萩生惣七郎に講書させたり、享保五年には禁書の令を寛にし延享元年には青木文藏を長崎にやつて蘭學を學ばせたので、その影響は次第に、天文、醫、動、植物、地理學等の科學が入つて來る。神田の佐久間町には司天臺が設けられ中根玄圭をして西洋の曆學を研究させたりした。而し耶蘇教は國禁であるからその書

は決して讀ませなかつた。

吉宗の學問はすべて修身齊家を基とし文藝には一も二もなく反對であつたことは注目すべきである。彼はすべてが、實務に用ひられる學問でなければとらなかつた。こゝを綱吉の獎學と相對して考察して見ると頗る面白いものがある。

けれども學問に流義立てをしなかつたことは、その位置にある人として卓見とせねばならぬ。

5 風俗矯正

士風矯正と同時に、不孝なものを罰して孝行なものを賞し、旗本の士から先づ手を下してかゝつた。賭博を禁じ情死を禁じその屍體は非人同様とし、名稱も心中はよすぎるとして相對死といはせた。隠賣女イイダメをも充分に取締つてゐるし、よくない宗教も罰したがその勢力は容易でなかつた。然るに後に田沼時代に又も逆戻りしたのは遺憾にたえない。

6 法典の制定

成文の法律がなく奉行の手心の裁判は不可として老中松平乗邑を總奉行として三奉行と共に公事方御定書（御定書百ヶ條）を修した。寛保二年のことであるが之に力をつくしたのは大岡忠相であつた。忠相は公明な男で、理の前には決して權威を恐れなかつた。伊勢の山田町奉行であつた時に、山田の農民と松坂の民とが争をして訟へたことがあつても、前の奉行は、永く判決を下さなかつたのを名刀快斷的の判決をしてゐる。それは。松坂は紀州領であつたので多少横暴がましいことがあつたし、奉行も一神宮に關する地のことは畏いとて取り上げなかつたので久しく打ちすてゝあつた。而も非は充分に松坂町民にあつたので、忠相は町奉行になるや否や「これ宗室を憚り取扱ふべきものにあらず」といつて忽ち松坂町民を罪におとした。奉行の替る毎に訴へ出た争ひも直に裁決されたので彼の公平振りは周知のところとなり、名判官の名はこれから高くなるのである。吉宗は當時紀州藩主であつたが之をきいて大いに感じ政を

委ぬべきものとして、將軍となつてから享保二年に江戸町奉行とし越前守に任じた。忠相の裁判中には有名な事件が大分あつた。吉宗法典制定に方り與力ながら加藤村直の通達しゐるのを用ひ、室鳩巢や成島道筑や成島の弟惣七郎等も參與したので比較的精鍊されたものが得られた。けれどもこの百ヶ條は人民に示すものでなくて奉行の參考條例であつた。吉宗は又目安箱を設けて官吏の不正の行爲を訴へさせた。これは公論にととの意趣で誠に得た策といへる。それが爲めに町醫者小川笙船の建議で養生所を設け、山下通内の時弊直言の申立もきくことが出来たし、防火制度もその爲めに出來た。非人が火事盜棒をやるものが多いので、髪や服を制限してゐる。その他家屋構造を改め土藏造りを命じたり、避難地を定めたり、四十四組の火消制度を建てたりした。江戸ツ子氣質は旗本の士風の頽れの反對にこゝに見られたのだ。

7 産業奨勵

吉宗はまづ産業をおこさせる前に全國の人口の統計をさせた。甘藷は薩摩では日用

食としてゐたが之各地ではを盗んで来て個人的に栽培してゐたのであつたのを凶年の用に荒地でも出来るこの植物が供されるといふ見地から青木文藏が命をうけて蕃諸考を書いて献じ平野良右衛門をして吹上御苑に栽培させ、諸國に傳へしめたのである。平賀源内をして砂糖製造を傳へしめた。此後砂糖が國産となるのである。其他には荒地を拓かせて産業をはかつた。其結果として諸國には特産物が多く出来る様になつた阿波の藍、薩摩の煙草、甲斐の絹、土佐、伊豆の鯉、節瀬戸内海沿岸の鹽、兩毛の絹織物、甲斐の葡萄、等は皆産業獎勵の結果として名を知られて來たものである。

8 三家

吉宗には子が多勢あつた。長男家重の他の二男は宗武と宗尹であるが、田安門と一橋の門内に住居させて家族としておいたのは繼嗣なきときの用意であつた。次の家重はその子重好を清水門に住居させておいたので、世人は之を田安家、一橋家、清水家といつて三家と呼んでゐる。果せる哉十代には子がなかつた。十一代家齊は一橋家か

ら入り宗武の子の松平定信がその補佐をしてゐるのである。

9 中興英主

吉宗は享延二年に辭職して西の丸にうつり家重の後見をしてゐたが、寶曆元年に薨じたので寛永寺に葬つた。遺命で靈廟を營まないのである。諡號は、有徳院、世人はその善政を稱して中興の英主とたゞへた。

○青木昆陽について

昆陽は名を文藏といふ。近江の人。伊藤東涯に學び後大岡忠相の爲めに知られて幕府の書庫の閲覽をゆるされて學を深くした。後に至つて書物奉行となつたのもかうした關係による。七十二歳で歿したが墓は今に、東京府下荏原郡下目黒の龍泉寺（目黒不動）裏に甘藷先生之墓と記してある。その始めて甘藷の試作を行つたのは、下總の太子堂村と幕張村であつた。今千葉縣幕張町の小學校側には昆陽神社の小祠があつてその前面一帯がその試作地である。



松平定信海岸を巡視す

第四十四 松平定信

松平定信海岸を巡視す (六五頁)

一 説明

イ 松平定信

ロ 従者

ハ 將軍から貰つた革袋

この繪は松平定信が寛政五年三月十八日から四月七日までの間に伊豆相模安房上總下總の沿海を巡視した際東京灣の咽喉に當る三浦半島の西海岸を巡視中を描いたもの

である。

此の時定信はまさに血氣盛の三十六歳の時であつた。一行の小人數なることは其質素をあらはしてゐると見ねばならない。

二 主眼

八代將軍吉宗の政も田沼時代の現出を見るに至つて世は安らげくなかつたが賢佐松平定信の赤誠によつてこれが挽回を圖ることが出來たのであつた。然るに黒船來の噂が喧しく心あるものは何れも海防の忽にすべからざるを思つて居た。定信も常にこの問題のために心を惱ましてゐたから、執政の筆頭となるや、永久防備の方法を講じ自ら沿海の巡視までして治世に焦心した。本課に於ては其熱誠を知らしむることを眼目とする。

三 参考解説

1 田沼時代

第四十四 松平定信